

札幌国際大学 北海道地域・観光研究センター 年報 第7号

札幌国際大学  
北海道地域・観光研究センター 年報  
第7号

札幌国際大学 北海道地域・観光研究センター

札幌国際大学  
北海道地域・観光研究センター

札幌国際大学  
札幌国際大学北海道地域・観光研究センター年報  
第7号

目 次

<事業報告>

今金町との連携事業 .....	1
社会人教養楽部 .....	3
スポビズカフェ .....	5
マチ観フェア .....	6

<論 文>

北海道の離島における観光振興の諸課題 .....	越塚 宗孝・森 雅人・丹治 和典 .....	9
－焼尻島を事例に－		
今金町における着地型観光に関する研究 .....	丹治 和典 .....	32
ビジットジャパン以降の北海道の国際観光動向と 国際観光（インバウンド）の枠組みに関する研究 .....	千葉 里美 .....	41
知床・産業系列設置の経緯 .....	橋口 友和 .....	56

<調査報告>

天塩川流域地域の広域的な観光交流の基本的な方向について －教育、研修旅行に主眼をおいた観光企画商品の開発に向けて－ .....	斎藤 正紀・井上 博登 .....	69
美唄市内の地域資源を有効に活用した着地型観光企画商品の開発に向けて .....	斎藤 正紀・井上 博登 .....	79



<事業報告>

## 今金町との連携事業

本学と今金町との連携協定に基づき、下記の事業を実施しあわせて協議を行った。

実施時期・場所	参加者	事業内容
平成26年7月19～21日 今金町	札幌国際大学・大学院 外国人留学生9名（中国2名、韓国1名、台湾2名、ロシア3名、タイ1名） 丹治和典 他教員5名 今金町 田中崇・加藤剛広・本間晃	『外国人留学生を対象としたモニターツアー』 「北海道における国際観光推進プロジェクト」として、今金町における外国人を対象とした着地型旅行商品の可能性を検討するためにモニターツアーを実施した。 今金町における観光モニターツアーを通じて、ツアー参加者の視点から観光対象等を評価してもらい、今後の訪日外国人来道者誘致、観光まちづくりに資するものとするための情報収集とその評価を行った。
平成26年10月17日 千歳市	札幌国際大学 丹治和典 今金町 田中 崇 （コメンテーターとして）	『千歳国際観光アカデミー』 「個人型外国人観光客の誘致促進と受入について」というテーマで開催されたフォーラムに外国人留学生の成果発表に対するコメンテーターとして参加した。 今金町を調査フィールドとして個人型外国人観光客の誘致促進と受入体制整備の知見を得るため、モニターツアーを実施した結果を、同アカデミーにおいて発表した。共同研究で得た知見の発表、専門家を交えた討議を行い、参加者と共に標記の課題に対する問題意識を共有した。
平成27年1月23～25日 今金町・函館市	札幌国際大学 観光学部学生5名 丹治和典 今金町 加藤剛広・本間 晃	『厳冬の今金～スノーシュー・トレッキングによる小さな旅』（モニターツアー実施） 「今金町における着地型観光に関する研究」の一環として、冬季の旅行商品開発のためにモニターツアーを実施した。函館在住者が1泊2日で冬の今金町を楽しむという想定で企画された旅行のモニタリングを行った。スノーシュー・トレッキングを2回行い、その記録を参加学生たちが「旅行記」にまとめ、web上（札幌国際大学北海道地域・観光研究センターHP）に公開した。

開催月・場所	出席者	協議内容
平成26年 5月 札幌国際大学	〈札幌国際大学〉 越塚宗孝（学長）・丹治和典 〈今金町〉 外崎秀人（町長）・森 朋彦・田中 崇・山田 薫・早坂 靖・加藤剛広・本間 晃	今年度の共同事業について 外国人観光客の誘致に向けて、着地型旅行商品のモニターツアーを実施することを提案した。8月上旬に計画。 共同研究「今金町における着地型観光に関する研究」を一層推進するための研究計画を協議し、連携事業の進展を確認した。
平成26年 8月 今金町	〈札幌国際大学〉 丹治和典・川名典人 〈今金町〉 田中 崇・加藤剛広	外国人観光客の誘致について 札幌国際大学大学院および学部在籍する外国人留学生のモニターツアーを2泊3日で実施した際に、旅程の確認とともに、実施内容の検討を行った。同計画の特徴の一つとしてタブレット式PCによる情報発信を行うこととして、WIFI環境の実態を確認した。
平成26年10月 千歳市	〈札幌国際大学〉 丹治和典・川名典人 〈今金町〉 田中 崇・加藤剛広	上記、外国人留学生によるモニターツアーの成果発表についての事前打ち合わせをした。 千歳市で開催された「千歳国際観光アカデミー」において、今金町における外国人観光客の誘致に向けた外国人留学生によるモニターツアーの成果を発表するにあたり、その内容を精査するために意見交換を行った。
平成27年 1月 今金町	〈札幌国際大学〉 丹治和典 〈今金町〉 加藤剛広・本間 晃	昨年8月に実施したモニターツアーの記録をタブレット式PCに収納し、今金町の担当者と内容を確認し今後の活用方法について協議した。

[外国人留学生を対象としたモニターツアー]



[スノーシュー・トレッキング]



## 社会人教養楽部（がくぶ）

9年目を迎える社会人教養楽部の2014年度年間延受講者数は、496名であった。受講者による自主運営組織「楽友会（がくゆうかい）」は、会報「がくゆう」の発行をはじめ、4つの自主サークルによる活発な活動を展開した。また、運営委員の会議は、年間11回開催され、企画事業の実施・運営・評価等について協議が行われた。

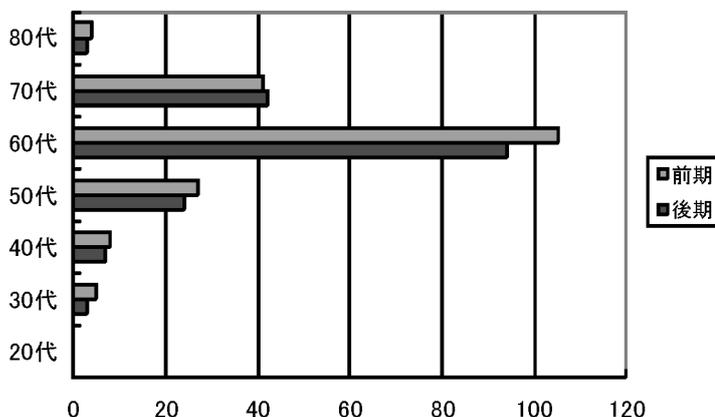
### 【2014 社会人教養楽部受講者概況】

	開放科目数	受講科目数	実受講者数	延受講者数	平均年齢
前期	62科目	50科目	190人	259人	63.93歳
後期	67科目	50科目	173人	237人	64.65歳

#### ◆年代別受講者数

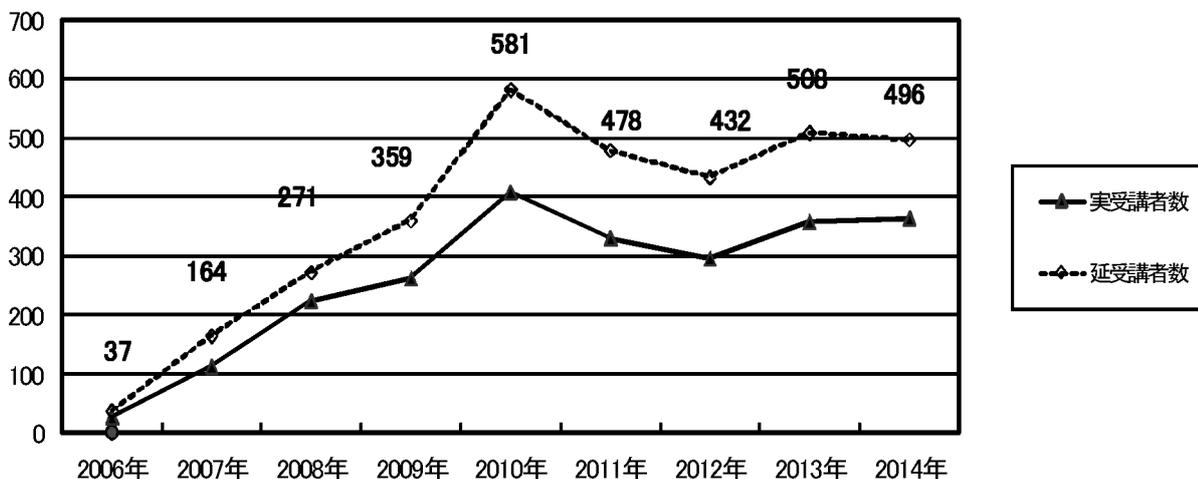
年代	前期	後期
20代	0	0
30代	5	3
40代	8	7
50代	27	24
60代	105	94
70代	41	42
80代	4	3
計	190	173

年代別受講者数



#### 受講者数の推移

	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
実受講者数	26	112	223	261	408	329	295	357	363
延受講者数	37	164	271	359	581	478	432	508	496



## 前期受講相談会

●3月25日(火)

平成28年度前期受講相談会が開かれ、66名の方が参加しました。

運営委員の方に受講科目等の相談をされ、沢山の方が申し込んでいられました。



## 後期受講説明会

●8月20日(水)

平成28年度後期受講説明会が開かれ、35名の方が参加しました。

運営委員の方が受講の楽しさや同好会の趣意などのお話をして下さいました。



## 北海道新聞社出前講座 「北海道とスポーツ」

●8月6日(水)

今年度1回目の運営委員企画事業のセミナーが開催されました。

北海道新聞社編集局運動部編成委員の大崎浩也氏を講師に迎え、日本Jリーグファイターズの話を中心に北海道とスポーツについて語っていただきました。

札幌ドームや球団の話題も聞くことができ、参加された方も熱心に質問したりと大変盛り上がりました。



## 「留学生と行く余市の旅」 ニッカ工場とぶどう狩り

●11月8日(土)

ドラマの舞台になっている余市に留学生と共に、ニッカ工場、晴天に恵まれ、ぶどう・リンゴ狩り、工場見学と楽しい時間を過ごされたようです。



## 北海道新聞社出前講座 「ぶっちゃけ男女平等論」セミナー &茶話会

●11月20日(木)

北海道新聞編集本部委員の渡部多美江さんを講師に迎え、男女の考え方の相違について伺いました。

その後は渡部さん、先生方と交え、茶話会を開催、来部生同士のおつきあがりを実現できた時間だったようです。



## 同好会活動「パソコン同好会」

●隔週金曜日  
13:30～

各自ノートパソコンを持ち込み、リーダーの手ほどきのもと、パソコンの知識を深めています。興味のある方は事務局までご連絡下さい。



<事業報告>

## スポビズ・カフェ（スポーツ・ビジネス・カフェ）

「スポビズ・カフェ」は、スポーツ関係者、スポーツに関心のある市民や学生に、スポーツビジネスやスポーツについて、語り合う場を提供することを目的として、平成20年度より6年間開催してきた。今年度からは、メンバー有志が実行委員会を立ち上げ、本学と連携しながら、自主運営を目指した。

### 【2014 スポビズカフェ】

回	日時	テーマ	講師・進行	参加者数	総参加者数
第1回	6月12日（木） 18：00～20：30	FIFAサッカー ワールドカップ・ブラジル大会 徹底分析	札幌国際大学 スポーツ人間学部	10	53
			新井 貢		
第2回	7月17日（木） 18：00～20：30	2026年の冬季五輪を札幌に招致するにあたり、現在の札幌が必要な事はなにか？	札幌国際大学 スポーツ人間学部	14	
			新井 貢		
第3回	9月18日（木） 18：00～20：30	レバンガ北海道 開幕戦満員大作戦！	札幌国際大学 スポーツ人間学部	14	
			新井 貢		
第4回	10月16日（木） 18：00～20：30	カーリング世界選手権 成功の秘訣！	札幌国際大学 スポーツ人間学部	15	
			新井 貢		



## まち観フェア 2014

### 1. 開催趣旨

「北海道地域・観光研究センター」は観光教育、地域・観光研究を推進し、わが国並びに北海道の地域・観光発展に資することを目的とした札幌国際大学の研究機関です。「まち観フェア2014」は本センターが毎年行っている地域貢献事業の一つ「公開講座」プログラムの一環として実施した。

### 2. 実施概要

- 主 催 札幌国際大学 北海道地域・観光研究センター
- 開催月日 2014年10月7日（火）10：00～16：00
- 開催場所 JR札幌駅西コンコースイベント広場
- 入場料無料

### 3. テーマ

- メインテーマ 『北海道観光の未来を考える』
  - テーマA：大学と地域が連携する
  - テーマB：広域連携で地域がつながる
  - テーマC：観光を担う人材を育てる
  - テーマD：国際観光に対応する

### 4. プログラム

- |             |                          |                                      |
|-------------|--------------------------|--------------------------------------|
| 10：00～16：00 | パネル展示                    |                                      |
| 10：00～16：00 | 観光ビデオ放映                  |                                      |
| 10：00～16：00 | アンケート&北海道観光マッププレゼント      |                                      |
| 13：30～13：45 | ミニトーク① 「よくある北海道観光に関する質問」 | 話題提供者 仲崎氏（北海道さっぽろ食と観光情報館）<br>司会：横川先生 |
| 13：45～14：00 | 抽選会①                     | 北海道のおみやげベスト10商品<br>司会：千葉先生           |
| 14：30～14：45 | ミニトーク② 「北海道のおみやげベスト10」   | 話題提供者 馬籠氏（どさんこプラザ副店長）<br>司会：横川先生     |
| 14：45～15：00 | 抽選会②                     | 北海道のおみやげベスト10商品<br>司会：千葉先生           |

## 5. 実施体制

氏名	主な役割	集合～終了時刻	備考
井上（久）	全体統括、パネル説明対応	09:00～16:00	
齋藤	パネル説明	09:00～12:00	
丹治	パネル説明・アンケート	09:00～12:00	
宮武	設営・撤去、講師誘導、抽選会準備	06:30～17:00	
小林	パネル説明、ビデオ放映	09:00～16:00	
千葉	抽選会①②司会	09:00～16:00	
横川	ミニトーク①②司会	12:00～16:00	
東野	アンケート	09:00～16:00	センター事務局

※佐久間先生、井上（博）先生は授業のため参加不可。

※観光学研究科の大学院生 李さん、プーナット君（アンケートコーナー）を担当。

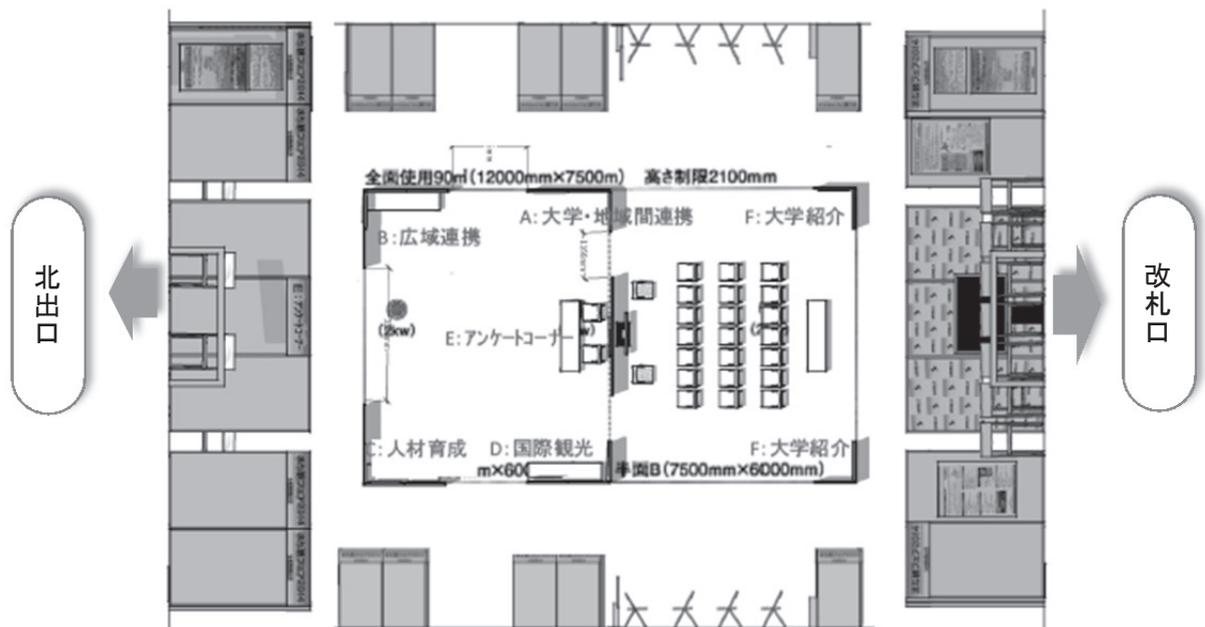
※会場設営：アコムレンタル 馬詰氏

※パネル等設置：インテリアヤマト 堀江氏

※会場運営：JRエージェンシー 江向氏

## 6. 実施概要

### ■会場平面図（JR札幌駅西コンコースイベント広場）



### ■パネル掲示および説明

説明用パネルは13枚を掲示し、必要に応じて教員が説明対応した。

### ■アンケート（観光マッププレゼント）

記入されたアンケート票と交換に、「北海道観光マップ（日本語）」をプレゼントする。

外国人観光客でマップを希望する方に対しては、アンケートはせず各国語のマップを進呈。

■ミニトーク（15分）進行：横川先生 ゲストとの対談形式

- ・ミニトーク①（13：30～13：45） 出演者：仲崎氏（北海道さっぽろ食と観光情報館主任）
- ・ミニトーク②（14：30～14：45） 出演者：馬籠氏（どさんこプラザ副店長）

■抽選会（2回）（ミニトーク終了後15分以内で実施） 進行：千葉先生

- ・ミニトーク参加者（着席者対象、席数21）を対象に行う。
- ・賞品はジャンル毎に1賞品（当選者数各10名、残り参加賞（キャラメル進呈）
- ・イスの後ろに（1～21）の数字札を貼附。引かれた番号のイスに座っている参加者にプレゼント。

■ビデオ放映

- ・ビデオの種類は3種類で、リピート設定をし、適当に交換する。
- ・北海道観光PV 「Colourful Hokkaido（4分）」、「Real Hokkaido（6分）」  
（北海道観光振興機構から借用）
- ・天塩川流域PV「天塩川 Happy（2～3分）」（テッシ・オ・ペにぎわい創出協議会から借用）

## 7. 入場者数

入場者は毎時10分間にパネル展会場およびビデオ放映会場でカウントし、それぞれ6倍し、1時間当たりの入場者数とした。ただし、13時、14時台はミニトーク・抽選会のため同人数が長時間滞留したため、そのままの数字を使用した結果、以下のような結果となった。

- ・入場者数：624名（推計値）

# 北海道の離島における観光振興の諸課題

## —— 焼尻島を事例に ——

越塚 宗孝\*      森 雅人\*\*      丹治 和典\*\*\*

### 1 研究の背景・目的

越塚他（2013、2014、2014）は、北海道の離島観光に関わる諸問題について指摘した。総じて離島はその地理的、自然、生活条件は陸域より不利な面があると言われており、同地域における観光振興は観光基盤整備を含め、陸域の観光地に比べかなりの時間と投資が必要になるとの見解もみられる。（姫野・牧田2009、大田2012、坂田2004）

本研究が対象とした離島は焼尻島（平成26年人口235人・142世帯）であるが、島は北海道の羽幌町（平成22年人口7,964人）に属し、水産業を基幹産業としており、焼尻島のそれは34の経営体（平成24年）で構成されている。島の生活物資等と人の移動は全面的に羽幌港からのフェリー、高速船に依存している。島まではフェリーで60分、高速船で35分である。時期によって船の便数は異なるものの現在の旅客需要には応えられている。一方、生活環境面の水道施設に関しては、昭和39年に簡易水道が整備され、その後、昭和62年に貯水槽、機械設備の更新が実施されている。

さて、水産業の基盤となる漁港（第1種）は焼尻島西浦に一カ所整備されている。年間漁業生産高は2億8千6,014千円（平成23年）であり、漁獲量が最も多い魚種は「たこ」の87トン（平成23年）、最も生産高が多い魚種は「なまこ」の1億6,642千円（平成23年）である。他方、観光客に食材として供され、人気の高い「うに」は「えぞばふんうに」で漁獲量が1トン、生産高が1千49千円、「きたむらさきうに」で漁獲量が10トン、生産高が5千2,541千円である。（何れの数字も平成23年）

羽幌町離島振興計画（平成25年度～平成34年度）では天売・焼尻両地区の将来像を見据え、地域再生の道筋を明らかにするとしている。同計画では水産業に関して水産物の資源水準の低下、魚価安、海岸の磯焼け、トド等の鳥獣による漁業被害が課題であると指摘し、「うに」の種苗放流等栽培漁業の促進、漁場の磯焼け対策、新規就業者への支援、後継者対策が必要であると述べている。

また、同計画は観光振興の現況について、オンコ自然林などの豊かな自然環境を活かし、バードウオッチング等の自然体験型の特色ある観光に取り組んでいると指摘しており、これは自然観光資源の存在とその観光対象化がなされているとの評価と受け止めることができる。また、今後の離島観光振興の方向性を示すものでもある。島の振興施策として観光施設の適切な維持管理、イベント・PR等への支援、地域の料理・土産品の開発研究支援を記述している。離島振興計画では島の観光振興の方向性について量的拡大を目指すことより、235人の住民やステークホルダーの知恵を結集して、住み続けたい、訪れたいと思える島づくりを描いている。

\* 札幌国際大学

\*\* 札幌大谷大学

\*\*\* 札幌国際大学

本研究はこうした考え方を念頭に置き、北海道羽幌町の焼尻島の観光振興に関わる諸課題を整理し、今後の展望について考察するものである。

## 2 焼尻島の概況

焼尻島は北海道羽幌町の沖合23kmに位置している。島の面積は5.21km<sup>2</sup>(国土地理院平成24年)である。平成24年版羽幌町勢要覧によれば人口は235人、統計上明らかにされている昭和22年以降、人口は減少傾向にあり、昭和25年のピーク時人口2,621人より大きく下回っている。

先に述べた通り、焼尻島は水産業を基幹としており、平成24年の生産高は量ベースで405トン、金額ベースで2億43,711千円であった。しかしながら、島の水産業はいくつかの課題を抱えており、平成25年度離島漁業再生支援交付金事業の概況によれば、羽幌町は焼尻島の漁業世帯と協定を結び、「うにの種苗放流」、「漁場管理・改善」事業を実施しており、これらは主として水産物として重要な「うに」の資源管理、増産を目的としたものであるが、一部、ニシン稚魚の放流も行っている。

他方、「平成25年度羽幌町鳥獣被害防止計画」によれば、漁業に与えるアザラシ類、トドの被害額は68,805千円（平成23年度）に及んでおり、天売島と同様の状況にある。北るもい漁業協同組合は北海道連合海区漁業調整委員会からトド採捕承認を得て捕獲を実施し、アザラシ類は有害鳥獣駆除許可により、駆除・追い払いを猟友会のハンターへ委託しているが、迅速な対応は困難であると述べられている。このように鳥獣類と漁業との関係については諸問題を包含していることは確かである。

一方、焼尻島は「ミズナラを主体とする落葉広葉樹からなる林冠層と、下層の密生したイチイの2層構造をもち、イチイがきわめて高い密度で生育していて、オンコの島とも呼ばれ、この島の森林は、全体として、ミズナラ・イチイ天然生林であり、離島の水源林として、また観光資源としてもきわめて重要なものである」齊藤（1986）、また、志田・磯野・佐藤（2006）は「338種4亜種1変種が確認された。焼尻島の森林はイチイのほかミズナラ、イタヤカエデが主な構成要素である広葉樹林と、アカエゾマツが優占する針葉樹林がある」と述べているようにイチイに代表される植物が島の存在を知らしめているとも言える。なお、「焼尻の自然林」として国の天然記念物として1983年に指定されている。自然林は島の東半分に広がっており、特に、1haに約600本のイチイが集積する場所は「オンコの荘」と名付けられ、観光ガイドブック等にも掲載されている。

また、農業分野においては指定管理者である萌州ファーム(株)が羽幌町営焼尻めん羊牧場を管理している。約80haの同牧場ではめん羊、約700頭が飼育され、「プレ・サレ焼尻」としてブランド化されている。町は飲食店、宿泊施設での食材利用促進のため「焼尻めん羊肉地元提供奨励事業」や「サフォークまつりin焼尻」等を実施し、地産地消等に努めている。因みに、同羊肉を利用したメニューを提供しているレストランは札幌市内では「ミクニ サッポロ」、「モリエール」、「ザ ワインクラブ」、「北海道ビール園」、「ビストロ ポワル」等、東京都では銀座の「ザ トトキ」、「レカン」である。なお、羽幌町、留萌市、札幌市の精肉店でも買い求めることが可能である。

さて、宿泊施設は4軒（収容人員185人）が営業しており、最も大きな宿泊施設は1軒あり、「布目旅館」（収容人員120人）である。他の宿泊施設の規模は収容人員で見ると20～25人の範囲である。他に飲食店（2軒）、郷土館（1軒）、レンタサイクル店（1軒）、観光ハイヤー会社（2社）、商店

(5軒)が観光客に一定のサービス、商品などを提供している。飲食店、土産品店では島の海産物などを使った食事や商品が提供されている。

住民のライフラインであるエネルギー供給は焼尻島にある火力発電所(北海道電力が設置し北海道パワーエンジニアリングが運営・管理 総出力1,110kw)で発電されている。島の年間消費電力量は1,150,435kwhで、約50%が家庭用消費である。また、発電用重油等揮発油、家庭用ガスは海上輸送に全面依存している。因みに、羽幌町では「羽幌町エコアイランド構想」(平成26年4月)の実験を開始し、風力、太陽光エネルギー利用の可能性を探っている。

簡易水道事業については昭和39年に給水が開始され、安定供給が可能となっているが、北海道離島振興計画によれば、下水道事業については合併処理浄化槽の普及促進を図っているが、初期投資の負担等の理由により普及が進まず、水洗化の普及促進が課題となっていると指摘している。なお、医療に関しては道立診療所が設置されているが、常勤医師、看護師の確保が課題となっている。しかし、緊急時対応は「救急患者搬送協議会」の設置により、ドクターヘリ、防災ヘリの運航が可能となっている。

最後に、羽幌町が離島振興計画策定の過程でとりまとめた「町民・島民アンケート」(821世帯が対象、内島民319世帯 回収率：町民40.4、島民55.8%)から町民、島民が何を振興策として期待しているのかを推測する。

「島の産業振興のために必要なこと」との質問に対しての回答で上位を占めたのは「地場産品のPRの充実 56.2%」、「若者などの担い手育成 51.2%」、「製品加工などによる地場産品の高付加価値化 37.4%」であった。また、「島の観光振興のために必要なこと」との質問に対しての回答で上位を占めたのは「交通費(フェリー運賃)の低価格化 55.7%」、「観光イベントや観光・体験メニューの充実 55.2%」、「公共施設、旅館等の施設整備 46.8%」であった。他方、「島の定住・移住促進のために必要なこと」との質問に対しての回答で上位を占めたのは「安全・安心な医療の提供(医師の安定的確保) 81.3%」、「雇用の場の充実 63.5%」、「商店・公共交通等の生活利便性の向上 48.3%」、「定住・移住者への支援(起業・住宅支援等) 40.9%」であった。(町民アンケートは天売島・焼尻島全世帯を対象として実施されたが、島別集計は行われなかったため、両島の結果を用いた)

なお、羽幌町地域おこし隊(焼尻地区)のブログには「島暮らしへの憧れが強く、焼尻島に移住する」、「今後どんな島になりたいのか」、「この島は何をPRしていきたいのか」、「お年寄りや冬の期間、島を離れる」といった語録が並んでいる。まずは、3年間の島の生活でどのような考え方で行動するのか期待される。



写真2-1 焼尻島フェリーターミナル

ターミナルのファザードには島の象徴である「オンコ」の表示がみられる



写真2-2 羽幌町営めん羊牧場

島の高台に広がる町営のめん羊牧場、指定管理者の萌州ファーム（ほうしゅう）が運営管理している



写真2-3 オンコの荘

島の象徴、イチイの群生林は「オンコの荘」と名付けられ観光対象として機能している



1. 投影はユニバーサル横メルカトル図法、座標帯は第54帯、中央子午線は東経141°
2. 図面に付した短線は経緯度差1分ごとの目盛
3. 高さの基準は焼尻港の平均海面
4. 等高線及び等深線の間隔は10メートル
5. 磁気偏角は百偏約9° 40'
6. 図式は平成24年電子地形図25000図式
7. 本図上部の枠内には、この地図の購入者が入力したものをそのまま記載しています。

平成27年1月21日 調製  
著作権所有兼発行者 国土地理院  
141.41-44.44-A4-t-20150121-065437-0000

図表 2 - 1 焼尻島全体図

### 3 焼尻島の観光対象と観光構造

#### 3-1 観光対象の現況

観光者を魅了する対象のことを観光対象と呼ぶが、ここでは焼尻島の観光対象の現況について記述する。なお、観光対象一覧の作成にあたっては留萌振興局、羽幌町、羽幌町観光協会の資料を参照にした。

図表 3-1 焼尻島の主たる観光対象

自然観光資源	人文観光資源	観光施設	観光対象
エゾフウロ エゾカンゾウ 等約50種の植物			観賞対象として機能している。時期は6月中旬から7月中旬。
イチイの群生林		案内板	オンコの荘と名付けられている。観賞対象として機能している。
広葉樹、針葉樹林			ウグイス谷、雲雀ヶ丘公園（ひばりがおか） 森林浴、バードウォッチング、草花観賞の空間として機能している。
自然景観		トイレ 休憩所 案内板	鷹の巣園地 天売島などが望める高台の展望地 1848年、米国捕鯨船員、ラナルド・マクドナルド（日本における英語教師第1号）の漂着地
	旧小納家（1900年建築） 北海道指定有形文化財		焼尻郷土館 石川県出身で漁業、呉服、雑貨商を営んでいた小納家（こな）の旧宅を郷土館として利用している。 入館有料 有人
白浜海岸		白浜キャンプ場 （テントサイト炊事場簡易水洗トイレ）	磯遊び、海水浴、キャンプ等で利用されている。 利用期間 5月上旬～9月末 無料
島の景観等		レンタサイクル梅原	サイクリング レンタサイクル 2時間 800円
島の景観等		観光ハイヤー 焼尻観光ハイヤー 布目旅館観光ハイヤー	9人乗りジャンボハイヤー ドライバーガイド付 2社が運行している。 利用期間 4月26日～9月末 料金 1人1,400円
		布目旅館によるアクティビティ	シーカヤック シーカヤックによる海上遊覧 料金 6,300～13,650円 所要時間 約2～8時間

自然観光資源	人文観光資源	観光施設	観光対象
牧場景観		焼尻めん羊牧場	羽幌町営めん羊牧場の景観 萌州ファーム（ほうしゅう）が指定 管理者 サフォーク種の羊 約700頭を飼育、 管理。 食用ラム肉は「プレ・サレ焼尻」の ブランドで流通。 町内の一部飲食施設でメニュー化。 北海道新聞社47clubで通信販売
	サフォーク祭りin 焼尻		平成26年6月21、22日に開催
	焼尻島宝さがし （宝島 焼尻の財 宝伝説）		平成26年7月21日～8月20日 前売り券 2,000円 現地購入 2,500円
		幸福の黄色いハン カチ ロケ地	
		磯乃屋（20人） （焼尻産めん羊肉 1,000円・全館禁 煙・水洗トイレ・ 24時間風呂） 野越（のごえ）民 宿（20人） 小田民宿（25人） （水洗トイレ） 布目旅館（120人） （シーカヤック・ 観光ハイヤー・焼尻 サホークステーキ）	
		新沼食堂 （5月～9月） 島っ子食堂 （6月中旬～9月 末）	
		佐藤商店 （6月～9月末） 富田商店 （6月～9月末） 寺坂商店 小田商店 島の母さん直売所 （5月連休・6月 中旬～8月）	

焼尻島の観光対象で知名度が最も高いものは「オンコの荘」である。図表に示した通り、イチイの群生林の観光対象化が図られている。なお、観光客の行動例をフローで示すと下記ようになる。



写真 3 - 1 羽幌港のフェリー

羽幌港からフェリーで焼尻島へ  
60分  
一般 2 等片道運賃  
1,570円（9月～6月）  
1,700円（7月・8月）



写真 3 - 2 羽幌港の高速船

羽幌港から高速船で焼尻島へ  
35分  
一般片道運賃  
2,780円（9月～6月）  
2,910円（7月・8月）

フェリーか高速船を選択し、  
焼尻島へ



写真 3 - 3 ターミナルの建物には「オンコの島」の表示と建物の入口には記念撮影用の「めん羊の顔ハメ看板」



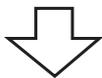
焼尻観光ハイヤーで島内観光へ

- ・ 9人乗りジャンボハイヤー
- ・ 料金 1,400円
- ・ 営業期間 4月26日～9月末
- \* 布目観光ハイヤーも同様の形態で営業



「オンコの荘」で下車し、ドライバーガイドと共に徒歩で内部へ移動

- ・ 簡単な説明有



鷹の巣園地

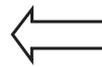
- ・ 休憩 トイレ
- ・ 海岸景観等の撮影



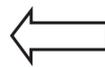
鷹の巣園地

- ・ 休憩 トイレ
- ・ 海岸景観等の撮影

観光ハイヤーは出発点のフェリーターミナルへ凡そ1時間程で戻って来る。その後、観光客は各商店での買い物、飲食、あるいは文化施設「旧小納家」の見学することになる。



旧小納家の建物  
明治33年建造  
二代目小納宗吉が建築した木造  
2階建。  
漁業、呉服商、雑貨商、郵便局  
を営んでいた。  
近隣の主婦が見学者の対応を行  
うが、館内の案内役ではない。



フェリーターミナルに隣接  
する飲食店、商店。  
島の水産物等を買求める  
観光客の様子。



図表 3 - 2 焼尻島における観光客の月別動向

月	観光入込総数（人） 上段（羽幌町25年度） 下段（天売・焼尻計24年度）	宿泊客数（人）	焼尻島における主たる事項
4	1,400 660	1,000	島開きイベント 2014年4月29日 「忍弥 津軽三味線」(旧小納家)
5	2,700 1,476	2,000	
6	43,200 2,449	3,400	「サフォークまつりin焼尻」 6月21・22日
7	17,800 4,712	14,400	「宝島 焼尻の財宝伝説」 7月21日～8月20日
8	16,800 6,166	13,800	「宝島 焼尻の財宝伝説」 7月21日～8月20日
9	2,900 1,558	2,200	
合計	84,800 17,021	36,800	

資料：北海道観光入込客数調査報告書平成25年度 羽幌町観光協会等のHPより作成  
2014年開催されたイベントは25年度羽幌町の観光入込総数に関係  
各島の月別宿泊客数は不明

焼尻島だけの観光総入込数、宿泊客数は明らかにされていないため、ここでは天売島、焼尻島の合計数を用いて月別動向等について推測する。焼尻島の観光シーズンは4月から9月までの6か月と他の観光地に比べ短く、観光事業側もそれに合わせて期間営業を行っている。故に、オフシーズン対策といった観光対策は極めて困難である。また、大幅な量的拡大を求めることも難しい状況にある。こうした条件下にある焼尻島であるが、観光客の流入は4月から始まり、そのピークは8月となる。平成24年度は7月、8月で10,878人の観光客が訪れており、年6ヶ月の約60%を占めている。

「北海道における離島ツーリズム促進に関する調査事業」（北海道運輸局平成26年）では天売島・焼尻島を訪れる観光客の年代は50～60代が多いこと（66%）、離島での楽しみは「美味しい食事」、「自然景観を見ること」、「船旅にて離島に行くこと」の順に多かったと指摘されている。焼尻島の観光対象の現状は「オンコの荘」、「鷹ノ巣園地からの眺望」を主体とした自然観光資源であり、こうした調査結果を考慮すると限られた観光シーズンに移動、滞在の楽しみをどれだけの知恵と工夫により展開できるかといったことが課題となろう。特に、飲食店、宿泊施設の食事に関する知恵と工夫は重要である。

### 3-2 移動手段と観光情報

さて、観光対象と観光者を繋ぐのが移動手段と情報である。焼尻島への移動手段はフェリーと高速船であり、現在、これらに全面的に依存している。

図表3-3 焼尻島までの移動手段

交通機関	航路・所要時間	船舶輸送力
フェリー（自動車航送渡船）1隻 高速船（高速旅客船）1隻 *羽幌沿海フェリー(株) *就航船舶：おろろん2 *就航船舶：さんらいなゝ2	羽幌⇔焼尻 （フェリー60分・高速船35分） 焼尻⇔天売 （フェリー25分・高速船15分） 天売⇔焼尻⇔羽幌 （フェリー1時間45分・高速船1時間5分）	フェリー「おろろん2」 旅客定員（7月～8月） 300名 車両積載能力 8トン車2台 乗用車8台 高速船「さんらいなゝ2」 旅客定員 130名

資料：羽幌沿海フェリーのHPより作成

図表3-4 フェリー日別運航便数

運航期間	往路（羽幌→焼尻→天売）	復路（天売→焼尻→羽幌）
10月1日～4月7日 4月27日～4月28日	1便	1便
5月7日～5月31日 9月1日～9月30日	2便	2便
4月29・30日 5月1～6日 6月1日～30日 7月1日～8月12日（平日） 8月16日～31日	2便	2便
7月1日～8月12日（土日祝日）	2便	
8月13日～15日	3便	3便

資料：羽幌沿海フェリーのHPより作成（平成25年度）

フェリーの旅客定員は300名、高速船のそれは130名なので8月13から15日までの3日間が1日当たり輸送力としては最大の1,290名となる。フェリー、高速船は島民の生活路線でもあるため、この時期はお盆の帰省客が重なり混雑することが予想される。なお、先の図表に示したように焼尻、天売両島への観光ピークは8月、6,166人の入込であった。同月の両船による輸送力は29,510名（フェリー7,200名：8月1日～12日・2,700名8月13日～15日・9,600名8月16日～31日・高速船4,680名8月1日～12日・1,170名8月13日～15日・4,160名8月16日～31日）で、島民の利用、帰省客利用等を想定

しても十分な輸送力である。

図表 3 - 5 高速船日別運航便数

運航期間	往路（羽幌→焼尻→天売）	復路（天売→焼尻→羽幌）
4月8日～26日	1便	1便
4月29・30日 5月1～6日 6月1日～30日 7月1日～8月12日（平日） 8月16日～31日	2便	2便
7月1日～8月12日（土日祝日）	3便	3便
8月13日～15日	3便	3便

資料：羽幌沿海フェリーのHPより作成（平成25年度）



新しい羽幌フェリーターミナル。  
無料駐車場が設置されている

写真 3 - 3 羽幌フェリーターミナル



ターミナルの外内動線はユニバーサル化されている

写真 3 - 4 フェリーターミナル内部

なお、船は定期検査が行われるため2隻体制となっており、新規投入された船は従来の200名定員から130名に定員を減じ、高速化、ユニバーサル化が図られている。2011年の「羽幌～天売航路改善計画策定事業報告書」（羽幌沿海フェリー）によれば、運航収入の減少、船舶修繕費の増加、燃料潤滑油費等の増加といった経営上の問題が指摘されると共に資金不足による経営の不安定さが明らかに

されている。結論としては航路を安定的に継続させるためには、観光客の回復が必要であり、そのためには関係する行政機関等と連携した振興策が不可欠であると述べている。



写真 3 - 5 高速船内部

フラットフロアで車いす  
による移動も容易



写真 3 - 6 高速船乗降口

乗下船も容易に



写真 3 - 7 高速船車いす用座席

車いす利用者用の足元が  
広い席

また、天売、焼尻島に関する現地の観光情報は羽幌フェリーターミナル内観光案内所、船舶内、天売、焼尻のフェリーターミナル等で提供されている。



羽幌フェリーターミナル  
内にある観光案内所



高速船内に置かれた観光パ  
ンフレット



天売島フェリーターミナル  
で観光バス等の情報が提供  
されている



焼尻島フェリーターミナル  
で観光バス等の情報が提供  
されている

天売、焼尻島の観光情報は観光者と観光対象を媒介する役割を果たすが、今日では総合的に観光情報を提供されることが求められている。観光パンフレット、観光情報誌、インターネット等は提供方法として一般的に用いられているが、道内観光客の占める割合が大きい天売、焼尻島の場合は、北海道の人口が集中している札幌での情報提供が重要な役割を果たすと思われる。また、スマホ時代においてはインターネットで提供される情報も大事だと思われる。

図表3-6 グーグルにおける天売・焼尻観光情報の出現

出現順*一部記載	情報提供元	URL
羽幌町観光協会	羽幌町観光協会	<a href="http://www.haboro.tv/">http://www.haboro.tv/</a>
羽幌沿海フェリー	羽幌沿海フェリー	<a href="http://www.haboro-enkai.com/teuri.html">http://www.haboro-enkai.com/teuri.html</a>
天売島	トリップアドバイザー	<a href="http://www.tripadvisor.jp/">http://www.tripadvisor.jp/</a>
天売島	リクルートじゃらん	<a href="http://www.jalan.net/">http://www.jalan.net/</a>
北海道のお気軽ひとり旅	北海道運輸局	<a href="http://www.tb.mlit.go.jp/hokkaido/freetrip/">http://www.tb.mlit.go.jp/hokkaido/freetrip/</a>
世界最大のウトウ繁殖地	トラベルJP	<a href="http://guide.travel.co.jp/article/3833/">http://guide.travel.co.jp/article/3833/</a>
北海道海鳥センター	北海道海鳥センター	<a href="http://www.seabird-center.jp/">http://www.seabird-center.jp/</a>
焼尻島	羽幌沿海フェリー	<a href="http://www.haboro-enkai.com/teuri.html">http://www.haboro-enkai.com/teuri.html</a>
旅館磯乃屋	旅館磯乃屋	<a href="http://www.isonoya.com/">http://www.isonoya.com/</a>
焼尻島	トリップアドバイザー	<a href="http://www.tripadvisor.jp/">http://www.tripadvisor.jp/</a>
宝島	トムソーヤ	<a href="http://tom-sawyer.co.jp/treasure_island/">http://tom-sawyer.co.jp/treasure_island/</a>
焼尻なう	地域おこし隊	<a href="https://twitter.com/yagishiritv">https://twitter.com/yagishiritv</a>
天売島・焼尻島の旅行ガイド	るるぶ	<a href="http://www.rurubu.com/pref/">http://www.rurubu.com/pref/</a>
こんなのあるんだ	47CLUB	<a href="http://www.47club.jp/contents3/">http://www.47club.jp/contents3/</a>
焼尻島布目旅館	布目旅館	<a href="http://www.tabi-hokkaido.co.jp/nunome/">http://www.tabi-hokkaido.co.jp/nunome/</a>
焼尻島	リクルートじゃらん	<a href="http://www.jalan.net/">http://www.jalan.net/</a>

資料 各HPより 検索キーワードは天売島・焼尻島2pまでを検索 2015年2月2日現在

実際のウェブ上ではどうであろうか。天売島、焼尻島をキーワードとしたグーグルの検索では図表に示すようなサイトが出現した。(一部のものは削除) トップにある羽幌町観光協会のHPで総合的に天売島、焼尻島の観光情報が提供されている。また、2番目にある羽幌沿海フェリーのHPでも観光情報が提供されている。総じて、天売島、焼尻島の観光情報に関するサイトは量的に少ないようである。また、個々の観光施設からの直接的な情報提供も少ないようである。因みに、愛知県西尾市一色町佐久島は三河湾に位置する人口262人(平成25年4月)の島で、近年、アートの島として知られるようになった。同島の公式ホームページは充実しており、「最新情報」、「総合ガイド」、「旬事典」、「佐久島アート」、「島おこし」、「グルメ」、「歴史・伝統」、「見どころ」、「Iターン情報」、「島の学校」、「アクセス」といったカテゴリーで提供されている。

## 佐久島ってどこ？

(所在地)



資料：佐久島HPの総合ガイドより

## 冬だけおいしい! 冬だからオイシイ! 食べにきてよ「佐久島の冬ぐるめ」

寒い季節はお出かけしたくないという人、いますよね。  
でもそんなアナタ、ソソってますよ!  
だって佐久島には、冬にしか味わえないもの、  
冬にとびっきりおいしくなるものいろいろ  
あって、島に来ないと食べられないんですから!  
冬の佐久島へグルメぜんまいしに来てね!



冬ぐるめを見る ▶

資料：佐久島HPのグルメより

一般論として観光情報の内容について、地域らしさを明確にしておくことが必要と指摘されており、それと共に観光者の行動場面に応じた情報を的確に把握し、提供することが肝要とされている。例えば、行き先案内に必要な主要情報は正確で見やすい地図、現在地、観光対象の位置・連絡先、宿泊施設の位置・連絡先、主要な公共施設の位置・連絡先、モデルコース、所要時間等であるが、羽幌町観光協会のHP内にある天売島、焼尻島の「行き先案内」情報の内容もほぼこれに準じている。



焼尻島から望む天売島

資料：羽幌町観光協会HPのアクセスマップより



資料：天売島、焼尻島共に羽幌町観光協会のHPより

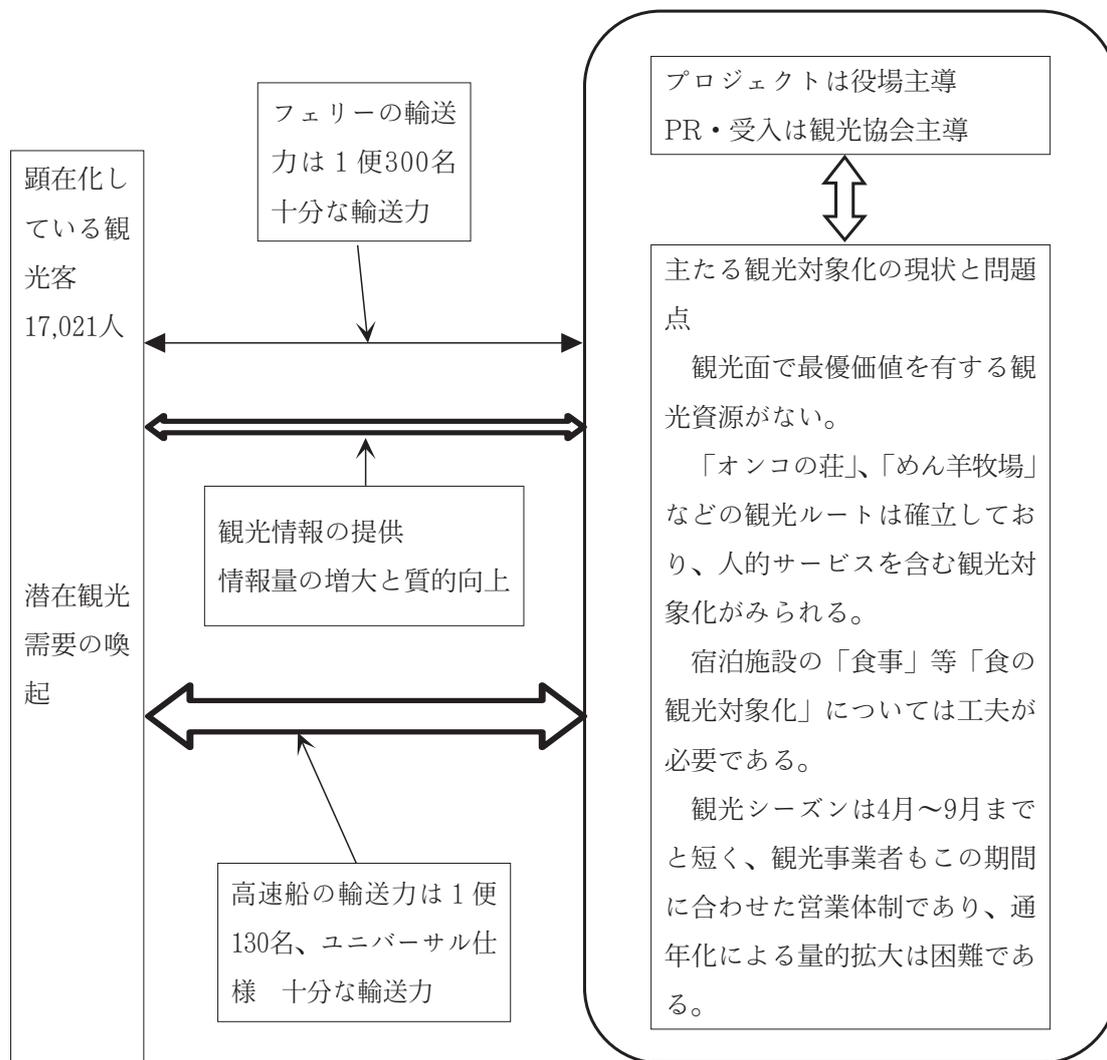
しかし、各宿泊施設の詳細情報に関しては各施設に任せられているのが現状である。因みに、焼尻島4軒の宿泊施設の内、2軒が詳細情報を提供している。その内一軒の旅館磯乃屋は、「島の楽しみは自分で探す。それが焼尻流」といったキャプションのホームページを立ち上げており、旅館のサービス、もてなし方、設備についての詳細情報を提供している。また、季節の花、渡り鳥、石碑等の情報も提供し、一部、中国語表記もみられる。加えて、個人のブログでは日常の島暮らしを垣間見ることができる。もう一軒の布目旅館は「焼尻・天売シーカヤック」といったキャプションのホームページを立ち上げており、料理、シーカヤック、観光(観光ハイヤーの営業案内)、季節の話題が内容となっている。

羽幌町「離島振興計画」には超高速ブロードバンドサービスの提供が実現しているとの記述がみられることから、個別施設の通信基盤は整っているものと推察される。この基盤の有効活用のためにも他の障壁を克服し、観光者に必要で魅力的な情報提供が行われることを期待したい。因みに、役場と島民間とはIP電話で繋がっており、緊急時通報、フェリーの運航状況等の情報が提供されている。

### 3-3 焼尻島の観光構造(まとめ)

焼尻島の観光構造を簡単に図示すると下記の通りである。

図表3-7 焼尻島の観光構造



焼尻島への移動を担うフェリー、高速船の輸送力には余裕があるが、それに見合うだけの旅客需要が不足している点が問題であると指摘されている。前述した通り「羽幌～天売航路改善計画策定事業報告書」(羽幌沿海フェリー)によれば、旅客需要拡大のためには焼尻島の観光的魅力を向上させることが不可欠であることは言うまでもない。平成25年に実施されたイベント「焼尻の財宝伝説」は約574名の参加があり、旅客需要、観光振興に寄与したと思われる。

他方、観光客に魅力的と映る焼尻の食シーンは「サフォークまつりin 焼尻」で見られるが、限定的であり恒常的に島の食シーンを提供するには至っていない。今後、「羽幌町離島振興計画」に記述されているように地域資源を活用した料理、土産品等の開発を進め、新たな食シーンのラインアップを構築すべきであろう。図表3-8に示したものは一例であるが、食シーンを示し、市場にアピールするための言葉として「漁師の〇〇」といった言葉が用いられている。

図表 3 - 8 宿泊施設等における食シーンの演出例

宿泊施設名	特色	評価等
千葉県勝浦市 民宿まぐさ	新鮮な魚介類 旬の味覚舟盛り	楽天トラベル食事自慢の宿 4つ星以上 5つ星
静岡県伊東市 金目鯛の宿ころね	金目鯛の煮つけ 五感で楽しむ朝食 (焼きたての干物、伊豆産野菜、伊東の名水で炊かれたごはん)	楽天トラベルアワード 6年連続受賞
岡山県笠岡市 真鍋島 (まなべしま) 漁師小屋「漁火 (りょうか)」	豪快な漁師料理	食べログ 岡山 活エビが高評価
香川県坂出市 岩黒島 (いわくろじま) 民宿 みはらし	現役漁師の民宿ランチ	特になし
三重県鳥羽市 菅島 (すがしま) お弁当 おかげや	活鮓バーガー	特になし
宮城県松島町 桂島 (かつらじま)	海鮮バーベキュー 松島湾の離島「桂島」に渡って「海鮮バーベキュー」 10~40名まで	通年企画
兵庫県あわじ市 沼島 (ぬしま)	極上の「鱧」	沼島海域は鱧の好漁場として知られている
石川県七尾市 能登島 (のとじま)	島でランチ 能登島バーガー	七尾市では「すし王国」のPRを行っている
長崎県対馬市 対馬 (つしま)	いりやき (寄せ鍋) 石焼き料理	対馬グルメ食べつくしブックデジタル版
静岡県 初島 (はつしま)	初島漁師の丼合戦	2015年は2月7日~3月15日まで開催

資料：楽天トラベル、トリップアドバイザー等のHPから抜粋し作成

#### 4 焼尻島の観光振興に関わる諸課題

焼尻島の観光関係者を対象としたヒアリング調査では、概ね、下記のような現況と問題点が指摘された。観光需要に関しては総じて減少傾向にあること、旅行会社経由の観光客は6月に限定されていること、7月以降は個人型観光客が占めていること等が主な内容である。地域はこうした状況に鑑み、平成26年度は「宝さがしイベント」を実施して一定の効果があったと評価しているものの、コスト負担面では問題があるとも述べている。

図表4-1 ヒアリング結果(概要)

ヒアリング対象者	提示された諸課題
羽幌町役場 羽幌町観光協会 羽幌沿海フェリー	<p>リピーターの創出、誘客のためには観光メニューの充実が必要である。</p> <p>近年、旅行会社のパック旅行者は少数派で、個人旅行が9割程度を占めていると思われる。こうした個人旅行に対応できる観光メニューが必要である。</p> <p>モニターツアー参加者200名の感想として「島での滞在中に時間を持って余した」という声が多かった。</p> <p>観光メニューの検討にあたっては継続的な雇用に繋げるという視点が重要である。</p> <p>観光協会の本部は役場産業課内にあり、支部が天売島・焼尻島それぞれにある。支部で働く人は公募により選出した。島の観光振興の担い手は不可欠である。</p> <p>「宝さがしイベント」は外注したが、来年、実施する場合には自前で企画、実施する考えである。</p> <p>めん羊牧場を利用した体験観光は道内外の子どもの学習旅行を対象に考えている。</p> <p>島民数、観光客数共に減少傾向にあり、今後、継続的な利用者の確保は難しい。</p> <p>宿泊施設数が減少し、島側の受け入れ体制が懸念される。</p> <p>運賃の割引サービスは今後も続けていく考えである。</p>
宿泊業経営者	<p>6月は旅行会社経由のパック旅行、7月以降は個人旅行、将来的には小グループの旅行客を伸ばしたい。</p> <p>観光客からは「観光地化されていないところが良い」、「昭和的な雰囲気が良い」との感想が聞かれる。</p> <p>「宝さがしイベント」に要した費用は400万円で負担が大きい。</p> <p>海の日、お盆の時期を除いて満室で困るとの声は聞こえてこない。</p> <p>経営効率上、営業期間を4月～10月としている。</p> <p>焼尻島はコンパクトで自転車が乗れるなどの面が特徴である。</p>

資料：平成26年8月現地ヒアリング調査より一部記載

個人型観光客の量的維持、拡大は観光振興上、重要な課題であるが、焼尻島の観光資源は量的、質的に限られており、観光振興の角度を少し変えてみることも必要である。前述したように食をテーマとするならば焼尻島の食の価値を向上させる必要がある。安田（2012）は、「フードツーリズムを活

かした観光まちづくりにおいて、全国的な認知度と評価を得て、一定の期間持続的に、その地域の食を目的とした入込観光客数を維持している地域を見ると、「まち」自体をひとつの商品として取り組みした成果と思われるところが多い」と述べている。

焼尻島のサフォーク種の羊肉、「プレ・サレ焼尻」は高級サフォークラム肉として出荷され、札幌、東京の高級レストランで食材として使われている。また、スライス肉は家庭用、贈答用として通信販売されている。さらに、島の食堂、旅館等で食することも可能である。しかしながら、「プレ・サレ焼尻」の認知度は、「喜多方のラーメン」、「広島のお好み焼き」、「城崎のかに」、「宇都宮の餃子」といった水準には至っていない。さらに言えば、「プレ・サレ焼尻」が狙っている市場は高級市場で、そのブランド価値に活路を見出しており、上記商品の大衆化の道筋とは異なると思われる。

ヒアリング調査の意見にある観光メニューの創出との関連を考えるならば、新たな焼尻島の食シーンの構築は不可欠であろう。前述した通り、全国の離島等では食シーンの訴求が行われ、一定の成果もみられるようである。島の食堂、旅館、漁協が協力して「焼尻の〇〇」と認知されるような観光メニューへの期待は大きい。また、ヒアリング調査では「島での滞在中に時間を持て余した」との意見がみられた。島で観光客にどのように有意義な滞在をしてもらうかは全国の観光地の共通課題でもある。

有意義な滞在に関するメニューについて言えば、島の白浜キャンプ場は、テントサイト、炊事場、簡易水洗トイレが無料で島での有意義な滞在に寄与している。例えば、ウェブ上には父と娘が自転車で移動し、白浜キャンプ場で親子キャンプを楽しむ姿が掲載されている。また、オープンカーに乗って離島巡りを楽しむ男性が白浜キャンプ場で一人キャンプを楽しむ姿も掲載されている。有意義な滞在のスタイル、中身は十人十色であることを想定し、島から様々な島の楽しみ方を提案することも必要であろう。

離島（神島・菅島・答志島・坂手島）を抱える三重県鳥羽市は「鳥羽離島ガイドブック」（ウェブ上で提供）の中で、離島の楽しみ方を提案している。提案1は「島のかあちゃんの案内」というタイトルで島人の案内で自然や暮らし、歴史、味を楽しむものである。提案2は「達人との小旅行」で島の達人と一緒に島内を歩くものである。提案3は「女性ガイドのエスコート」で海女の暮らしや島の味覚を楽しむものである。特に答志島（とうしじま）の「海女小屋」は、海女さんたちが漁に出る前に体を温める場所としての海女小屋を観光客の体験場所として観光対象化したもので、そこでは囲炉裏を囲んで魚介類の食シーンを体験することができる。囲炉裏のある小屋という空間、サービスを提供する海女さん（漁期を除く）、食材としての魚介類という要素の組み合わせが特徴と言える。

離島振興計画において島の雇用創出は課題であると指摘されている。鳥羽市において離島の観光振興に貢献している（有）OZは鳥羽市に本社を置き、エコツアー企画、観光情報サービス、地域づくりコンサルティング等を事業内容とする会社で、現地で「海森ウォーク&漁家ランチ」、「もんど岬シーカヤック・カフェツアー」、「砂浜ランチツアー」といった観光メニューや学生、子ども団体メニューも企画、運営している。

他方、㈱ヒーローは東京都武蔵野市に本社を置き、デイ・キャンプ、バーベキュー場の管理、運営を全国で行っているが、近年、バーベキューは集客手段として注目されている。同社のバーベキューの特徴は「手ぶらでBBQ」と名付けられ、食材、器材等を利用者が準備しなくても良い点にある。また、バーベキュー用品も厳選されたものを使用して、バーベキューという商品の価値を高めている。さらに、終わった後のゴミ処理が含まれている点も利用者にとっては嬉しいようである。既に、羽幌

町では「地域おこし協力隊」の募集を行い、その後の起業、就業、定住といった地域の担い手育成を行っているが、今後、以上のような事例は参考になるのではないだろうか。島の食シーン、例えば、「焼尻BBQ」を商品化することをスタート地点として、島の観光スモールビジネスを担う地域おこし隊が生まれることを期待したい。

さて、観光基盤整備は公的セクターの役割で観光地の公衆トイレも近年では水洗化、バリアフリー化が進められ、かなり改善された。焼尻島においても公衆トイレは整備されているが、同島の宿泊施設の簡易水洗トイレ整備は100%とは言えない水準にある。島の宿泊施設は4軒、この内2軒が簡易水洗トイレを整えている。一般的にはこの問題は事業者の自助努力に委ねることになるが、離島振興の生活環境整備の一環として考え、改善策を見出すことも必要なのではないだろうか。

ヒアリング対象とした宿泊施設の収容人数は120人、営業期間は4月から10月までとなっている。他の3軒と合わせた島全体の収容人数は185人で、他の3軒は通年営業体制である。海の日、お盆の時期以外は満室との声は聞こえてこないとの話であり、総じて、宿泊客の確保が課題となっていることが推測できる。宿泊施設の良さを市場に伝えるため、4軒の内2軒がウェブサイトを開設し、情報を伝えているが、残りの2軒の情報はウェブからは取得できない。通信基盤が整えられた島の情報通信環境を前提に考えると、有効にそれを利用することが宿泊客の確保に繋がるのではないだろうか。先に述べた「地域おこし協力隊」の体制を公的セクターが整え、島の事業者と協同で次のステージに進んでもらいたい。

#### (参考文献)

- 越塚宗孝他 2013 「離島観光の諸課題－北海道奥尻島を中心に－」 第17回日本国際観光学会全国大会梗概集 p70-71
- 越塚宗孝他 2014 「離島観光の諸問題－北海道奥尻島を中心に－」 札幌国際大学 北海道地域・観光研究センター年報第6号 p7
- 越塚宗孝他 2014 「離島観光客の入り込み構造の分析と制約要因への対応に関する調査研究－奥尻島のケース－」 CPC調査研究報告 寒地港湾技術研究センター
- 姫野由香 牧田正裕 2009 「規模・基盤・産業・行政施策の経年変化にみる離島の構造特性と類型化－地方における自立的地域運営・経営に関する研究」 平成21年度国土政策関係研究支援事業 研究成果報告書 p137
- 大田理那 2012 「離島観光モデルからみた2009年十島村皆既日食ツアー：小規模外洋離島における観光資本と自治体の相補関係」 p2
- 坂田裕輔 2004 「離島地域の持続可能性に向けた産業育成手法～屋久島観光業を題材とした検討」 奄美ニューズレター 鹿児島大学 p18
- 羽幌町 「羽幌町離島振興計画」 p2
- 北海道留萌振興局 「平成24年度留萌の水産」
- 羽幌町 「町政要覧資料編平成24年版」
- 斉藤新一郎 1986 「北海道焼尻島におけるミズナラ・イチイ天然生林の群落学的研究」 北海道林業試験場研究報告 第24号
- 志田祐一郎 磯野直他 2006 「焼尻島の植物相」 利尻研究 25 p13-28 利尻町立博物館
- 羽幌町 平成24年 「羽幌町離島振興計画(仮称)策定のためのアンケート調査結果」
- 北海道運輸局 平成26年 「北海道における離島ツーリズム促進に関する調査事業報告書」
- 安田巨宏 2012 「フードツーリズムと観光まちづくりの地域マーケティングによる考察」 地域イノベーション 法政大学地域研究センター

# 今金町における着地型観光に関する研究

丹治 和典\*

## 1 研究の目的

地域は観光に大きな期待を寄せているが、期待する内容は多様である。観光客が増えることによる経済効果を期待するというものから、観光の視点を加えたまちづくりによる将来の発展を見据えた地域の振興までさまざまである。こうした期待が実現しているケースが多くない中で、着実にその成果をあげている地域も散見される。とりわけ観光立県宣言をかかげている北海道にとっては179市町村が競ってその成果をあげようとしている。本稿でとりあげる北海道檜山振興局管内の今金町は、交流人口の拡大による地域の活性化に関連する諸事業を積極的に展開しており、その取組みが高く評価されている。本稿では、過去2年間にわたり進めてきた同町と札幌国際大学との連携事業のうち、本学との連携事業の中核となっている滞在型観光の具体的プログラムの策定に向けた協働の取組みについて、平成27年1月に実施したモニターツアーを通してその課題と課題解決に向けての方策について考察する。

## 2 研究の背景

今金町は北海道南部に位置しており、太平洋岸の長万部町と日本海側のせたな町に挟まれた内陸部にある。札幌市からは約180km、函館市からは約120kmの距離にある。人口は平成26年12月末時点で、5,728人である。農業や林業が中心で、今金男爵というブランドを有するじゃがいもや軟白長ネギ、米など品質の高い農産物の産地として知られている。町を流れる後志利別川は自然の恵みをもたらしているだけではなく、釣りや川遊びなどの楽しみの場にもなっている。町内の美利河地区には旧石器時代の遺跡や幽玄な奥美利河温泉など歴史的・文化的価値をもつ場所がある。



今金町の位置（今金町のHPから）

平成25年3月に発表された国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、人口減少に歯止めがかかる“若年女性人口変化率”は-42.9%（2040年の若年女性人口が2010年の若年女性人口に比べてどの程度減少するかの比率、因みに若年女性は20～39歳）で札幌市を除く北海道内の市町村のなかでは減少率が少ないほうである。また、平成25年度に北海道が定めた、外国人観光客に対して宿泊その他の重要なサービスを提供する拠点地区を補完し、外国人観光客の受入・誘致に特に積極的に取り組む促進地域に指定されている。

こうした背景にある今金町では平成24年度に住民、大学などで協働のまちづくりを推進する基盤をつくるための組織として「今金町人流創生プロジェクト協議会」が設立された。同協議会は人流創生プロジェクト事業を展開してきたが、そのなかから同町と札幌国際大学の連携事業の骨子をとりあげ

\* 札幌国際大学

ると、概略以下のとおりである。

豊かな自然や肥沃な大地の恵みなどの地域資源を最大限に活用した着地型交流プログラム（自然・文化体験交流、農業体験交流、観光交流）の開発等を行うことにより、域外から交流人口増を図り、地域に循環する仕組みを構築し、一次・二次産業との連携のもと地域活性化や人材育成による力強い地域産業の活性化を図っていく。（「今金町人流創生プロジェクト事業の概要」から）

通過型の観光客を“まち”に足を止めてもらい滞在期間を延ばすことによる外貨獲得のための「観光ビジネス」の仕組みを構築するため、【地域の魅力づくり】が必要不可欠となることから、『地域資源の開発』（「ご当地グルメ」「観光体験メニュー」「周遊ルート」等）を行う。（「今金町人流創生プロジェクト事業の概要」から）

こうした協議会の趣旨と目的に沿って、本学との連携を通して以下のような事業を実施してきた。すでに数回の本学学生と協議会とのワークショップや本学教員による講演・講義が行われてきた。

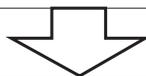
#### 大学連携実施事業

##### ●地域資源発掘・再発見事業

自然・文化・人・食・農をうまく組み合わせた体験メニュー着地型観光、周遊ルート開発案内板等の設置事業

##### ●田舎暮らし体験事業

ちょっとだけ「おもてなし」体験の開発  
啓発活動と具体的な受け入れ整



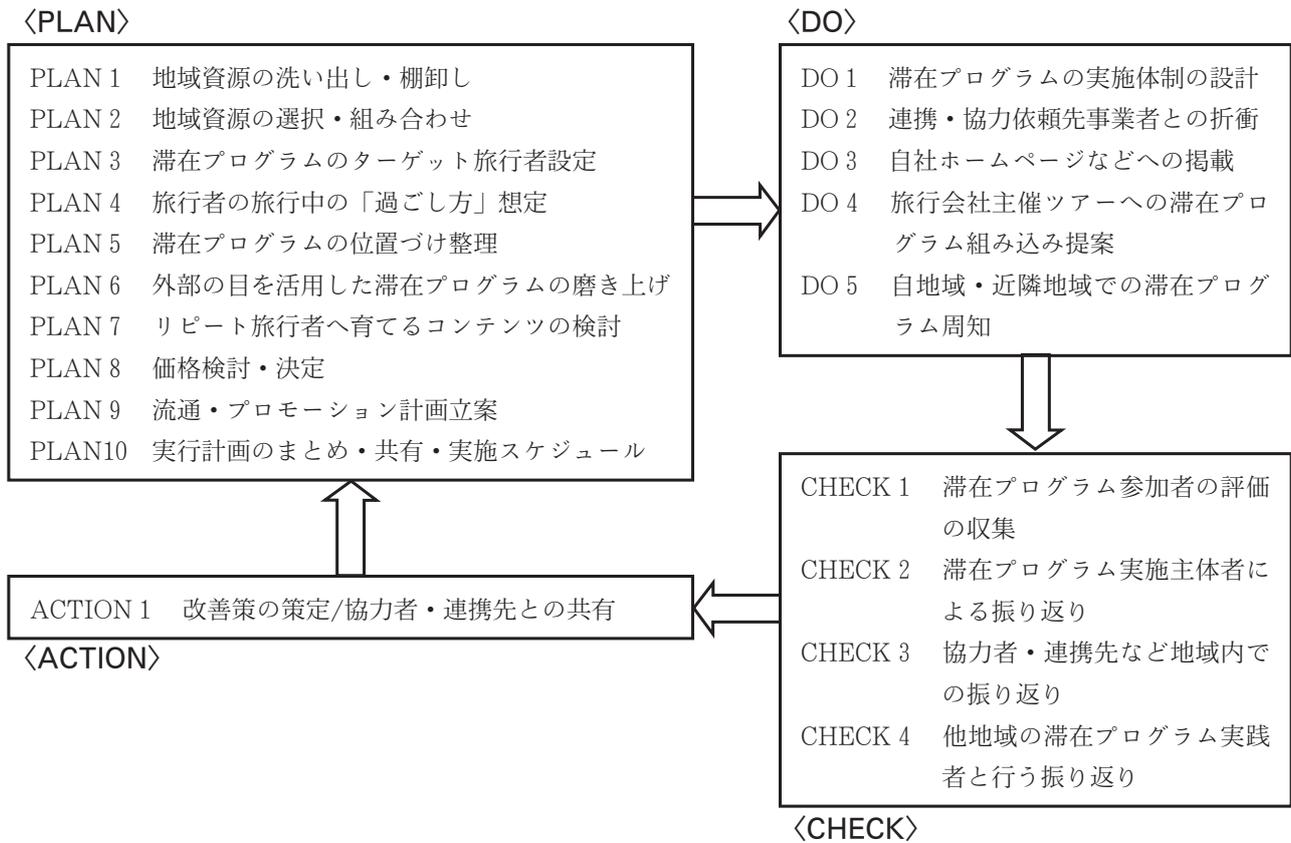
ワークショップ・フィールドワークから導かれた今金の魅力を具体的な“かたち”にする。  
魅力を活かした体験プログラムの開発や情報の発信などを“かたち”にする。

### 3 着地型観光の意義

上記の大学連携実施事業にある自然・文化・人・食・農をうまく組み合わせた体験メニューを盛り込んだ着地型観光、周遊ルートの開発のために過去2年間に夏・冬2回ずつ本学学生によるモニターツアーを実施した。着地型観光は、地元の人しか知らないような場所や楽しみ方を新しい観光素材として提供し、プログラムを企画・実施するものである。この企画・実施過程を通して地域おこしや地域振興につながるという期待が高まっている。さらに、着地型観光の主眼として、その地域を訪れた観光客と地元の人びととの交流が活発に行なわれること、できるだけ長期間滞在をしてさまざまな体験をしてもらうことが設定されている場合が多い。滞在型観光の意義は、その土地を訪れる多くの旅行者に、その地域ならではの体験・出会いがあり、旅行の魅力に加わり、旅行者の満足度が高まり、旅行者が多くなることで、地域の活性化につながることにあり、地域再生には不可欠なものとなっている。（国土交通省観光庁 「地域発滞在プログラムの手引き ～地域の目指す姿に近づくためのPDCAサイクル推進～」 平成25年3月）

今金町では図表1のプラン1～7まではすでに実施してきた。今後プラン8以降について実際に展開されることが課題となる。本稿では、連携事業としてこれまでかかわってきた経過を振り返り検証

しながら、着地型でしかも滞在型の交流プログラムあるいは旅行商品の開発に向けての成果と課題について考察する。



図表 1 滞在プログラム推進のためのPDCAサイクル

#### 4 着地型観光モニターツアーの実施

今金町を旅行目的地とした着地型観光のモニターツアーを平成25年度に夏・冬2回実施したが、平成26年度も図表2にあげた夏・冬2回のモニターツアーを実施した。

図表 2 平成26年度に実施した今金町でのモニターツアー

実施日時	参加者	旅行内容
平成26年7月19～21日 今金町	札幌国際大学・大学院外国人留学生9名（中国2名、韓国1名、台湾2名、ロシア3名、タイ1名） 教員6名 今金町職員 3名	『外国人留学生を対象としたモニターツアー』 「北海道における国際観光推進プロジェクト」として、今金町における外国人を対象とした着地型旅行商品の可能性を検討するためにモニターツアーを実施した。 今金町における観光モニターツアーを通じて、ツアー参加者の視点から観光対象等を評価してもらい、今後の訪日外国人来道者誘致、観光まちづくりに資するものとするための情報収集とその評価を行った。

実施日時	参加者	旅行内容
平成27年1月23～25日 今金町・函館市	札幌国際大学 観光学部学生5名 教員1名 今金町職員 2名	『厳冬の今金～スノーシュー・トレッキングによる小さな旅』（モニターツアー実施） 「今金町における着地型観光に関する研究」の一環として、冬季の旅行商品開発のためにモニターツアーを実施した。函館在住者が1泊2日で冬の今金町を楽しむという想定で企画された旅行のモニタリングを行った。スノーシュー・トレッキングを2回行い、その記録を参加学生が「旅行記」にまとめ、web上（札幌国際大学北海道地域・観光研究センターHP）に公開する。

本稿では、平成26年度に実施したモニターツアーのうち、冬季に実施した内容について詳述する。同ツアーは、冬季間の今金町における着地型旅行の一つとして、下記の内容で町の担当者と共同で企画し実施した。

実施日時：平成27年1月23～25日の3日間

参加人数：札幌国際大学観光学部4年生5名、教員1名

旅行内容：旅行のテーマは、「厳冬の今金～スノーシュー・トレッキングによる小さな旅」とし、函館市在住者が1泊2日の旅行を楽しむという想定で実施した。函館から今金町までの移動は①列車+バス②バス+バス③車の3つのグループに分けた。3グループともに今金町で落ち合い、移動当日の午後と翌日の午前中に、約2時間半程度のスノーシュー・トレッキングを2回行った。コースの選定およびガイドは町の職員が担当し、昼食と夕食についても飲食店やメニューの選定も事前に手配した。

旅程概要：

	列車+バス	バス+バス	車
一	JR函館駅 8：13発  JR長万部駅 9：32着 JR長万部駅前バス停11：47発 今金 12：17着 ホテルチェックイン 13：00 昼食	JR函館駅前バスターミナル 7：22発 JR長万部駅前バス停9：50着 JR長万部駅前バス停11：47発 今金 12：17着 ホテルチェックイン 13：00 昼食	JR函館駅前出発 9：00出発 (途中、新幹線駅舎見学、今金町内JAZZ喫茶に立寄る) 12：30 ホテル着 ホテルチェックイン 13：00 昼食
日 目	 JR函館駅発の列車	 JR函館駅前発のバス	 新幹線「新函館」駅前

	14:00	1回目	スノーシュー・トレッキング	(今金総合公園内)
			林間散策・そり遊び	
	18:00	夕食		
二 日 目	09:30	ホテルチェックアウト		
	10:00	2回目	スノーシュー・トレッキング	(美利河ダム周辺)
	12:30	昼食	ピリカスキー場内レストラン	
	13:30~15:00		ピリカスキー場でスノーチューブ遊びなど	
	15:47	ピリカスキー場内バス停発	長万部行きバス乗車	

モニターツアー終了後、参加学生5名が旅行記を作成した。内容の一部を抜粋して以下に記す。なお、旅行記の全文は、本学北海道地域・観光研究センターのHP内にアップする。

一人の小学生と思われる少年が乗車した。するとバスの運転手が、「ぼうず、券とったか？」と話しかけていた。少年は静かにうなずきそそくさと席に座った。バスの運転手は少年が座ったのを確認すると前を向き直した。そして、バスが動き出した。僕は札幌では見ることのない光景に少し驚いた。しばらくして、あるバス停に止まると先ほどの少年が降車しようとしていた。するとまた運転手が、「ぼうず、お父さんによろしく。」とまた話しかけた。少年はうなずき、降りて行った。こういった光景はローカルバスならではなんだと感じた。(館山真伍)

駅に着き、電車に乗り込むと、土・日ということもあり車内は非常に混雑していた。日本人の他に中国人やアメリカ人と思われるいろいろな国籍の人たちがいた。さまざまな言語が車内で飛び交っていて、その光景はなにか不思議な感じだった。指定席が満席で券が取れず、自由席もほぼ満席で、諦めた感じで通路に立って写真を撮っていた時だった。台湾か中国から来た人たちだったのだろうか、私に何かを英語で尋ねてきた。(松浦奨)

見覚えのない顔に話しかけてきたのだろう。15分ほど大学のことやこれからの今金について話した。その中で私はひとつ印象に残った言葉がある。「早坂を驚かせるようなことを考えてほしいな。」早坂とは先ほども出てきたが役場の方である。この言葉を聞いたとき、若い私たちにはこの町を変えることができる力、そして使命があるんだと感じた。(牛腸竜太)

二日目は、美利河ダムの周囲を歩くコースだったが、距離も長く、雪も深かったため昨日よりも大変である。しかし、ダムから見ると山々は神々しく私の疲れた体や心を励ましてくれているようであった。その後、魚道の観察をしたが、川が凍っていてよく見えなかった。夏に来てリベンジしたい。魚道から少し歩くと終点に着いた。疲れたけどスノートレッキングが楽しかったためまだまだ物足りなく感じた。(米田剛)

今日のトレッキングは美利河ダム周辺だ。スノーシューを履き朝日にキラキラと輝く美しい新雪に一歩足を踏み入れてみる。サクッサクッと気持ちの良い音を立てる新雪たちは私の冒険心を強く燦り、それに煽られた私の心は無意識のうちに私の両足を前に前にと進めていた。空は雲一つない快晴で辺りには真っ白いシルク生地がどこまでも続いていた。新鮮な空気を吸い込み体が浄化されていくのを感じる。(三上次郎)

※ ( ) 内の氏名は、今回のモニターツアーに参加した本学観光学部の学生。

旅行記の内容から、移動中や滞在先での交流を通して日常生活との違いや自分自身の社会的な役割などについてあらためて気づいている様子がうかがえる。また、自然の中でのスノーシュー体験を通して心地よさや冒険心の目覚めを感じ取っていることが伝わってくる。



美利河ダム周辺 (写真上・下)



今金町総合運動公園内  
(写真左上・左下・上)



今回実施した体験プログラムは今金町が平成24年に㈱リクルートライフスタイルじゃらんリサーチセンターに依頼して実施した「北海道今金町ギャップ調査報告書」に基づいて、企画した。

滞在型交流プログラムおよび旅行商品の造成にあたって検討すべき点は〈現状把握〉〈顧客の絞込み〉〈資源の競争力把握〉〈町の進むべき方向性〉の4つであるが、各項目について今金町のケースを同調査報告書の内容から抽出して整理すると以下のようなものである。

#### 〈現状把握〉

どのような人に、どのように訪れてもらうことで、交流人口を増やし、地域の活性化につなげていくのか。その基本的な方針や計画をつくるにあたり、町の現状を把握することが求められる。たとえば、

- 今金町には、どのような人が何人ぐらい来ているのか
- なぜ、今金町に来たのか
- どこから、どのようにしてきたのか
- 何度目の来訪で、町での消費額はいくらか
- 人口統計学上の特徴は何か

などである。同調査報告書によれば、今金町の来訪経験者は函館市在住で、40～50歳代の男性が多い。

図表3 今金町の来訪者プロフィール

Q:今金町に行ったことがありますか。

	全体	1回	2回以上	仕事で	その他で	ない
全体	1035	6.8	4.4	6.1	11.8	32.7
東京都	310	1.3	0.3	0	0.3	9.4
札幌市	515	8.7	4.1	6.6	10.7	46.4
函館市	210	10	11.4	13.8	31.4	33.3
男性・計	470	8.5	6.8	11.5	13.8	26.6
男性20代	57	7	3.5	1.8	8.8	21.1
男性30代	71	2.8	7	5.6	16.9	16.9
男性40代	81	6.2	4.9	13.6	13.6	28.4
男性50代	118	14.4	11	14.4	16.1	25.4
男性60代以上	143	8.4	5.6	14.7	12.6	33.6
女性計	565	5.3	2.5	1.6	10.1	37.7
女性20代	150	2.7	1.3	1.3	8.7	24.7
女性30代	135	4.4	0.7	1.5	5.9	43
女性40代	127	7.9	3.1	0	15.7	39.4
女性50代	89	7.9	6.7	4.5	12.4	38.2
女性60代以上	64	4.7	1.6	1.6	7.8	53.1

「ギャップ調査報告書」から

〈顧客の絞込み〉

商品を開発する際に大切な来訪者が求める利益について理解しておくことが求められる。「町の資源」「商圈」「顧客特性」「来訪者が求める利益」の4つの要素について整理すると図表4のとおりとなる。

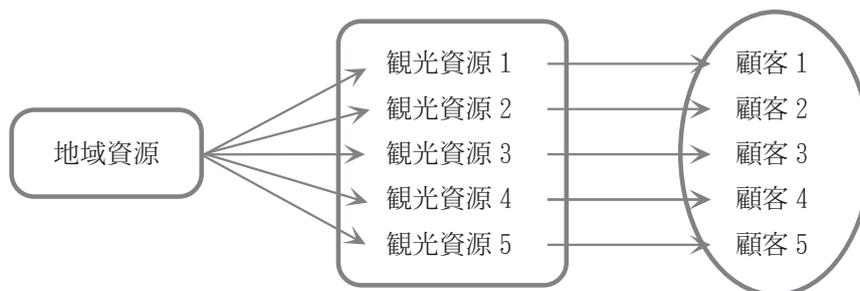
図表4 今金町が想定できる着地型旅行商品の特性

	町の資源	商 圏	顧客特性	顧客が求める利益
1	山・川・農村	車で2時間圏内（函館市周辺在住）	40～50代の夫婦、家族連れ	自然体験・農業体験

（「ギャップ調査報告書」から）

〈資源の競争力把握〉

町のなかに存在する個々の地域資源に焦点をあてた方が、具体的な集客交流事業の考え方を整理しやすい。個々の地域資源を観光資源として位置づけた場合、その資源の「比較優位（他と比較した際の優位性）」、「競争力」について正確な評価を行う必要がある。図示すると以下のようなものである。



〈町の進むべき方向性〉

つぎに、町の何を守り、何をマーケットに適合させ、どのように来訪者を大切にしながら将来に向けて成果を出していくのかを考えることも必要になる。

- 今金町は、どのような来訪者をもっとも惹きつけやすいのか。
- どのような来訪者を惹きつけることが、今金町にとって価値があるのか。

地域のありたい姿と旅行者との関係性（参考例）

少子高齢化が著しく定住人口減を補うために、交流人口（旅行者）をできるだけ増加させ、正印面・経済面で地域活性化をはかりたい
地域の若者が、地域で暮らしていきたいが仕事がない状態のため、交流人口（旅行者）拡大により地域の雇用を生み出し、若い人が地域に定着できるようにしたい
地域が一丸となって旅行者を受け入れ、もてなすという目標を持ち、取り組みを行うことで、地域の求心力・一体感を醸成したい
地域の価値・資産・資源を守るために、その保全・維持・次世代への継承に関わるコストを旅行者来訪による収入で賄っていききたい
地域の価値が正しく伝わり、その地域の価値を理解できる旅行者に訪れてもらえる地域にしたい

（「地域発滞在プログラムの手引き ～地域の目指す姿に近づくためのPDCAサイクル推進～」から）

## 5 考察

今回のモニターツアーを通して、今金町における着地型観光の現況と課題について整理する。着地型観光は原則として、現地集合・現地解散を想定するが、実際には現地までの移動も旅行の魅力を設定する要因である。今金町は札幌市から約180km、函館市から約120kmの距離にある。両者の違いはさほどではないように思われるが、「ギャップ調査報告書」でみるかぎり今金町への来訪経験者は函館市在住者が圧倒的に多い。今回のモニターツアーでは函館市在住者を想定して今金町までの移動手段を、JR+バス、バス+バス、自家用車の3つに分けて実施した。移動時間はJR+バスとバス+バスともに約4時間、車の場合は約2時間であった。しかし、学生たちの旅行記からもわかるように、JRの駅ホームでの様子や車内での外国人とのやりとり、またバスの車内での運転手と少年との会話などは移動中のできごとであり、一種の異文化体験である。一方、車での移動では、冬期間ということもあり、特段楽しめる場所は多くなかったように思われる。目的地まで短時間で移動することが第一義になってしまっているとも言える。移動中の楽しみも旅の良さであるとするれば、適度な移動時間はそれらを提供してくれる条件にもなる。

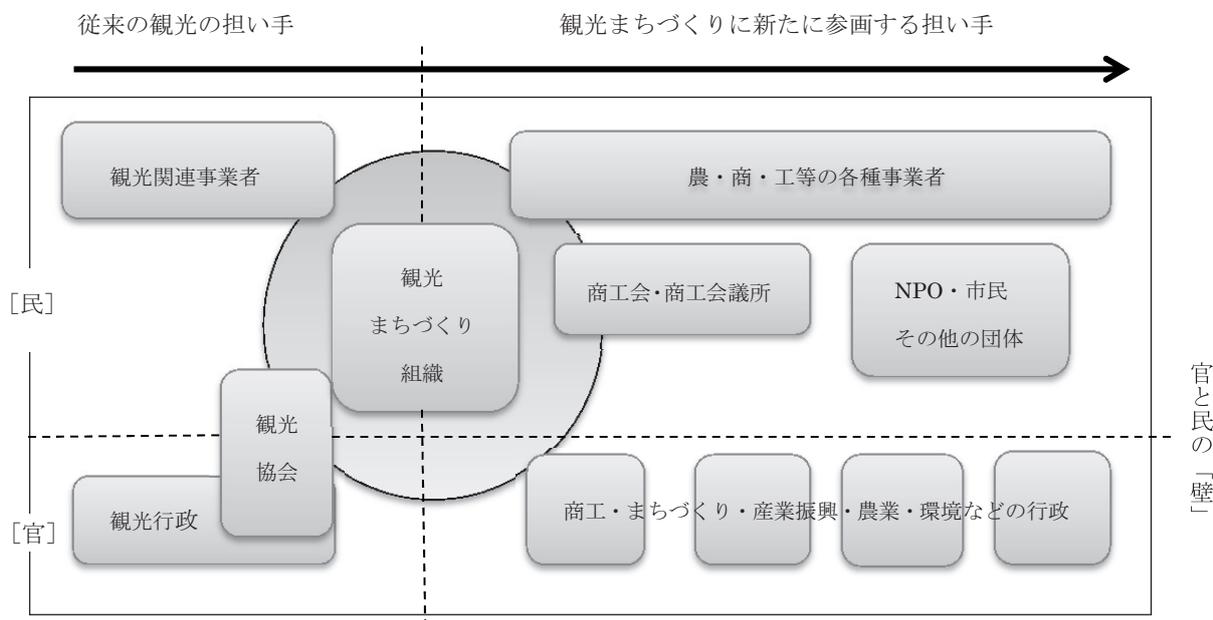
また、今回のテーマは、「厳冬の今金～スノーシュー・トレッキングによる小さな旅」であった。平成25年度には同じ冬期間にジェットスキー試乗体験やクロスカントリースキーを主要なメニューとして実施された。今回はより手軽に楽しめるスノーシュー・トレッキングを主目的とした。スノーシューを履くことによって、徒歩やスキーを利用した場合には足を踏み入れることのできない場所まで行くことができ、普段は見ることのできない角度で自然を観察することができた。また、学生の旅行記にあるように“新鮮な空気を吸い込み体が浄化されていくのを感じる”ことなどにより非日常性を感じとれるプログラムであった。ツアーの企画段階で町の職員にルートの選定などを依頼し、ツアー当日には職員2名がガイドとして同行した。

今回のモニターツアーを含めて数回にわたるツアーの実施より、外部の目を活用した滞在プログラムの磨き上げやリピート旅行者へ育てるコンテンツの検討については、次のような点からその成果を確認できよう。複数回参加した学生の中には、今金町の町の魅力を具体的に指摘できるものが多く、町の職員や地元の人たちとの再会を楽しみにしているなど着実に同町に対する愛着は増している。これらがリピーターとなるための潜在要因であることは言うまでもない。

## 6 課題

図表1の滞在プログラム推進のためのPDCAサイクルにある〈PLAN8〉価格検討・決定、〈PLAN9〉流通・プロモーション計画立案、〈PLAN10〉実行計画のまとめ・共有・実施スケジュール、が今金町における着地型旅行商品を造成・販売するうえでの今後の課題である。観光庁の「着地型旅行市場現状調査報告（平成23年度調査）」では、着地型旅行全体を見るマネジメント力をつけるために“1人で出来なければ異なる能力を持つ人が集まって物事にあたる”ことを提言し、さらに“販路を拡張するために”旅行会社や行政と連携すべきであると指摘している。冒頭述べたように、着地型観光はただ単に観光客を誘致することだけが成果ではなく、もともとの理念において、さらにはその企画・造成・販売過程において将来のまちづくりを見据えた地域全体での合意形成が大きな成果として見込まれなければならない。こうしたことを考えたとき、大社充（2013）が指摘する図表5に示す観光まちづくり組織の設立とその運営による有効性に関する考察は多くの示唆を与えてくれる。もちろん、今金町における着地型観光のあるべき姿を想定する際にも同様である。

大社充（2013）は、幅広い多種多様な地域の人や組織と連携しながら、まちづくりを推進し、交流人口を増やして地域経済を活性化していくための組織として図表のような観光まちづくり組織を提案している。官と民との壁を乗り越えて、既存の利害関係者だけにとどまらずNPOや市民団体、さらには大学などとの連携を密にして新たな方向性を模索すべきであるという考えに基づいている。町の将来方向をしっかりと見据えて、持続可能な運営を展開するためには妥当なものと考えられる。今金町において同様な組織を想定して、今後の事業を展開するのか、別のかたちを想定するのかについて比較検討する必要がある。当初の目標を達成するために、ひとつのモデルの有効性、実現可能性を検証することで、現実的なそしてより地域の特性に見合った選択肢の絞り込みが容易になるものと考ええる。



図表5 新たな観光まちづくり組織のポジショニング  
（大社充『地域プラットフォームによる観光まちづくり』p.150）

### 【参考資料・文献】

- 国土交通省観光庁 「地域発滞在プログラムの手引き ～地域の目指す姿に近づくためのPDCAサイクル推進～」 平成25年3月
- 国土交通省観光庁 「着地型旅行市場現状調査報告書」 平成24年3月
- 大社充 『地域プラットフォームによる観光まちづくり』 学芸出版社 平成25年
- ㈱リクルートライフスタイルじゃらんリサーチセンター 「北海道今金町ギャップ調査報告書」 平成24年12月

# ビジットジャパン以降の北海道の国際観光動向と 国際観光（インバウンド）の枠組みに関する研究

千葉 里美\*

## 1. 研究の背景と目的

2003年、時の小泉総理大臣の施政方針演説にて「日本を訪れる外国人旅行者を2010年までに1,000万人へと倍増させる」との具体的目標が掲げられたことで、ビジットジャパンキャンペーン（以下よりVJCとする）を中心とする訪日外国人旅行者誘致活動の促進に向け国を挙げた取り組みが始まった。2010年6月には、閣議決定された「新成長戦略」において改めて観光立国の実現が掲げられ、人口減少、少子高齢化、地域の疲弊が進む我が国において一層の外国人旅行者誘致が地域活性化の起爆剤になるとして、これまで以上の期待が寄せられている。こうした中、2013年に訪日外国人旅行者数がVJCで掲げた目標の1,000万人に到達したうえ、その翌年2014年には1,300万人を達成した。これによりオリンピック・パラリンピック東京大会が開催される2020年に向けて2,000万人の目標が新たに掲げられたところである。

北海道の外国人観光客誘致目標は、2013年に発表された北海道外国人観光客促進計画にて示され、2017年度までに120万人以上と掲げている。実際は、2014年11月に前年の127万人を達成し過去最高の入込が確実となり、2020年度までに300万人へと目標の修正がなされた。

北海道財務局が3カ月ごとに発表する北海道経済動向によると<sup>1</sup>、宿泊業の順調な客室稼働率、外国人来道者の消費額単価が国内来道者の2倍（36,536円）にのぼるなどプラスの経済効果が取り上げられている一方、外国人団体旅行用のバス不足、人手不足による外国人受入れ態勢が追い付かない、バス運賃値上げによる地方への移動が困難、新千歳空港の発着枠がパンク状況にあるなどハード面とソフト面のサービス力の低下が指摘されているほか、観光分野における経済情勢は横ばい状態のままにある。

日本の経済発展において世界の観光需要を取り込む国際観光は最も成長を期待されている分野であることから、本研究は今後の北海道の国際観光研究を進めるうえでの基礎研究とし、VJC以降の北海道の訪日外国人来道者の観光動向と特性を道庁の統計資料から検証すると同時に、この間、北海道の国際観光並びに国際観光に関してどのような調査研究がなされてきたのか整理し、国際観光研究の枠組みについて考察することを目的とする。

## 2. 国際観光促進に向けた観光政策と北海道外国人観光客の動向

### 2-1 観光庁の取り組み

2007年に策定された「観光立国推進基本計画」（2007-2011年）は、VJCの意向を組んだ形で訪日外国人旅行者数を2010年までに1,000万人へとの目標を定め、これまでの5大重点市場（韓国、中国、台湾、アメリカ、香港）のプロモーション事業展開と同時に国際会議の開催件数目標も掲げられた。この結果を踏まえ2012年、「(新)観光立国推進計画」（2012-2017年）が発表された。プロモーション重点市場は、今後、富裕層・中間層等急速な拡大が見込まれる東南アジアを含む15市場（上述の5大市場+インド、マレーシア、ロシア、タイ、シンガポール、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、

---

\* 札幌国際大学

オーストラリアの8市場)へと拡大が図られ、プロモーションのあり方に関して戦略的に進めることが一層強調された内容である。

VJC継続版としては、「訪日外国人3000万人プログラム」が2010年に発表された。これは訪日外国人旅行者を2016年までに2,000万人、2019年までに2,500万人、将来的には3,000万人を目標に掲げている。

一方、近年の東南アジアからの入込増加と更なる促進に向け、日本とASEAN（東南アジア諸国連合）友好協力40周年を契機に「東南アジア・訪日100万人プラン」が策定された。

マレーシアやインドネシアのムスリム層に向けたプロモーション活動や受入れ環境整備へむけ、主にムスリムセミナーの強化が各地ですすめられた。更に、訪日外国人の飛躍的な拡大をめざし、「観光立国実現に向けたアクション・プログラム2014」がまとめられた。そこには、日本ブランドの作り上げと発信、ビザ要件緩和、受入れ体制の整備改善、MICEの誘致の4点が重点施策としてあげられている。

これらを踏まえ2015年の観光庁は、①観光振興による地方創生、②インバウンドの飛躍的な拡大、③観光による国際相互交流の3点を重点的に取り組むとしている。特に②においては、プロモーションの重要性についてが述べられ、本年度より日本政府観光局（JNTO）が訪日プロモーション事業を直接執行するといった大きな変化が見られる。

## 2-2 北海道の取り組み

国際観光が重要な施策として位置付けられたのは、2001年に施行された北海道のくにづくり条例からで、外国人が安心して観光できることへの配慮が基本理念となっている。これに伴い北海道は、同条例の具体的行動計画を5年ごとに策定している。

2013年からは前述した「北海道のくにづくり行動計画」の趣旨を踏まえ、国際観光の推進に特化した「北海道外国人観光客来訪促進計画」を発表した。図表1は、その一部を添付したものである。従来の指標に加え、全国の訪日外国人客数に対する北海道の比率や観光消費額などが新指標として盛り込まれ、他のエリアを意識した国際観光地づくりへの展開要素がみとれる。また振興策では、市場ニーズによる戦略的なプロモーションと航空路線展開を盛込んだ新市場開拓など多様なニーズの受入れに向けた総合的国際観光地づくりである。

図表1 北海道外国人観光客来訪促進計画

III 計画の目標	
外国人観光客が安心して快適に観光を楽しむことができる、国際的な質の高い観光地づくりを進め、海外から多くの方に何度でも訪れていただける観光地・北海道を実現する	
<b>【目標指標】（平成29年度）</b> 【来道外国人観光客の拡大】 <input type="checkbox"/> 外国人の来道者数（実人数） 120万人以上 新■ 訪日外国人客数における来道外国人客数のシェア 10% 新■ 全国の延べ宿泊者数における北海道のシェア 10% 【来道外国人観光客の旅行満足度の向上】 <input type="checkbox"/> 北海道に「また必ず来たい」と思う旅行者の割合 60% 新■ 「とても満足した」と思う観光客の割合 50% 【来道外国人観光客の誘致による経済効果の向上】 新■ 外国人来道者の道内観光消費額（1人あたり） 15万5千円	<b>【新たな目標の設定の考え方】</b> <input type="checkbox"/> シェア目標 国内観光地との競争力の強化（東京・京都主体から北海道観光へ） <input type="checkbox"/> 旅行満足度 従来の目標と合わせ、リピーター獲得の指標化 <input type="checkbox"/> 観光消費額 外国人観光客が地域に及ぼす経済効果の更なる向上と「見える化」
IV 国際観光の振興方策	
<b>戦略的な宣伝誘致活動の推進</b> <input type="checkbox"/> 対象国・地域の市場ニーズに応じた戦略的な宣伝誘致活動の推進 ・国・地域別の取組方向を策定するなど、きめの細かい観光プロモーションを展開 ・新市場など誘致対象国・地域の多様化を推進 <input type="checkbox"/> 特定分野にターゲットを定めたプロモーションの推進 ・地域資源の活用など北海道観光に対する観光客の多様なニーズに対応した観光商品の開発とプロモーションの展開 <input type="checkbox"/> 国際定期航空路線等の誘致促進	
<b>国際競争力を有する質の高い観光地づくり</b> <input type="checkbox"/> 国際競争力の高い魅力ある観光地の形成 <input type="checkbox"/> 地域独自の魅力を生かした旅行商品開発の促進 <input type="checkbox"/> 外国人観光客が安心して快適に観光できる環境づくり <input type="checkbox"/> 情報案内機能の充実 など	<b>観光に関する基礎的データの収集及び調査の実施</b> <input type="checkbox"/> 外国人観光客誘致のための市場の実態などの把握 <input type="checkbox"/> 外国人観光客の動態や関連産業の実態などの把握 <input type="checkbox"/> 外国人観光客の満足度や観光消費の実態等の把握

出典)北海道(2013)「北海道外国人観光客来訪促進計画」(概要)より一部抜粋

## 2-3 統計調査からみたVJC以降の北海道外国人観光客の動向

### (1) 概況

図表2は、VJC以降の訪日外国人来道者数推移と対前年比、そして訪日外国人全体に占める北海道の外国人来道者含有率の3点をまとめたものである。2003年に約30万人であった訪日外国人来道者数入込は、ほぼ毎年対前年比100を超える右肩上がりにて推移し、2013年には約115万人と10年で約4倍強の伸びとなった。(2008年リーマンショック、2009年新型インフルエンザ、2011年東日本大震災を除く)特に、LCCや国際定期便(新千歳空港とハワイ、バンコク、台北等)の新規就航があった2012年以降は、対前年比138-145と大幅に伸びていることが見て取れる。訪日外国人全体数に占める外国人来道者数含有率は、当初4.7%であったが2013年には11.1%と、北海道外国人観光客来道促進計画にて目標とされた10%を既に超える結果ある。これは、従来の様な都心主体の国際観光から、地方主体の国際観光へ転換されてきたと考えられ、今後更なる発展の可能性がうかがえよう。

図表2 VJC以降の訪日外国人来道者数推移と訪日外国人に対する含有率

	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年
入込数(人)	293,780	427,050	513,650	590,650	710,950	689,150	675,350	741,700	569,700	790,400	1,153,100
前年比	100.0	145.4	120.3	115.0	120.4	96.9	98.0	109.8	76.8	138.7	145.9
含有率(%)	4.7	7.0	7.6	8.1	8.5	8.3	9.9	8.6	9.2	9.5	11.1

出典)北海道経済部観光局(2014)「北海道観光入込客数調査報告書」

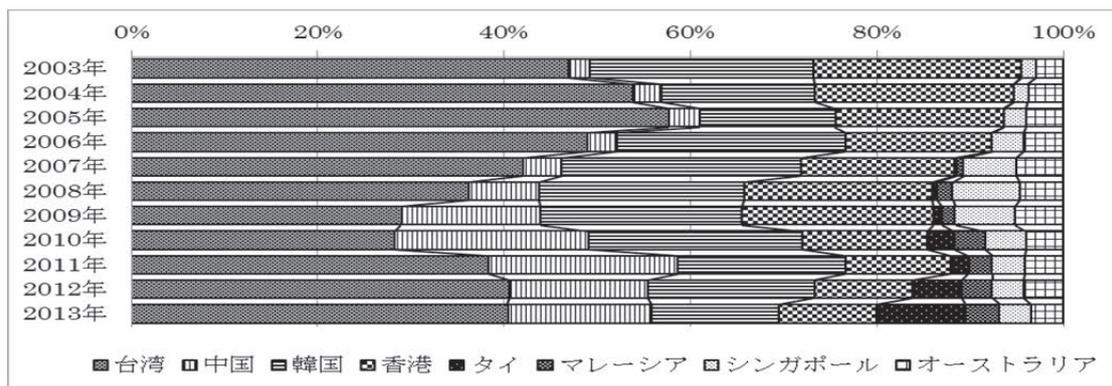
### (2) 入込数と宿泊延べ数の比率からみた動向

2013年の訪日外国人来道者数の国別入込数によると、1位は台湾(415,600人)、2位は中国(158,300人)、3位は韓国(141,600人)、4位は香港(107,300人)、5位はタイ(98,800人)、6位はマレーシア(36,400人)、7位はシンガポール(35,600人)、8位はオーストラリア(35,400人)であり、上位8か国で訪日外国人来道者数全体の89%と約9割を占める。そこでこの上位8か国を対象に2003年以降の入込数比率を図表3、宿泊延べ数比率を図表4に示した。

入込数においてリーマンショックのあった2008年までを見ると、台湾、韓国、香港の3か国にて訪日外国人来道者数の8-9割を占めていたが、それ以降ビザ免除を始めとするビザ要件緩和などから中国、シンガポール、タイ、マレーシアといった東南アジアからの入込比率も目立ち始めている。加えて、8位の長年安定した入込にあるオーストラリアに加え、ランキング外であった9位のアメリカもここ数年増加傾向にあることから、インバウンドの多様化が進んできていることが近年の特徴的な動向と言えよう。

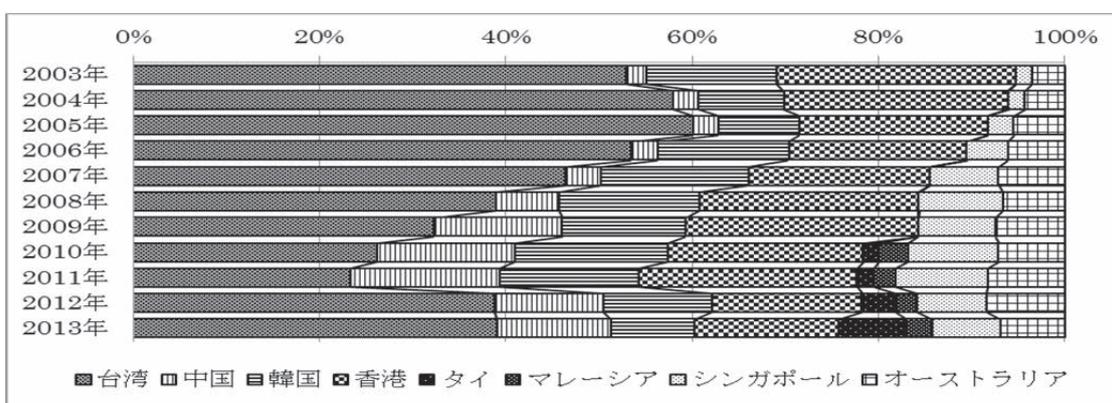
次に宿泊延べ数比率から見る傾向である。入込数比率とあまり大きな変化はないものの、香港、シンガポール、オーストラリアの3国は、入込数よりも宿泊延べ数の割合が高く転じていることから長期滞在型であることがうかがえる。一方、中国や韓国は、入込数より宿泊延べ数が減少しており、他の国々と比較し短期滞在型傾向である。

図表3 入込数比率（上位8か国）



出典) 北海道経済部観光局「訪日外国人来道者数」より筆者作成

図表4 宿泊延べ数比率（上位8か国）



出典) 北海道経済部観光局（2013）「北海道観光入込客数調査報告書」平成15-25年度より筆者作成

### (3) 月別訪日外国人宿泊延べ数推移からみた各国のシーズン動向

訪日外国人来道者数の月別訪日外国人宿泊延べ数推移から上位8か国のシーズン動向をまとめた。以下、国ごとの特徴である。

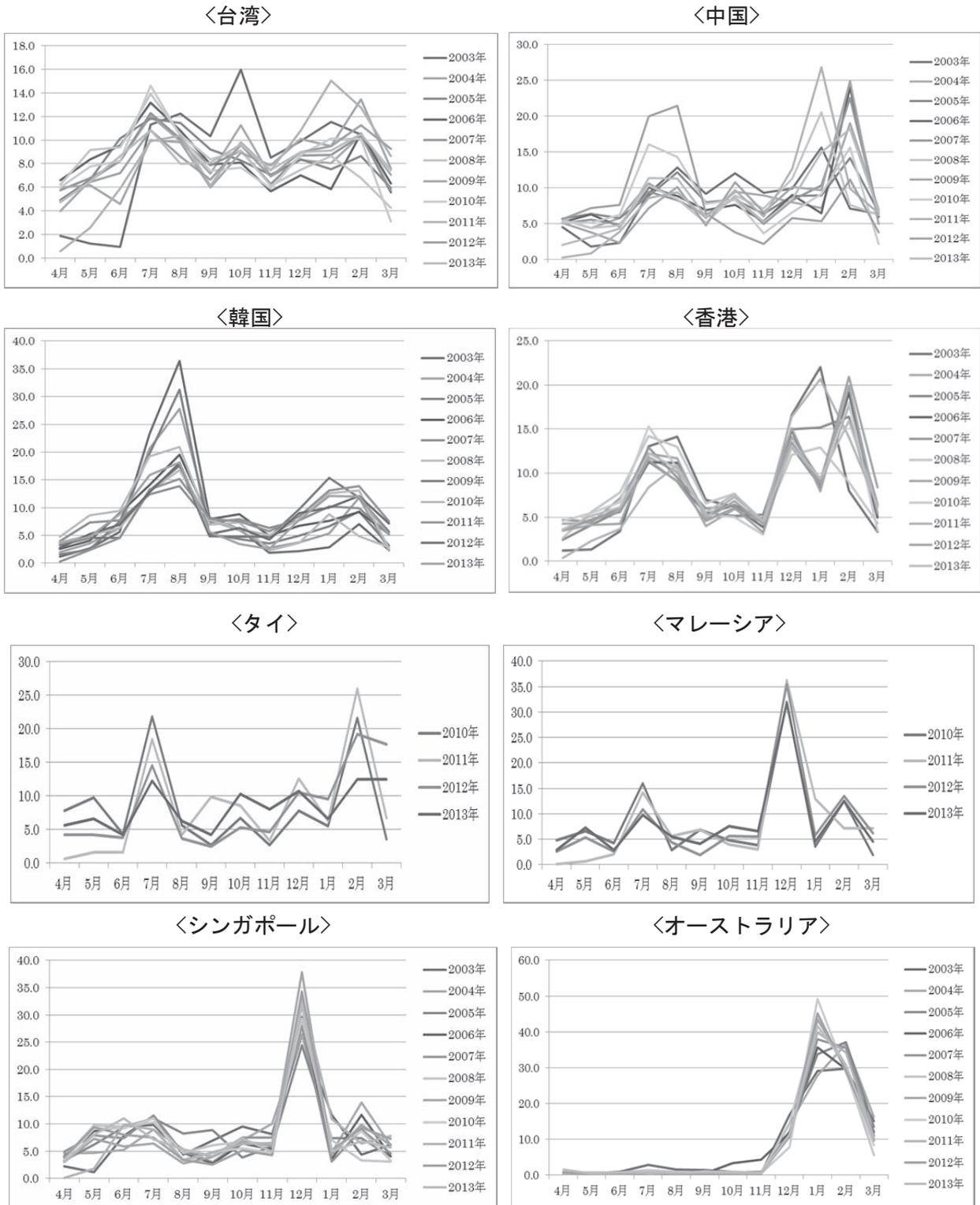
- ①台湾：年により変動があるものの、7月、10月、2月の3つの山が確認できる。中でも7月の夏休み時期と旧正月の2月時期の割合はそれぞれ12%前後である。
- ②中国：2010年を除き概ね台湾と同様の7月、10月、2月と3つの山が確認できる。しかしながら、旧正月の2月の比率は25%前後と7月（12%前後）と10月（10%前後）と比べ倍以上の差がある。
- ③韓国：7－8月の夏休み時期に3割にも上る圧倒的集中がみられるほか、1月に1割程度の山が確認できる。訪日のシーズン別では、5月が一番のピーク山で、次いで1－3月で7－9月がもっとも低いことから、北海道特有の宿泊延べ数動向である。
- ④香港：2003年と2011年を除けば7－8月と12月、2月の3つの山が確認できる。特に旧正月の2月が2割と最も高く、他の12月（13－15%）や7－8月（11－13%）の倍近くの状況である。
- ⑤タイ：7月と2月の両月が2割強と圧倒的に高い割合であるほか、5月、10月、12月に1割程度の宿泊延べ数が確認できる。9月と11月を除き、他の7か国と異なりある程度閑散期がないのが特徴である。
- ⑥マレーシア：12月に3割強を占めるほどこの時期に集中しているほか、2月も15%ほどのシェアが確認できることから、冬のシーズンで5割を占める。それ以外は7月の10－15%の山が確認

できる。

⑦シンガポール：マレーシアと非常に似た傾向にあり、2月が最も多く3割強。次いで2月が1割強と、冬のシーズンで5割程度のシェアにある。

⑧オーストラリア：1-2月に集中しており、その割合はこの2カ月に8割に上る。

図表5 各国のシーズン動向（上位8位）



※タイとマレーシアの統計資料は2010年度から開始のため、2010-2013年の4年間動向となっている。  
出典) 北海道経済部観光局 (2013) 「北海道観光入込客数調査報告書」平成15-25年度より筆者作成

### 3 各種資料からみた北海道国際観光の課題と先行研究

#### 3-1 北海道国際観光の課題・問題点

VJC以降、北海道の国際観光について色々な課題や問題点が指摘されてきた。そこでCiNiでの検索ツールを利用し、新聞以外の公的観光関連各種資料よりフォーラム、座談会、研究会、勉強会等にて発言された資料よりその時代に議論されていた課題を整理した。(詳細は別紙・資料1) 図表1は、抽出した課題内容を6つにカテゴライズし、4年ごと段階的にまとめたものである。

「市場」に関しては、2003年から現在まで一貫して市場ニーズ調査とそのデータ構築に関する課題が散見され、長年の間、業界で改善に至っていきな効果的なプロモーションに活かせていない様子が見えてくる。「受入れ対応」では、WiFi整備といったハード面と、リピーター確保へ向けたテーマ性を持った新たな観光コース開発とその情報発信といったソフト面の課題が見られる。「人材」では、ガイドの質が日本の魅力に繋がることから、語学だけでなく地元文化の熟知も必須条件としたうえで在日外国人の活用方法(留学生含む)や日本人のガイド育成、地域を商品化へつなぐランドオペレーター育成も喫緊の課題として取り上げられている。「ビジネス化」については、低廉料金による観光市場の破壊が当初注視すべき課題として取り上げられていたが、受入れキャパシティの問題から量より質=経済活性化を導くビジネスデザインの構築が大きな課題となっている。またそれに関連し、経済活性化を妨げる海外からの無資格営業の実態も課題として寄せられている。「交通」では、北海道らしくレンタカー(ドライブ観光)の課題があげられている他、地方へ繋ぐ交通網、海外とを結ぶ航空ネットワークと交通全般に関する課題であった。

図表6 北海道の国際観光に対する課題の分類

年	課題の分類					
	市場	受入れ対応	人材	ビジネス化	交通	その他
2003-2006	消費者ニーズのデータ構築	観光情報 HP言語対応 テーマ性を持った 観光地づくり	語学と地元文化を知る日本在住留学生の活用 ガイドの質 我が国の人材育成	料金にこだわらない(こだわれない)体制 低廉化による市場破壊	レンタカーと免許 チャーター便のありよう 都市から地方への交通 地方交通	人口減少の補助役 閑散期対応としての国際観光 人口減少の補助役 閑散期対応としての国際観光
2007-2010		ドライブ観光と地域情報発信				地方での緊急時対応
2011-2015	イメージ認知の確認 マーケット別のプロモーション 効果的なSNS配信 国ごとのニーズ調査	観光コース開発 WiFi整備	地域商品化へ繋ぐランドオペレーター育成	経済活性化を導くビジネスデザイン構築 民族旅行会社の無資格営業の取締 閑散期の魅力づくり(使い方) 量>質へ(受入れキャパ問題)	交通ネットワーク 航空ネットワーク	ビジネスマーケティング視点で考えない

### 3-2 北海道の国際観光に関する先行研究の実態

日本観光研究学会全国大会学術論文集<sup>ii</sup>、国際観光研究学会査読論文集<sup>iii</sup>、CiNiより北海道の国際観光に関する先行研究について検索した結果、10本の論文が見つかった。図表7は、その先行研究内容と3-1で示した分類である。(詳細は別紙・資料1)

北海道の訪日外国人入込数や宿泊延べ数は台湾のシェアが圧倒的に高いという特徴を踏まえ、台湾市場に関する研究が多く見られる。加えてその研究の多くは、台湾在住か北海道在住の留学生によるものであった。一方、ASEAN諸国からの観光客がみられた近年は、宗教による食の戒律問題があるマレーシアを中心に市場ニーズと受入れ対応に関する研究が散見される。この様に、北海道の国際観光に関する研究は、市場や受入れ対応に関するものが多く見られた。一方、3-1の分類「人材」「ビジネス化」「交通」に関する研究は先行研究があまりみられず、観光産業界や地域の課題に対応した研究の充実度は低い状況にあった。

図表7 先行研究一覧（北海道版）

研究年	先行研究内容	分類
2004	台湾の訪日観光客における日本と北海道の誘客要因に関する研究	市場
2006	ニセコを事例とした観光開発と景観変容に関する研究①	市場・その他
2008	外国人ドライブ観光の受入れ整備に関する研究	受入れ対応・交通
2008	ニセコを事例としたリゾート開発経緯と経済効果に関する研究	その他・ビジネス化
2010	台湾の訪日観光客における行動意図に関する研究	市場
2012	免税店の役割に関する研究	ビジネス
2012	ニセコを事例とした観光開発と景観変容に関する研究②	市場・その他
2013	マレーシアの訪日観光客を事例としたインバウンド振興策	市場・受入れ対応
2014	ムスリム対応に関する研究	市場・受入れ対応

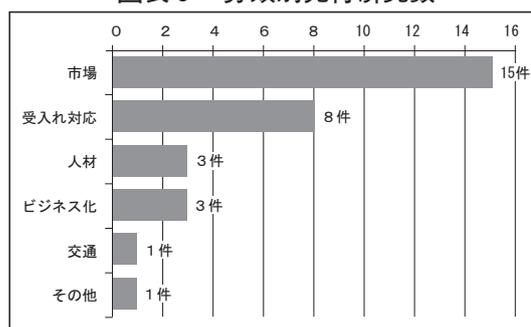
### 3-3 国際観光に関する先行研究の実態

別紙・資料1に示した国際観光に関する先行研究（北海道分は除く）を3-1で示した分類ごとにカウントしたのが図表8である。北海道での先行研究同様、市場ニーズに関する先行研究が最も多く、次いで受入れ対応に関する研究であった。

「市場」に関する研究内容は、訪日旅行への意思決定モデル、日本へのイメージ形成要因、障害要因分析と多岐にわたった切り口での研究が進んでいる。

国ごとの市場ニーズ調査は、台湾だけでなく他数か国が散見される。次に「人材育成」研究である。3件の先行研究内容全てが、ボランティアガイドや通訳案内士に関する研究であり、組織の実態や運営上の問題点に論点が集中している。こうしたことを鑑みると3-1の業界で求められている課題についての人材育成研究においては、進んでいないと判断できよう。「ビジネス化」に向けた研究は、受入れ対応に関連した内容の中でのビジネス化へのカウント数であり、経済活性化に向けた内容のものとは言い難い状況である。「交通」に関しては、国内間のネットワークに関して述べられたものはあるがインバウンド誘致のため研究は見られなかった。国際観光への期待が大きい一方で、市場、受入れ対応に関する研究以外においては、あまり進んでいないことが明らかとなった。

図表8 分類別先行研究数



#### 4. まとめ

本研究は、国際観光並びに北海道の国際観光を進めていくうえでの基礎研究として、観光業界や研究者からの課題を視点とした形で国際観光研究の実態をみてきた。その結果、「市場」や「受入れ対応」に関する研究は、一程度進んでいることが確認できた。特に「市場」に関する研究は、留学生を含む在日外国人らによっても広く進められている。一方、「人材育成」「ビジネス化」「交通」に関しては、課題として強く表現されているが研究が進んでいない状況にあった。そこで、今後の国際観光の研究の枠組みとして以下の3点が考えられよう。

① 2次交通と連動した航空ネットワーク

周りを海に囲まれる日本にとって航空ネットワークの構築は重要であり、かつ地方へのインバウンド促進には2次交通とも連動した地方型インバウンドへの対抗も重要と考える。

② 受入れ対応と連動した観光事業のビジネスデザイン

国際観光の入込は順調で、先行研究などから受入れ対応に関する研究は一程度進められているのに対し観光業界の経済情勢は横ばいのままであった。このことから、観光事業としてのビジネスデザイン構築が求められよう。

③ 日本人だけでなく留学生も含めた在日外国人を巻き込んだ人材育成

語学と異文化理解に加え、語学と地元文化の発信というキーワードが人材育成の質に必要なことが本研究から明らかとなった。一方、訪日外国人は増加傾向で時間も限られることから、外国人も巻き込んだ人材育成研究も考えられよう。

なお、本研究の先行研究に至っては少々狭い範囲での先行研究となったことを反省している。今後は先行研究の幅を広げ、上述の①～③の中身を最確認したうえで研究を進めて参りたい。

---

#### 【補注】

- i 北海道財務局 (2015)「最近の北海道の経済動向等について」p.6より
- ii 1986年、観光研究の発展に貢献することを目的として、設立された学術団体。現在800名ほどの会員を有し、観光研究・教育ならびに実践的研究の第一線で活躍している専門家を網羅した文字通りわが国の観光研究者による組織。
- iii 1993年、「産・官・学」の協力のもと観光産業の研究と産業発展に寄与することを目的に設立。現在400名程の会員を有している。

## 【参考文献】

- 石井 (2006) : 「国内宿泊業におけるインバウンド観光の現状と課題」 運輸と経済 第66巻 第6号 pp.37-40
- 石崎 (2011) : 「訪日インド人旅行者の観光動向とプロモーション活動」 日本観光研究学会第26回全国大会論文集 pp.169-172
- 石崎・米田 (2014) : 「訪日インドネシア人旅行者の受入れに関する現状と課題」 第29回日本観光研究学会全国学術論文集 pp.261-264
- 市岡・河本・成澤 (2009) : 「ニセコ地域へのインバウンド動向と展望についての考察」 北海道都市地域学会研究論文集 第46号 pp.19-25
- 運輸調査局 (2006) : 「国際観光への期待と現状－北海道における国際観光（インバウンド）の展開－」 第66巻 第6号 pp.4-16
- 大淵三洋 (2009) : 「わが国の国際観光のインバウンド側面に関する若干の考察」 日本国際観光研究学会論文集第16号 pp.5-10
- 葛西・黄・中鉢 (2004) : 「北海道におけるインバウンド観光に関する研究－台湾における観光意向調査を中心として－」 北海道都市地域学会研究論文集vol.41 pp.31-36
- 葛西 (2008) : 「観光目的地選択における意思決定モデル－台湾人と日本観光」 日本観光研究学会第23回全国大会論文集 pp.101-104
- 葛西・許 (2009) : 「国際観光地としての日本のイメージ形成に関する研究－台湾人と日本観光－」 日本観光研究学会第24回全国大会論文集 pp.105-108
- 河本 (2014) : 「我が国における免税店の現状と課題－消費税増税と制度変更の影響を中心として－」 第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集 pp.49-52
- 岐部武・原祥隆 (2006) : 『やさしい国際観光』（財）国際観光サービスセンター p.81
- 呉羽 (2012) : 「北海道ニセコひらふ地域における景観変化－インバウンド観光の発展に伴うスキーリゾート変容の事例－」 第27回日本観光研究学会全国大会学術論文集 pp.77-80
- 黄 (2009) : 「優良観光イベントによる外国人観光客の誘致促進に関する研究－さっぽろ雪まつりにおける台湾人観光客の満足度に関する調査を中心に－」 北海道地域文化学会、pp.1-6
- 国際観光サービスセンター (2005) : 「北海道へのインバウンドツーリズムの可能性と課題」 国際観光情報 5月号 pp.40-51
- 国土交通省観光庁観光産業課 (2014) : 「観光産業の現状と課題」 pp.6.8.10.18-19.  
<http://www.jinryu.jp/201412271849.html> (2015.3.1最終閲覧)
- 小松・中山 (2006) : 「外国人旅行者受入政策における観光ボランティアガイド組織の役割と課題－全国善意通訳組織を対象として－」 日本国際観光研究学会論文集第13号 pp.17-23
- 小松・中山 (2007) : 「インバウンド旅行サービスにおける通訳案内業の実態と育成方法のあり方」 日本国際観光研究学会論文集第14号 pp.20-26
- 小松・中山 (2008) : 「外国人旅行者への通訳ボランティア活動の特性と活動者の意識の実態」 日本国際観光学会論文集第15号 pp.4-10
- 杉山 (2012) : 「ハラル・フード・ビジネスの制度設計とASEAN諸国からのインバウンドに関する考察」 第28回日本観光研究学会全国大会学術論文集 pp.25-28
- 鈴木・金・折戸・渡辺 (2012) : 「旅行障壁への混合研究法アプローチ－韓国人若年層の訪日旅行の事例から－」 第27回日本観光研究学会学術論文集 pp.81-84
- 清水・祖田 (2005) : 「北海道におけるアジアからのインバウンド・ツーリズム」 北海道地理No.80.pp.25-39
- 澁谷 (2013) : 「外国人向け宿泊施設の情報交換ノートに見る訪日個人客の観光行動と観光地の評価」 第28回日本観光研究学会学術論文集 pp.341-344
- 高井典子・赤堀浩一郎 (2014) : 『訪日観光の教科書』 創成社 p.26
- 千葉・和田 (2013) : 「北海道における国際観光振興についての一考察－マレーシア観光市場の将来性を中心として－」 札幌国際大学紀要第44号、pp.143-159
- 千葉・和田 (2014) : 「東南アジアからの観光客増大に向けたムスリム受入れ体制の現状と課題－北海道の観光関連企業対応策を事例として－」 第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集 pp.117-120
- 日本政府観光局海外プロモーション (2010) : 「2010年の訪日旅行は増加見込み、北海道人気が続く 上海及び近隣の旅行会社にアンケートを実施」 国際観光情報6月号 pp.43-52
- 日本観光研究学会 (2005) : 「観光研究」 「シンポジウム 北海道で我が国のインバウンドを展望する」 vol.16、pp.49-77
- 日本政府観光局海外プロモーション部 (2010) : 「2010年の訪日旅行は増加見込み、北海道人気が続く 上海及び近隣の旅行会社にアンケートを実施」 国際観光情報、pp.43-51

- 林 (2012) : 「ムスリム関羽客誘致についての一考察－マレーシアからのムスリム観光客誘致のための調査－」  
第28回日本関羽研究学会全国大会学術論文集 pp.29-32
- 平沢信 (2013) : 「インバウンド旅客に対する当社の取組～北海道を取り巻くインバウンド観光の現状をふまえて～」  
NETT82号、pp.16-18
- 平沢信 (2014) : 「訪日外国人旅行者に対するJR北海道の取り組み」JRgazette 2月号 pp.3-6
- 藤尾 (2007) : 「インバウンド・ツーリズム振興の基本的要件」日本観光研究学会第22回全国大会論文集  
pp.245-248
- 北海道 (2013) : 「北海道外国人観光客来訪促進計画 (平成25－29年度)」 pp.1-35  
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/250-gaikyaku/gaikyaku.htm> (2015.3.1最終閲覧)
- 北海道インバウンド研究会 (2015) : 「webサイト北海道インバウンド・インフォ公開～北海道インバウンド情報の共有化を目指して～」開発こうほう 1月号 pp.50-53
- (財)北海道開発協会 (2009) : 「外国人を対象とした北海道におけるドライブ観光を考える」開発こうほう 6月号、pp.16-21
- (財)北海道開発協会 (2014) : 「インバウンド観光の動向と課題」開発こうほう 2月号 pp.43-47
- 北海道経済部観光局 (2013) : 「インバウンド研究会北海道セミナー 北海道ならではのインバウンド振興を」開発こうほう10月号 pp1-7
- 北海道経済部観光局 (2014) : 「北海道観光入込客数調査報告書」(平成25年度) pp.29-47  
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/irikomi.htm> (2015.3.1最終閲覧)
- 北海道における外国人ドライブ観光推進協議会 (2008) : 「北海道における外国人ドライブ観光の推進」自治体国際化フォーラム 9月号、pp.2-5
- 宮本・植田・伊藤・松原 (2011) : 「外国人を対象としたジオツアーにおけるモニターの行動分析」日本観光研究学会第26回全国大会論文集 pp.153-156
- 村上・井上・安江 (2014) : 「訪日外国人観光の受入れと感性の考察－ジャパニゼーションの国内観光地への影響について考察する－」第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集 pp.257-260
- 吉田雅彦 (2014) : 「観光立国の実現に向けて」日本国際観光研究学会第18回全国大会基調講演資料、pp.1-4
- 安江・村上 (2012) : 「日本化 (Japanization) の中の訪日観光客－多様性の中の創造性を発見する旅行者の視点－」第27回日本観光研究学会学術論文集 pp.1-4
- 安田 (2014) : 「日本のハラル・ツーリズム・ネットワークをめぐる一試論－供給サイドの社会関係資本をめぐって－」第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集 pp.397-400
- 劉・古屋 (2014) : 「中国人旅行者の訪日行動ならびに再訪意向に関する基礎研究」第29回日本観光研究学会全国大会学術論文集 pp.249-252
- Eric Hawkinson (2013) : 「Social for International Inbound Tourism in Japan: A Research Model for eWOM Mediums」日本観光研究学会論文集第20号 pp.41-48
- Betty Chan (2010) : 「北海道への台湾訪問客の行動意図に関する研究」国際観光情報、pp.28-42

〈別紙〉

資料1:VJC以降の国際観光対策・課題・調査研究

年	国際観光促進の政策・取組等 (※下線部は北海道独自の政策・取組)	各種資料での北海道国際観光に関する課題等 (新聞記事は除外)	国際観光に関する調査研究内容 (※下線部は北海道をフィールドとした国際観光研究)
2003	<ul style="list-style-type: none"> <li>小泉総理施政方針演説</li> <li>「VJC」開始(韓国・台湾・中国・米国・香港が5大重点市場)</li> <li>「観光立国行動計画」策定</li> <li>JR北海道の乗車券環境整備<sup>1)</sup></li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>通訳ガイドと観光政策</li> <li>→民族系旅行会社(第3種)参入と無免許ガイド増加による質の低いガイドが散見される中、法整備の必要性を指摘。</li> </ul>
2004			<ul style="list-style-type: none"> <li>台湾人にとつての日本と北海道の誘客要因に関する研究</li> <li>→訪日未経験者への誘客促進要因項目は、「アクティビティ」「四季の変化」「言語コミュニケーション」。</li> <li>→日本の他の地域と比較し「自然」を中心とした活動(四季・温泉・食・農園・牧場)の認識が高く、冬・夏の観光誘致にむけた可能性が高い。</li> </ul>
2005	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国団体観光ビザ全土解禁(3市5省から中国全土へ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本観光研究会シンポジウムにて<sup>ii)</sup></li> <li>→消費者ニーズなど基本データの収集と分析</li> <li>→低廉化による市場破壊</li> <li>→日本人口減少の補助と考えない</li> <li>→FIT化に向けたレンタカー免許と観光情報のあり方</li> <li>北海道経済連連合会会員向け講演にて<sup>iii)</sup></li> <li>→受け地サブライヤー側の都合のいい条件(時期・料金)での外国人受入れ体制</li> <li>→語学や地元文化理解に精通する日本在住外国人の人材有効活用</li> </ul>	
2006	<ul style="list-style-type: none"> <li>「観光立国推進基本計画」成立</li> <li>「通訳案内業法」一部改正→「通訳案内士法」として施行</li> <li>「地域限定通訳案内士」制度創設</li> <li>「北海道地域限定通訳案内士」の創設<sup>iv)</sup></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国内宿泊業におけるインバウンド観光の課題</li> <li>→料金に関わらず受け入りたい宿泊業者が半数弱。</li> <li>→中小の宿泊施設ほどHPの言語対応が遅れている</li> <li>→個人旅行者向けテーマ性のある観光地づくり</li> <li>→ガイドや通訳の質確保とそれに向けた人材教育</li> <li>→入国審査のスムーズ化</li> <li>運輸調査局における北海道における国際観光の展開に関する座談会<sup>v)</sup></li> <li>→チャーター便のありよう</li> <li>→宿泊施設の価格の確保</li> <li>→FITの地方への交通問題</li> <li>→FITの大型荷物移動への対応(JR車内、駅)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>観光ボランティアガイド組織の役割と地域との関係に関する研究</li> <li>→通常の外国人旅行者の通訳ガイド以外に国際会議、地域の国際交流事業への参加が半分以上を占め、極めて多面的役割を担っている。</li> <li>ニセコ地域のオーストラリア人受入れの現状に関する研究 I</li> <li>→オーストラリア人の嗜好にあった宿泊施設=コンドミニアム建設が外資会社主導で急増したことによる景観破壊を指摘。</li> </ul>

年	国際観光促進の政策・取組等 (※下線部は北海道独自の政策・取組)	各種資料での北海道国際観光に関する課題等 (新聞記事は除外)	国際観光に関する調査研究内容 (※下線部は北海道をフィールドとした国際観光研究)
2007	<ul style="list-style-type: none"> <li>「観光立国推進基本法」施工</li> <li>「観光立国推進基本計画」策定</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>インバウンドプロモーション施策の在り方に関する研究</li> <li>→南北に長い日本はSCCP要素(安全性、快適性、利便性、楽しさ・有益性)が異なるため、受入れ促進地域ごとマーケティングの正確な把握と適切なプロモーションが求められる。</li> <li>・通訳案内士の実態と専門職に向けた研究</li> <li>→旅行者への依存体質が強く、雇用の機会が限定される。高齢化が深刻。</li> <li>→これまでの出来や人間関係からうまれる評価が採用され(2-3.5万/日)、ガイドの固定化がすすむ。</li> <li>→旅行会社によるガイド研修は無関与。</li> <li>→季節性が強く副業化となっているため、フリーガイド、無資格ガイドが混在。</li> <li>→個人に任せざる技術向上をガイド組織として実施し、会員同士の学びあいの仕組みづくりをする。</li> </ul>
2008	<ul style="list-style-type: none"> <li>観光庁発足</li> <li>「北海道スキープロモーション協議会」設立<sup>vi)</sup></li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・台湾人の観光目的地における意思決定モデルに関する研究</li> <li>→計画行動理論「TPBモデル」の有効性が確認。</li> <li>・通訳ガイドと異なる通訳ボランティア活動の特性と意識に関する研究</li> <li>→活動実態から公共性と専門性が強い。</li> <li>→語学向上を目的とし参加に至るが、現場を踏むと旅行者の満足度向上が強くなり観光知識や観光資源への勉強が強くなる。</li> <li>・外国人ドライヴ観光推進協議会が実践した外国人ドライヴ観光環境整備の実証実験に関する研究(位置情報コード入りドライヴマップとカーナビの連動、GPS携帯による位置情報サービス地域情報提供)報告。</li> <li>→継続のためのランニングコスト問題とドライヴ観光旅行者ニーズの高い地域独自の地域アクティビティ情報の発信の仕方が今後の課題と指摘。</li> <li>・国際リゾート地としてニセコ地域を研究Ⅱ</li> <li>→2006年の調査に引き続き、その後も活発にすすむ受入れ体制である一方、地域が期待する経済・社会効果が地域に還元されていない課題を指摘。</li> </ul>
2009	<ul style="list-style-type: none"> <li>中国個人観光ビザ発給開始(北京・上海・広州限定)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北海道開発局主催2009年国際観光フォーラム<sup>vii)</sup></li> <li>→自由度が高いドライヴ観光だからこそプラサαの情報発信・提供の必要性</li> <li>→観光資源にストーリー性の情報を持たせる</li> <li>→地方での緊急時対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本のイメージ形成に影響を与える諸要因に関する研究</li> <li>→大衆文化情報=日本のポップカルチャー(日本のテレビ番組、流行ファッション)が観光地や日本のイメージ形成に影響を持っている。=日本のポップカルチャーの海外情報発信が国際観光に有効であることが確認。</li> <li>・観光イベント誘客促進にむけた研究</li> <li>→会場での言語問題、イベントに期待する要素の盛り込み、インバウンド観光客に合わせたイベント開催時期の変更と促進(旧正月)</li> <li>・ニセコ地域のインバウンド動向と今後の展望に向けた研究Ⅲ</li> <li>→2005-2008年のニセコ地域(倶知安町とニセコ町)のインバウンド動向と受入れ体制のあり方をまとめ、今後の調査としてインバウンドマーケティング・旅行動機・旅行商品流通経路を調査した有効的なマーケティング戦略の構築が必要と指摘。</li> </ul>

年	国際観光促進の政策・取組等 (※下線部は北海道独自の政策・取組)	各種資料での北海道国際観光に関する課題等 (新聞記事は除外)	国際観光に関する調査研究内容 (※下線部は北海道をフィールドとした国際観光研究)
2010	<ul style="list-style-type: none"> <li>• VJC重点市場追加 (5大重点市場+インド、マレーシア、ロシア)</li> <li>• 中国個人観光ビザ要件緩和→中国全土に解禁</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 中国(上海とその近郊)の旅行会社に向けたアンケート結果からの考察</li> <li>→北海道舞台の映画「狙った恋の落とし方」が大ヒットし、口コミにより北海道の知名度、ディステーションとしての人気が強い。</li> <li>→地域ごとで訪日旅行テーマが違ふ</li> <li>→買い物、桜、紅葉、温泉、スキー(雪遊び)、漫画、産業観光が人気テーマ</li> <li>• 北海道を訪れる台湾訪問客の行動意図に関する研究</li> <li>→旅行マーケット環境の変化を確認。</li> <li>→「美しい自然景観」「特色ある温泉」「豊富なグルメ」がキーワードとして有効。</li> <li>=グルメと温泉をもっとアピールしたプロモーションへ。</li> <li>→観光情報は新規ソーシャルネットワークFacebookを利用した具体的な情報が必要。</li> </ul>
2011	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 中国へ沖縄マルチビザ発給開始→中国観光ビザ要件緩和</li> <li>• VJC重点市場追加 (8重点市場+タイ・シンガポール・カナダ・英語・フランス・ドイツ・オーストラリア)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• インバウンド用ジョアアの効果的ツアー作成のための研究</li> <li>→顧客の感動、体験、観光地での知的交流の3視点を結合した旅行商品。</li> <li>• 訪日インド旅行者の観光動向とプロモーションに関する研究</li> <li>→観光動向より訪日促進キーワードと阻害要因を確認。</li> </ul>
2012	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「新観光立国推進基本計画」策定</li> <li>• タイへ入国ビザマルチ化</li> <li>• 新千歳-バンコク定期便就航</li> <li>• 新千歳-ハワイ定期便就航</li> <li>• LCCの新規就航</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 訪日外国人の日本化(サブカルチャー)点に関する研究</li> <li>→YouTubeの日本の観光地に関するup内容から、ガイドブックの紹介地と同様に生活場面の投稿が多かったことから、外国人の目線で作られる観光魅力があることを確認。</li> <li>• 韓国の若者層における受入れ環境時の旅行障壁に関する研究</li> <li>→対応できなかった項目でも克服して満足に転じる受入れ整備項目があるなど障害項目には多義的な性格が含まれる。</li> <li>• 訪日外国人観光客の実態把握における観光統計研究</li> <li>→限定的な分析にならないよう統計調査項目の精度の必要性を確認。</li> <li>• ムスリム観光客誘致のための研究</li> <li>→観光産業界全体の知識修得と対応に加え、行政の協力を得た認証の信頼を指摘。</li> <li>• ASEAN諸国のインバウンド確保に向けたハラールフードビジネス研究</li> <li>→マレーシアハラール認証制度からジャパンブランドのハラール商品化に向けた行政の関与を指摘。</li> <li>• 国際観光における免税店の役割に関する研究</li> <li>→海外では空港経営、免税消費の消費者行動の2視点からの研究が進んでいるが日本では未開拓。</li> <li>→北海道の免税店は他の免税店と比較し旅行者利用額が低い。</li> <li>• インバウンド観光開発発展における景観変容の研究</li> <li>→ニセコをフィールドにオーストラリア人観光客の動向とそれに対応した地元宿泊施設の変遷を整理。</li> </ul>

年	国際観光促進の政策・取組等 (※下線部は北海道独自の政策・取組)	各種資料での北海道国際観光に関する課題等 (新聞記事は除外)	国際観光に関する調査研究内容 (※下線部は北海道をフィールドとした国際観光研究)
2013	<p>国際観光立国実現に向けたアクション・プログラム」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「日本再興戦略-JAPAN is BACK」閣議決定</li> <li>中国へ東北3県マルチビザ発給開始</li> <li>「東南アジア・訪日100万人プラン」開始</li> <li>タイへビザ免除</li> <li>マレーシアへビザ免除</li> <li>インドネシアへ数次ビザの滞在期間延長</li> <li>「北海道外国人観光客来訪促進計画(2013-2017)」</li> <li>JR北海道受入体制整備拡充<sup>※</sup></li> </ul>	<p>インバウンド研究会<sup>※</sup>セミナーにてインバウンドはビジネスマーケティングで考える必要がある</p> <p>→経済活性化を導き出すためのデザイン構築</p> <p>→海外からどう見られたいか＝イメージと認知のチェック</p> <p>→地域の魅力を商品化できるランドオペレーターによる地域質保証</p> <p>→民族系旅行会社の無資格営業・幹旋(ガイド含む)</p> <p>→マーケティング別の海外プロモーションと情報発信のあり方</p> <p>→交通ネットワークの整備と充実(特に空路の供給量)</p> <p>→閑散期の魅力づくり</p> <p>→受入れキャパシティを考えた上での誘致・受入れ整量から質へ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ネット上の「クチコミ」情報を国際マーケティングへと繋げる手法の研究</li> <li>→外国人が使用するネット上のクチコミ情報と日本の旅行会社が自社のサービス発信するソーシャルメディアとの間でミスマッチカガが確認でき、最も効果的なネットメディアeWOMが確認できた</li> <li>・訪日個人客の観光行動と観光地の評価に関する研究</li> <li>→宿泊施設に備えられた情報交換ノートからの観光行動と評価を研究資料として使えることから旅行プログラムからの分析が可能</li> <li>・北海道の国際観光振興策にむけた考察</li> <li>→LCCの誘致と航空ネットワークの構築</li> <li>→戦略的なプロモーションによる誘致活動</li> <li>→継続的市場調査とライブバル観光地を意識したツアーの造成</li> </ul>
2014	<ul style="list-style-type: none"> <li>「観光立国実現に向けたアクション・プログラム2014」決定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インバウンド観光の動向と課題に関する発表会<sup>*</sup></li> <li>→台湾、香港、中国、韓国ともにリピーターかつFITが増加しており、これらに対応した観光コース開発が重要。</li> <li>→相手国マーケティングが利用しているSNSでの観光情報発信。</li> <li>→観光をしながら観光情報を得られるwi-fi環境</li> <li>→面倒な手続きの無い使われるwi-fi環境整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホストとゲストの間で生じる異文化理解</li> <li>→異文化感受性とサービスの関係性を調査し、従業員の配置を考察</li> <li>・観光意欲に影響を与える要因の研究</li> <li>→人との交流・出会い、日本独自の文化や食に関する要因がリピーター促進に重要</li> <li>・我が国における免税店の研究</li> <li>→他国の免税店と統計資料より、我が国では統計資料が存在しなく免税店を国際観光の視点で重視されていない</li> <li>・ムスリム誘致の為のハラールビジネス展開に関する研究</li> <li>→国内におけるハラール認証制度の乱立と地方活性化の手法としての地域をあげた6次産業フーズシステムの提案</li> <li>・インドネシア・マレーシア・シンガポールの訪日ムスリムの食対応に関する研究</li> <li>・我が国におけるハラールツーリズムネットワーク展開に至る研究</li> <li>・中国人の訪日満足度から見たリピーター意向に関する研究</li> <li>・訪日インドネシア観光客の受け入れに関する研究</li> <li>・訪日外国人と日本人の感性の違いとその感性の変化・変容(ジャパニゼーション)に関する研究</li> <li>・北海道におけるムスリム対応に関する研究</li> </ul>
2015	<ul style="list-style-type: none"> <li>北海道インバウンド情報共有BtoBサイト「北海道インバウンド・インフォ」構築</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インバウンド国籍多様化による国籍ごとのニーズ調査とその情報提供の仕方</li> </ul>	

- 
- i 具体的には、「北海道レールパス」「札幌・小樽レールパス」「札幌・小樽レールパス」「留学生・ワーキングホリデーパス」である。
  - ii 2004年12月4日、日本観光研究学会全国大会にて開催されたシンポジウム。
  - iii 2005年3月8日、北海道経済連合会向け講演にて講義された記録。
  - iv 2011年で休止。
  - v 運輸調査会開催の座談会記録。
  - vi 北海道運輸局主導による官民一体組織。海外へのスキーマ認識向上をはかるため海外スキー旅行博の出版、海外メディアや海外旅会社招聘など外客誘致事業を展開。
  - vii 2009年3月3日、北海道開発局主催で外国人ドライバー観光客誘致促進に向けた受け入れ態勢づくりを目的としたフォーラム。
  - viii 具体的には、駅Wi-Fi環境整備、インターネット予約多言語化、外国語対応のための人材教育、案内サインの充実など。
  - ix 2013年7月23日、(株)ぐるなび総研主催で実施されたインバウンド政策セミナー。2012年4月、(株)ぐるなび総研内に観光政策研究プロジェクトが発足。観光庁、JNTO、北海道、観光関連企業、シンクタンクカカが参画している。
  - x 2013年11月12日、「インバウンド観光の動向と課題」をテーマに大学関係者、公務員、観光業らによる発表会が開催。

# 知床・産業系列設置の経緯

橋口 友和\*

## I はじめに

### 1 学校・学科の特色（平成27年2月9日現在）

課程・学科	生徒数	1年次	2年次	3年次	計
全日制 総合学科		69名	69名	84名	222名

教職員数 （28名）うち、商業担当者（6名 ※実習助手2名含む）

進路比率 就職（2）：進学（8） ※今年度実績

### 2 本校概要

昭和16年に設立され、歴史のある普通科・商業科の併置校であったが、平成16年度より学科転換を行い、3学級4系列（人文・自然科学・情報ビジネス・生活福祉）の総合学科として新たなスタートを切り、今春12期生が入学予定である。しかし、地域事情や社会的な影響により入学者数が年々減少傾向をたどり、平成25年度より2学級となり、平成27年度入学生より2学級完成となる。

今後、教員の定数減が避けられないなか、少ないスタッフでより効果の上がる教育課程を模索した結果、「生活福祉系列」の廃止と新系列である「知床・産業系列」の立ち上げを決断した。新系列では、「地域社会の活性化に貢献できる能力と態度を身につけ、地域社会での体験的な学習を通して、思いやりの気持ちを育み、コミュニケーション能力やホスピタリティを高めるとともに、社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育成する。」ことをねらいとし、教科横断的に学ぶことのできる教育課程にするべく、教員間の温度差をなくすために全教職員で課題の共有化を図り、各教科でも議論を深めながら現在に至っている。小規模総合学科ではあるが、本校商業科は「情報ビジネス系列」「知床・産業系列」の2系列を核として動き出している。

## II 設置に関わる経緯

### 1 校長より諮問

斜里高校の魅力づくりに向けた提言が以下の内容で出される。

- (1) 町外へ高校進学している流出者を防ぎ、斜里近郊の小中学校で育まれた子どもたちが引き続き本校へ進学希望を持てる魅力ある高校づくりについて検討すること。
- (2) 学力の向上と進路実績の向上について検討すること。
- (3) 網走からも生徒が集まり、地域の強みと時代の要請に応える系列の再構築を検討すること。
- (4) 保護者や町民からの信頼を獲得できる魅力ある教育活動を検討すること。

以上のことを踏まえ、魅力ある斜里高校の具体的な検討に入った。

\* 北海道斜里高等学校 教諭

## 2 入学者の推移

少子化の影響から、平成3年4月に学級減となり、1学年4学級（普通科3・商業科1）となった。少子化の影響は止まらず、平成16年4月に総合学科へ学科転換し、4系列3学級、さらに平成21年度から中卒者が急減し、間口減の危機が迫ったが、かろうじて3学級を維持した。しかし、平成25年度に入学者数が73名となり、1年次の学級数が2となった。

	斜里町 中学生数	本校 入学者数	斜里町出身者数 (内数)	斜里中・ウトロ中 占有率
H14年度	162	119	(108)	66.7%
H15年度	163	141	(118)	72.4%
H16年度	138	112	(96)	69.6%
H17年度	145	113	(102)	70.3%
H18年度	146	108	(94)	64.4%
H19年度	130	92	(83)	63.8%
H20年度	142	103	(89)	62.7%
H21年度	102	84	(73)	71.6%
H22年度	116	81	(78)	67.2%
H23年度	104	88	(66)	63.5%
H24年度	115	86	(74)	64.3%
H25年度	112	73	(64)	57.1%
H26年度	107	69	(61)	57.0%
H27年度	103		62	60.0%
H28年度	105		63	60.0%
H29年度	83		50	60.0%
H30年度	94		56	60.0%
H31年度	86		52	60.0%
H32年度	104		62	60.0%
H33年度	90		54	60.0%

## 3 入学者減の状況と理由の分析

総合学科転換後の入学者募集状況は、斜里町内中卒者の70%程度が本校に進学していたが、ここ数年は60%を伺う状況となっていた。平成25年度にはついに60%を切り、今後何の対応策も取らない状況が続くと、町内中卒者の本校進学率はさらに下がることも考えられる。また、60%を維持できたとしても、平成29年度には本校進学者が50名となり1間口を伺う状況が予想される。

## 4 生活福祉系列の廃止

福祉に関わる講師の確保がきわめて困難であることと、ホームヘルパー2級が平成25年度より介護職員初任者研修に制度変更となり、30時間の施設実習（これまでは町内での委託実習）が学校における実技時間となり、さらなる講師の確保が一層困難となる。よって、介護職員の資格取得が困難となった以上、家庭科に関する科目を含めても、「生活福祉系列」は本校の一つの系列として特色がきわめて薄いと言わざるを得ない状況となった。よって、生活福祉系列を廃止し、福祉に関わる専門科目は設置しないことが決まった。

## 5 観光・環境に関する系列の具体的な検討

生活福祉系列の廃止にともない、新たな特色となる系列の具体的な検討に入る。観光振興は北海道の重要な施策であるとともに、産・官・民ともに様々な取組が進められている。道内で教育課程上に位置づけて観光教育を行っている高等学校はほとんどなく、宣伝効果が高いことから観光に関する系列を設けることになった。

また、世界自然遺産である「知床」を有する本町にあって、観光関連産業は農業、漁業と肩を並べる重要な産業であり、自然保護を軸に置きつつも観光との両立方法を模索している町の現状において、生徒の学習活動が斜里町に寄与する可能性が高く、学校が地域に貢献できる大きな要素になる。そして、自然環境、食、文化、ホスピタリティ、コミュニケーション能力など、観光教育が生徒を育む幅は広く、どのような進路に向かうにしても、これから生きる生徒に必要な能力を獲得させることが期待できる。

## Ⅲ 知床・産業系列の設置

### 1 新系列のねらい

これまでの経緯を踏まえ、観光を中心に環境に配慮した系列名を選定し、いくつかの候補の中から「知床・産業系列」に名称が決定した。

系列のねらいは、「地域の歴史や文化、特色について学び、環境や観光、福祉など、地域社会の活性化に貢献できる能力と態度を身につける。地域社会での体験的な学習を通して、思いやりの気持ちを育み、コミュニケーション能力やホスピタリティを高めるとともに、社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育成する。」とした。

### 2 系列目標（観光科目に関して）

- (1) 観光に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、接遇マナーの体得とサービスの意義を理解させる。
- (2) 国際化に対応し、社会で必要なコミュニケーション能力の育成と語学力の習得に努める。
- (3) 「世界自然遺産 知床」を基礎基本におき自然環境保全、観光振興・地域振興に興味を持たせ、地域固有の魅力を観光客に伝え、その価値や大切さを理解出来る人材の育成を目指す。

### 3 科目群（平成27年度開設）

#### (1) 観光一般

##### ① 科目のねらい・目標

ア 観光を学ぶ上で必要な基本的な知識と技術を習得させ、接遇マナーとサービスの意義を理解させる。

イ 観光に関する技術を実際に活用できる能力と態度を育てる。

##### ② 指導年次

ア 2年次（総合選択B）

##### ③ 科目時数

ア 4単位（140時間）

##### ④ 評価基準

関心・意欲・態度	観光ビジネスの諸活動に関する諸課題について興味・関心をもち、その改善・向上を目指して主体的に取り組もうとするとともに、実践的な態度を身につけている。
思考・判断・表現	観光ビジネスの諸活動に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識・技術を基に、観光ビジネスに携わる者として適切に判断し、表現する創造的な能力を身につけている。
技能	観光に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、観光ビジネスに関する諸活動を合理的に計画し、その技術を適切に活用している。
知識・理解	観光に関する基礎的・基本的な知識を身につけ、サービススタッフの意義や役割を理解している。

## ⑤ 年間計画

### ア サービス接客実務検定 3級・2級

- a サービススタッフの資質
- b 専門知識
- c 一般知識
- d 対人技能
- e 実務技能

### イ 観光学基礎

- a 観光を学ぶ意味
- b 観光の様々な効果
- c 観光に係わる言葉
- d 観光資源と観光対象
- e 観光政策と観光行政

## ⑥ 使用教科書・教材

- ア サービス接客検定受験ガイド3級・2級（実務技能検定協会）
- イ サービス接客検定実問題集3級・2級（実務技能検定協会）
- ウ 観光学基礎（JTB総合研究所）

## (2) 観光情報

### ① 科目のねらい・目標

- ア 観光に関する情報収集を行い、活動を円滑にし、満足度を高めるなど、観光活動の活性化・質の向上について理解ができる。
- イ 観光行動と情報の関わりを踏まえ、基本的・実践的なITスキルを身につけ、情報発信や提供に有効な手段を学び活用する能力と態度を育てる。

### ② 指導年次

- ア 2年次（自由選択）

### ③ 科目時数

- ア 2単位（70時間）

### ④ 評価基準

関心・意欲・態度	観光ビジネスの諸活動に関する諸課題について興味・関心をもち、その改善・向上を目指して主体的に取り組もうとするとともに、実践的な態度を身につけている。
思考・判断・表現	観光ビジネスの諸活動に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識・技術を基に、観光ビジネスに携わる者として適切に判断し、表現する創造的な能力を身につけている。
技能	観光に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、観光ビジネスに関する諸活動を合理的に計画し、その技術を適切に活用している。
知識・理解	観光に関する基礎的・基本的な知識を身につけ、サービススタッフの意義や役割を理解している。

### ⑤ 年間計画

- ア 観光行動と情報
- イ 観光情報の媒体（ツール）
- ウ 効果的な観光情報の発信・提供手法
- エ 情報検索方法
- オ インターネット情報の活用

### ⑥ 使用教科書・教材

- ア 観光学基礎（J T B総合研究所）
- イ 旅行業プロのためのインターネット活用術（J T B総合研究所）
- ウ ポイント整理 情報モラル（数研出版）
- エ 自作プリントなど

## (3) 観光ビジネス基礎

### ① 科目のねらい・目標

- ア 観光教育の中核として、プロジェクト学習を通して主体的に活動する態度や能力を育てる。
  - a 自立心の養成……………人格的に独立できる人間形成の場とする。
    - ・プロジェクト学習により経営者的見地の育成
  - b 人格形成の促進……………地域との連携を密にし、豊かな人間性を養う。
    - ・地域改善施策の促進
    - ・地域問題の解決による連携強化
  - c 問題解決能力の育成………自発的に問題を発見し、科学的に解決する能力を見出せる態度の育成。
    - ・計画的調査、演習と解析
    - ・自ら考え行動し、適応していく力、コミュニケーション能力
    - ・知識、技術および技能の定着、実践力の深化
- イ 実践力、コミュニケーション能力、社会への適応能力等の育成を図るとともに、地域産業や地域社会への理解と貢献
  - a 将来の地域産業を担う人材の育成
  - b 地域産業や地域社会との連携・交流を通じた実践的教育……………外部人材を活用した授業等を充実

### ② 指導年次

- ア 2年次（総合選択C a）

③ 科目時数

ア 2単位(70時間)

④ 評価基準

関心・意欲・態度	観光ビジネスの諸活動に関する諸課題について興味・関心をもち、その改善・向上を目指して主体的に取り組もうとするとともに、実践的な態度を身につけている。
思考・判断・表現	観光ビジネスの諸活動に関する諸課題の解決を目指して思考を深め、基礎的・基本的な知識・技術を基に、観光ビジネスに携わる者として適切に判断し、表現する創造的な能力を身につけている。
技能	観光に関する基礎的・基本的な技術を身に付け、観光ビジネスに関する諸活動を合理的に計画し、その技術を適切に活用している。
知識・理解	観光に関する基礎的・基本的な知識を身につけ、サービススタッフの意義や役割を理解している。

⑤ 年間計画

ア 課題設定

イ 計画立案

ウ 調査研究

エ 考察

オ 実践

カ 成果発表

キ 評価反省

ク おもてなし実践

ケ 宿泊と交通ビジネス

⑥ 使用教科書・教材

特になし

4 開設予定科目(平成28年度以降)

(1) 観光ビジネス応用

(2) 観光英語

上記、2科目については平成28年度以降の科目となる。観光ビジネス応用については、観光ビジネス基礎の発展科目。観光英語は、札幌国際大学との連携事業を引き継ぎ、開設する予定である。

IV 観光教育の充実に関する高大・地域連携協定

平成26年度入学生の教育課程から、「知床・産業系列」を設け、それにともない、「観光学部」を持ち、先進的な教育・研究活動を進められている札幌国際大学と斜里町、本校の三者間で「観光教育等の充実に関する高大・地域連携協定」を結ぶ運びとなった。

1 連携の目的

本校では、平成26年度入学生の教育課程から「知床・産業系列」を設定し、地域の豊かな自然環境等を生かした、観光をはじめとする地域産業についての学習を通して、生徒に地域に貢献できる力やホスピタリティを育み、将来の地域を担う人材を育成することとしている。本系列における教

育の推進にあたっては、高度な教育力を有する札幌国際大学との高大連携によって、観光に関わる教育内容等の充実を図るとともに、大学における研究・教育活動の向上と、地域づくりの充実を目指すことを目的とする。

## 2 斜里高校の「知床・産業系列」における教育内容等

### (1) 知床・産業系列の特色

主に地域の自然環境、歴史や文化、観光、まちづくり等に関する学習が中心となる科目群で、授業を通して、地域に貢献できる力やホスピタリティについて学ぶことができるよう、系列内の選択科目や関係の自由選択科目を配置している。

高校卒業後の進路については、販売・接客系就職や公務員就職、自営のほか、観光系大学、保育、福祉系専門学校等への進学を想定している。

### (2) 関係選択科目（下線の科目：連携による支援を想定する科目）

- ① 2年次選択科目：観光一般、観光ビジネス基礎、生活と福祉
- ② 3年次選択科目：観光ビジネス応用、課題研究、フードデザイン
- ③ 自由選択科目：観光情報、観光英語、知床自然概論、子どもの発達と保育 他

## 3 地域との連携

本校は、創設時より地域との強い結びつきの強い高校としての伝統を培ってきており、教育振興会等、斜里町・地域から斜里高校への多大な支援を受けながらその教育活動を推進している。現行の特色ある教育活動の推進にとって、町・地域からの支援は、必要不可欠であるという認識を踏まえ、本校と札幌国際大学との連携にあたっては、町を含めた三者の連携として進める必要がある。

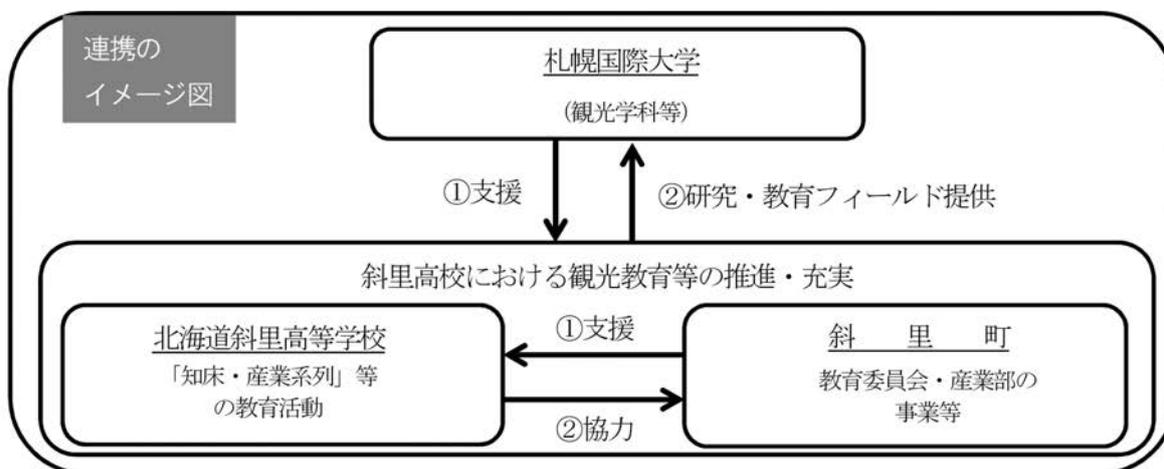
## 4 連携のイメージ

### (1) 斜里高校と斜里町の連携

- ① 町・地域から高校への支援
- ② 高校・生徒による町・地域活動への参加協力

### (2) 札幌国際大学と、斜里高校および斜里町との連携

- ① 大学から高校・町への支援
- ② 高校・地域による研究・教育実践フィールド提供



## 5 札幌国際大学から高校・町への支援の具体例

### (1) 斜里高校への支援

- ① 本校「知床・産業系列」における観光関連科目に係る本校（担当教員等）への助言（カリキュラム開発、調査に関する協力・支援、商品開発や実践活動の支援および協力、講演・講義、調査研究、関係諸機関との連携、情報発信に関する協力・支援等）
- ② 生徒が大学を訪問しての講義（観光科目等関連）等受講への支援
- ③ キャリア教育に関わる支援（デュアルシステムの実施に係る計画作成、事前事後学習および調査研究等への協力・支援、大学研究・上級学校（大学）訪問・職業（観光）研究等への支援）
- ④ その他（校内行事、教員研修等への講師派遣 他）

### (2) 斜里町への支援

- ① 町主催事業（観光関連事業）への講師等の派遣
- ② 町観光関連施策等への助言
- ③ 町教育委員会所管事業（小・中学校の教育活動（キャリア教育等）、社会教育活動等）への支援
- ④ その他

## V 知床・産業系列に関わるプレ事業の実施

昨年8月6日（水）、7日（木）、8日（金）にて斜里町内の観光資源についてiPadを活用した巡見学習および実践的な英会話教育を行い、今後のカリキュラム編成について検証を行った。

- 1 目的：知床・産業系列の授業の糸口や発想の起点、着想を得て、教科の基盤づくりと高大連携事業の可能性を模索するため、先行的に実施する。
- 2 事業内容：「実践力を養う英会話教育の研究～知床斜里をケースに～」
- 3 期 日：平成26年8月6日（水）・7日（木）・8日（金）
- 4 参加構成：札幌国際大学学生 2名  
札幌国際大学教員 3名  
北海道斜里高等学校生徒 1年次生 4名  
北海道斜里高等学校教員 商業科2名
- 5 協力先：札幌国際大学外国語教育センター  
札幌国際大学観光学部  
斜里町
- 6 内 容：斜里町内の観光資源について、自分たちでiPadを活用し写真やムービーを撮影する。また、巡見学習をしながら斜里町内の観光資源のすばらしさを再確認し、感じたことや観光資源についての説明を英語でプレゼンし、英語力を高めていく。

1日目 8月6日(水)

15:30~ 顔合わせおよび打ち合わせ



2日目 8月7日(木)

観光地で使用する英語を学ぶ(斜里⇒知床⇒斜里)

9:30 知床斜里駅集合

10:00~ レッスン1 「知床斜里駅・バスターミナルで使用する英語」



レッスン2 「道の駅・しゃりで使用使用する英語」



12:00~ 昼食(熊湖)

13:30~ レッスン3 「オシンコシンの滝で使用使用する英語」



14:20～ レッスン4 「知床世界遺産センターで使用する英語」



16:00～ レッスン5 「知床観光船乗り場で使用する英語」



17:00～ 復習 「レッスン1～5まで」英語によるプレゼンテーション



18:30～ 夕食



3日目 8月8日(金)

8:00~ 知床自然センター



8:40~ 知床五湖地上ガイド付ツアー(4時間) NPO知床ナチュラリスト協会  
レッスン6 「知床五湖で使用する英語」



12:30~ レッスン6 復習(重要英単語の確認)



14:00~ レッスン7 「フレベの滝で使用する英語」





## 7 生徒の感想

Aさん：座学とは違った英語のおもしろさを学ぶことができた。

Bさん：英会話やプレゼンテーションを体験したことで、段々と英語に慣れることができた。

Cさん：英会話の楽しさを身をもって感じる事ができた。

Dさん：英語のコミュニケーション能力が高まった。

- 8 今後の計画：①今年度については、参加生徒4名で生徒の活動の合間で継続して学習を行う。
- ②学習内容は、iPadにて写真の撮影およびムービーを斜里町の四季に合わせて撮影。
- ③斜里プロジェクトサイト（以下のアドレス）へ各投稿画面にコメントを入力。  
コメントについては管理者（札幌国際大学）が承認しなければアップされない。  
専門サイト⇒[http://gogosiu.typepad.jp/siu\\_master/](http://gogosiu.typepad.jp/siu_master/)
- ④生徒のHPアクセスについては、iPadから行う。（本校からのアクセスはセキュリティの関係で不可）⇒札幌国際大学よりPocket Wi-Fi貸与。
- ⑤インターネットを通じた英語学習の継続実施。  
iPadのfacetimeを利用。
- ⑥次年度以降の観光教育へどう展開するか検討。

## VI 終わりに

このような生徒の学習の場を設定いただいた、札幌国際大学ならびに斜里町には感謝している。生徒が実学で学び、大きく成長することが改めて実感できたため、今後も引き続きご協力を願いたい。



# 天塩川流域地域の広域的な観光交流の基本的な方向について

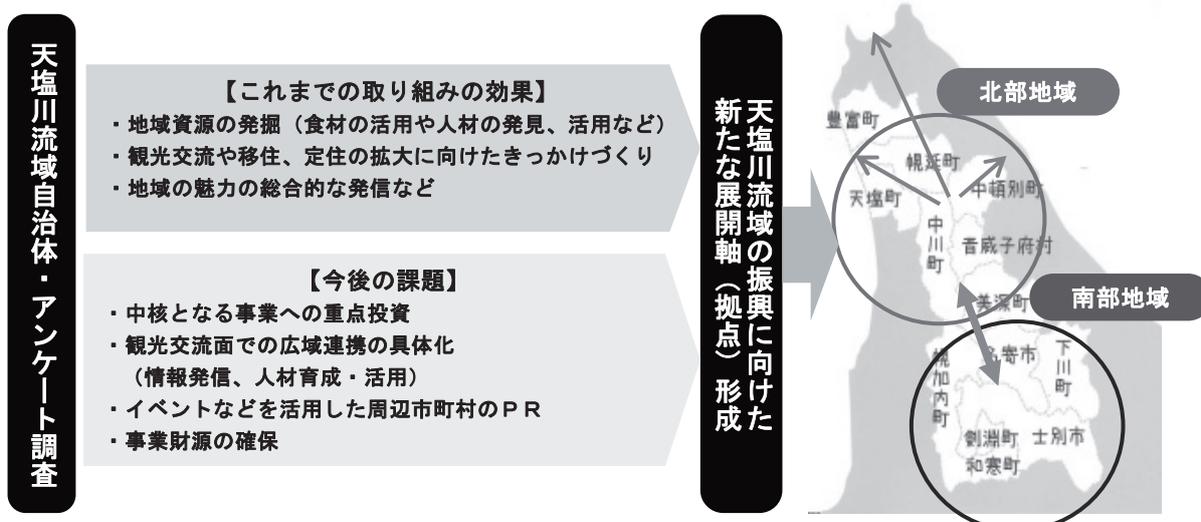
—教育、研修旅行に主眼をおいた観光企画商品の開発に向けて—

齋藤 正紀\* 井上 博登\*\*

## 1 これまでの調査結果の概要

北海道では、「新・北海道総合計画（平成20年度～平成29年度）」に基づき、天塩川流域の13市町村と連携し、天塩川地域の様々な地域資源を広域的に有効に活用しながら、交流人口の拡充などを目指す「天塩川・環境・交流リンケージプロジェクト」を推進しており、このプロジェクトの着実な推進を図ることが、当該地域はもとより道北地方全体の観光交流の振興をはじめ、地域の活性化につながることから、本学としても、少しでも地域貢献ができるよう平成25年度から調査、研究を開始。

平成25年度は、関係する流域の13市町村からのアンケート調査や自治体からのヒアリングなどをもとに、広域にわたる天塩川流域の一体的な振興を図るためには、観光客の移動時間や行程なども踏まえ、天塩川北部地域に「新たな観光交流拠点」を形成し、この拠点と南部の名寄市、士別市などと連携することにより、観光入り込み客の流域全体への広域移動を可能にするとともに、天塩川流域地域を超えて、稚内方面、留萌管内、オホーツク管内北部への観光客の誘導を促し、道北地域全体の活性化につなげていくことが必要であること、また、様々な地域資源がある中で、広域的な連携のイメージや、観光を担う多様な人材の育成のほか、既存のイベントを有効に活用し、時期を調整して連続開催することや、相互にブースを設置し連携を強化するなど、イベントの内容の充実の必要性などについて整理したところ。（詳細は、札幌国際大学北海道地域・観光研究センター年報第6号—平成26年3月、P49～P61参照のこと）



\* 札幌国際大学

\*\* 札幌国際大学

## 2 26年度の調査研究の方向

25年度に明らかにした上記1の方向に沿って、観光交流の活性化の方向を具体的に明らかにするため、平成26年9月に、北部7町村の現地調査を実施するとともに、平成26年11月及び12月にワークショップを開催し、7町村の関係者と、観光に活用すべき資源や当面誘致を働きかける対象、商品造成の基本的な方向などについて意見交換を実施。また、26年度の調査研究から、地域資源の観光への活用や資源の組み合わせなどについて若者の目線からの意見を取り入れながら調査、検討を行うことが資源の有効活用の促進や魅力ある商品の造成につながるものと考え、現地ヒアリングやワークショップに学生を参加させたところ。

## 3 調査研究の結果

### (1) 調査、研究の視点

これまでの天塩川環境交流リンケージ・プロジェクトの取り組みにより、各自治体別の観光資源等を盛り込んだ観光パンフレット「天塩川王国」や、住んでよし、訪れてよいまちづくりを目指して、地域住民自らが地域の良さを発見し、紹介する「お宝ガイドツアー」が、

- 1) 天塩・豊富・幌延
- 2) 美深・音威子府・中川・中頓別
- 3) 名寄・下川・幌加内
- 4) 和寒・剣淵・士別

の4つのコースで行われており、こうした取り組みの成果も生かしつつ、次の視点から調査、研究を実施した。

#### ①各自治体の垣根を超えた広域的な観光交流の展開

観光パンフレット「天塩川王国」の中で各自治体の観光の魅力が記載されているが、宿泊を伴う観光の強化を図るためには、訪れてみたくなる魅力を組み合わせた具体的なコースの紹介などが不可欠であり、そのためには、お宝ガイドツアーの取り組みを踏まえつつ、遊び、学び、癒やしなどのテーマをもとに、広域的な企画商品の造成を視野に入れた検討を行う必要があること。

#### ②観光対象者を絞った戦略的な展開

観光は個人客から団体まで対象が様々であり、外国人も含め幅広く対応できるよう、ユニバーサルな形で地域の魅力を観光に活用していくことが望ましいことは言うまでもないが、新たに広域的な連携を確保し、商品を企画造成した上で、観光客の誘致に向けて関係先に働きかけるには、当面、対象を絞ることが重要である。

- 1) 天塩川南部地域の名寄市や士別市などにおいて、スポーツ合宿の誘致を進めていること
- 2) 個人客よりも、団体のほうが入り込みに伴う経済的な効果も大きく、また、関係先に対する働きかけも効率的に展開できることから当面は、研修や教育旅行に焦点を絞り、広域的なルートや商品造成を検討する。

#### ③これまでの実績の最大限の活用

これまでの枠組みを超えた広域的な連携や地域資源の観光への活用を図るには、自治体間とはもとより、事業者間の連携や協力が不可欠であるが、実際はそう容易なことではない。広域的な連

携により様々な魅力を発信し、着実な展開を図っていくためには、これまで受け入れた実績を最大限に生かし（思い起こし）、出来るところから段階的に取り組み、そのプロセスや成果を関係者に広く周知することにより、新たな協力者やパートナーを見出しながら、地域資源の広域的な連携を促進していくことが必要である。

#### ④観光移動に対応した交流拠点の形成

観光交流を広域的な枠組みのもとで持続的に展開し、地域の活性化につなげていくためには、各般の事業の実施、積み重ねを通じて、北部地域に観光交流の拠点を形成していくという視点を大事にし、この点を共通の目標として、北部7町村の関係者が連携、ネットワーク化を図り、また、その発展的な展開として、南部地域をはじめ、周辺地域との連携を確かなものとしていくことに十分配慮することが不可欠である。

以上4点の視点を重視しながら、調査、研究を実施したものであり、研修、教育旅行を当面の対象としたところから、現地調査における学生の意見も積極的に練り入れ、関係者間で検討を行うこととしたものである。



パンフレットの表紙



各町村の紹介されているページ

#### 4 現地調査の結果などに基づく学生からの提案

まず、観光に活用が可能と考えられる地域資源を7町村別に整理し、これをもとに、広域連携による観光の新たな魅力づくりについて、教員の指導も踏まえて取りまとめた学生からの提案を行うとともに、地域資源や提案に沿って情報発信のあり方についても問題提起したところであり、詳しくは次の表のとおりである。

# 天塩川流域の活性化に向けた観光交流の今後のあり方について

札幌国際大学観光学部 観光ビジネス学科3年  
橋本卓弥、星野太朗

1 観光に活用すべきと考えられる地域資源（現地調査の結果などによる）

資源	中頓別町	音威子府村	美深町	中川町	豊富町	幌延町	天塩町
自然学習体験	鍾乳洞見学 敏音登山 山菜・キノコ採り そうや自然学校 (化石発掘、釣りなど) キャンプ場 星空	音威富士登山 箴島地区自然探訪 北大演習林見学 リバーサイドキャン プ場 星空	松山湿原登山 函岳登山 チョウザメ館 (餌やり、指をかま せる) 美深アイランド星空	中川町 エコミュージアム 恐竜時代の地層観察 春山森林浴 ハスカップ狩り サイダーづくり体験 ナポルトパーク星空	サロベツ原野散策 (湿原ガイド) 豊富温泉+各町村資源 (温泉コンシェルジュ による個々に合った登 山森林浴等の活動プラ ン) オートキャンプ場 星空	サロベツ原野散策 利尻富士 キャンプ場 星空 冬の荒れる日本海	利尻富士 (天塩川、日本海、 夕日、風車)の景観 北海道の陸地形成 過程等学習 シジミ狩り 吹雪体験 鏡沼海浜公園 キャンプ場 星空
	歴史・文化 ・芸術	中頓別町郷土資料館 (開拓使、鍾乳洞など) ふるさと生活体験館 砂金堀体験	エコミュージアム 箴島センター 高橋昭悟彫刻館 見学・彫刻体験	陶芸体験 斉藤茂吉関連学習	豊富町兜沼 郷土資料館	長応寺 郷土資料館	厳島神社 天塩川歴史資料館 川口遺跡風景林
合宿	宿泊施設	音威子府スキー場 クロスカントリー アルペンスキー	スキー場 宿泊施設	宿泊施設	宿泊施設	宿泊施設	スキー、スノーボード 宿泊施設
	食	ギョウジャニンニク、 フキなどの山菜・キノ コ 砂金ラーメン 砂金ようかん	美深コロッケ ・肉まん ピフカ・ボチャ オムカレ	ハスカップワイン ・サイダー ギョウジャニンニク いも・かぼちゃ	はまなすジャム 山菜加工品 豊富牛乳 川島旅館の白いプリン 牛タンステーキ	トナカイソーセージ サロベツ合鴨 山菜 乳製品	シジミラーメン カジカ、鮭 地場食材ピザ アワビ入りご当地キム チ
祭り	鍾乳洞祭り 北緯45度夏祭り 砂金祭り 北緯45度しばれ祭り	八運祭り ふるさと祭り 納涼祭り	函岳・登山の集い ふるさと夏・秋祭り 望の森桜祭り 白樺樹夜祭	町民植樹祭 天塩川de水切り 北海道大会 ハスカップ収穫祭	豊富八幡神社祭典 サロベツ100マイルロー ド ホッキ祭り 豊富雪あかり	幌延神社祭 名林公園まつり おもしろ科学館 トナカイフェスタ	シジミ祭り (7月) 港まつり (8月) 味覚祭り (9月) スノーランド (2月)
上記に付加する魅力							

2 学生からの提案

分類	提案	具体的内容	想定するマーケット
広域連携による観光の新たな魅力づくり	体験施設の連携による体験・学習メニューの多様化	①多様な学び・体験メニューを用意（開拓の歴史、自然、文化、産業など） ②好みに合わせて2～3町村の学び・体験コースの中から選択 ③各町村キャンプ場での星空も付加。（満天の星空一周年での活用も可能）	修学旅行など、研修・学習関係、家族づれ、歴女などのマニア、地域づくりに関心のある者
	資料館の展示の有効活用	①長門船の開拓における役割などの説明と、可能であれば、乗船体験 ②林業の歴史の展示に加えて、かつて林業に携わっていた方にお話をしてもらう ③明治、大正、昭和（戦前、戦後）の街の姿を時系列でジオラマ、映像で展示し、スポットとなるところを軸にした散策路の整備（街の歴史を感じる散歩道）	修学旅行生、写真愛好家、家族連れ
	自転車観光コースの設定と自転車の貸出	①利尻富士や、天塩川など道北ならではの景観を自転車で周遊するコースを設定する（自転車はコースの起終点までレンタル）	自転車愛好家（外国人を含む）、写真愛好家
	ウィンタースポーツ合宿誘致	①広域連携によるクロスカントリー、フリースタイルなどの冬季スポーツの合宿誘致 ②宿泊施設などの受入体制は広域で対応する（宿泊＋アフターの魅力）	学校、スポーツチーム等
	イベントの広域化による地域住民の交流活性化	①住民の交流促進のため、町村対抗の運動会などを会場をローテーションさせて実施（広域連携による受入環境の整備を図る環境や基盤整備上も重要）	各市町村の住民（幅広い年代ー世代間交流）
	優れた景観を活かした展開（再掲）	①例として天塩町、函岳、幌延などいろいろな角度からの利尻富士を楽しむツアー（散策、ツーリング） ②四季の移り変わりを感ずる景観（現象）を見せる。例として紅葉、冬のサンピラー、ホテルなど	写真愛好家、登山愛好家
	豊富温泉などを核としたヘルスツーリズムの推進	①湯治客向けに温泉と、森林散策（森林浴）や食事などを組み合わせて個人に合ったプランをコンシェルジュがコーディネート ②移動手段として、自転車や送迎ボランティアなどを選択可能にする ③ヨガ教室を開く。正しい湯治の仕方をレクチャー。短期滞在でも気軽に利用可能	湯治客をはじめ、健康づくりに関心のある方、外国人など
	グリーンツーリズムの団体の広域な受入れ	①農家民泊で食・宿泊所の安全基準など（サービスの品質も含む）を天塩7地域で統一化 ②広域でグリーンツーリズムの受入れを行う。農業、漁業、酪農など広域で分散して旅行者を受入れ	修学旅行生、農家民泊希望者
	暮らしの歴史を感じられる体験メニュー	①明治、大正、昭和の暮らしを想起できる生活道具（ちゃぶ台、テレビ）やおもちゃのあるあこテージの部屋 ②前述と関連し、資料館などでかつての生活を年配の方に話してもらう	家族連れ（3世代）、外国人

3 地域の魅力の効果的な発信などに向けて

分類	提案	具体的内容	想定するマーケット
情報発信	HPにおける観光情報の明確化とスマートフォンサイトの開設	①村のHPである程度統一された形式で観光情報を提供。道などが基本となるフォームを作成 ②スマートフォンサイトの作成。各町村のHPに他町村のリンクの貼り付け。多言語化	天塩地域を訪れる全ての観光客
	LINEスタンプによる他地域には見られないSNSの活用	①無料通話アプリのLINEで地域を印象付けるスタンプなどを提供	同上
	各町村で手書きのマップを作成	①手書きの観光マップを各町村が作成。QRコードで観光地の情報などを閲覧可能に	同上
	駅・ホテルなどに観光施設のパネルマップ等を置く	①ホテルなどの観光名所に関するパネルマップや上記マップを用意 ②多言語化に対応	同上
各町村単独での取り組み	移住・定住の推進	①町村が移住に要する費用を支援。(補助に止まらず、雇用の場の斡旋、ワーキング・ホリデー、空き家、空き室の有効活用などを含む) →シェアハウスを含む ②空き家情報の積極的提供(空き家情報アプリの活用など)	移住希望者
	天然プラネタリウム	①各市町村のキャンプ場を活用して、御座などを引いてあおむけで星を見る。空気が澄む冬も実施	冬季客、天文愛好家
	音威子府村工芸高校との連携	①工芸高校で作られた箸や器を周辺地域の飲食店等に提供。そばと関連させて販売	修学旅行生など
	天塩町・利尻富士デーナー	①利尻富士を見ながら夕食を楽しむ。サンセットも見る	家族連れ、カップル、高齢夫婦

現地調査は限られた時間の中で実施したため、課題の整理が必ずしも十分ではない点もあり、また、提案そのものが新たな投資を必要とするものもあり、当面は、大きな投資を極力回避し、身の丈に合わせ、連携を含めて対応が可能なものを抽出すること（いわゆる、短期的な対応と中長期的に対応すべきものとの仕分け）、また、研修や教育旅行の誘致を想定した上で観光交流に活用可能な資源を整理することとした。

ワークショップでは様々な意見が出されたところであり、その主な意見を列記すると次のとおりである。

<ワークショップでの主な意見>

- ◆パンフレット（天塩川王国など）に記載のカヌーは天塩川の流れを生かしたアウトドアスポーツとして有効ではあるが、有資格者がいて事業として実施できる地域は一部の自治体に限られており、現在のパンフレットでは、自己責任ではなくサービスとして利用可能なように受け止められる恐れがあり、記載を改めることも必要ではないか
- ◆現時点で民間の大型投資は難しく、宿泊については既存の施設を広域的に活用することが適切であること（滞留・滞在は可能でも、宿泊は周辺地域で対応してもらいたいとの自治体の意見もあり）。このため、北部7町村の宿泊能力（受け入れキャパシティ）を把握することが大事なことである
- ◆提案は外側からの目線での地域資源の評価として有り難い。これをきっかけに、今後、地元でも地域資源の発掘、再評価を行いたい。
- ◆提案は四季を通じたものになっているが、広域ルートの形成や商品の企画、造成を図るには、時期を絞ったほうが良い。（当面、初夏から初秋をターゲットに企画商品のあり方を検討）
- ◆また、経済効果を大きなものとし、理解者や協力者を見出しながら、発展的な展開を図るには、現時点では、研修や教育旅行に焦点を絞ることが必要

### 3 観光交流の展開方向

#### (1) 観光交流拠点の形成に向けた核づくりと核を結ぶ広域観光ルートの形成

天塩川北部地域に広域的な観光交流の拠点を将来的に形成していくことを視野に入れ、観光客の広域移動や、宿泊受け入れ能力、移動時間、これまでの受け入れ実績や施設、資源などの賦存状況を踏まえると、北部地域の中に、核となる地域を設け、地域相互の連携も図りながら、広域的な観光ルートの形成を図ることが戦略的に重要と考えられる。

このことは、全国総合開発計画の中で多極分散型の国土形成に向けて、国土構造の連携による発展という形で何度も提唱されてきているが、広域的な地域の中に複数の核を作り、核と周辺地域が連携し、また核となる地域相互の結び付きを強めながら、複核連鎖の地域構造を形成し、当該地域を越えたネットワーク化を目指すものであり、一つの自治体で自己完結的に都市機能や生活関連サービス提供機能を整備することが困難になりつつある中で、今後のまちづくりのあり方としてより一層重要になるものと考えられる。

このため、これまで取り組みを進めてきた観光交流を起点に、広域連携を推進し、順次、まちづくりに関する様々な機能の連携や役割分担を図り、結果として広域的に生活環境や経済活動の基盤を効果的に整備していくことが、今後の地域づくりのあり方として有効と考える。

## (2) 核と想定する地域

地政学的な位置、移動時間（時間、距離）、地域資源の賦存状況や活用実績などを踏まえると、北部7町村の旭川方面の入り口に当たり、また、天塩川南部の名寄市や士別市とも近接する美深町と、北部地域の中間地点に位置する中川町を核とし、周辺町村との連携を図りながら、観光交流拠点の形成に向けた取り組みを行うことが適切と考えられる。

なお、この考え方について整理した概念図は、別紙1のとおりである。

### 別紙1 天塩川流域北部7町村の観光交流の展開の方向について

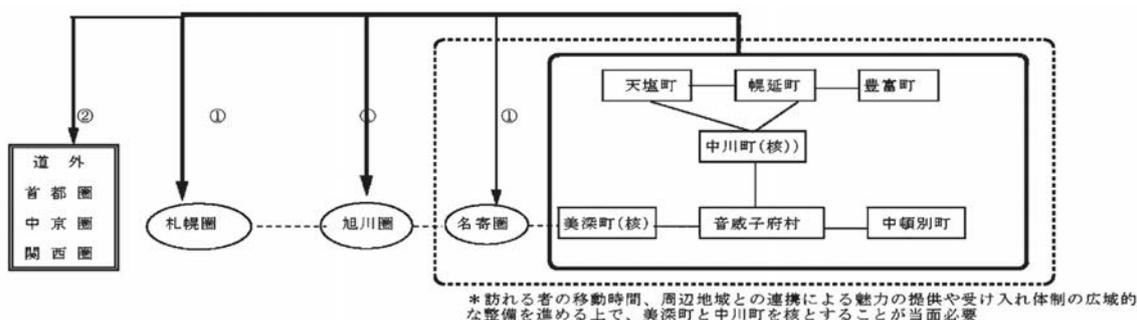
#### 天塩川流域北部7町村の観光交流の展開の方向について

##### 1 基本的な考え方

- 現地調査の結果などを踏まえると、北部7町村（美深町、音威子府村、中頓別町、中川町、天塩町、幌延町、豊富町）には観光に活用可能な資源が豊富にあり、事業者や地域住民の方々の協力を取り付けることができれば、多くの投資をすることなく観光交流の新たな展開が可能であり、単に訪れる人に地域の魅力を提供することに止まらず、地域の良さの発見などを通じ、住民の方々がふるさとへの愛着を高めるなど、地域と訪れる人が相互互恵の関係に立ち、まちづくりと観光交流の両立を図りつつ、持続的な取り組みにつなげていくことが重要

##### 2 基本的な方向

- 北部地域に観光交流拠点を構築することは、稚内、北オホーツク、留萌北部地域への観光客の入り込みを誘導するなど道北全体の観光振興をはじめ、地域の活性化に大きく貢献することが期待される。このため、移動時間などを踏まえ、訪れる人に魅力あるコースの提供や、周辺地域の魅力との連携による広域的な受け入れ体制の確保に向けて、北部7町村の中に、複数の核を作り、核相互の連携や核を軸とした周辺の連携により、観光ニーズの多様化に対応した様々な魅力の提供及び受け入れ体制を整備していくことが不可欠。
- 各町村の地理的位置関係や時間距離、これまでの受け入れ実績、訪れる人の移動時間などを総合的に勘案すると、美深町と中川町を核とし、核となる地域相互の連携はもとより、核となる自治体と周辺地域の連携を図ることが当面必要と考えられる。



##### 3 当面の取組みの方向

- 将来的には、道外の首都圏、中京圏、関西圏の三大市場からの教育旅行の誘致を目指していくことが適切と考えられるが、こうした地域に企画商品を提示し、旅行業者や学校関係者などに誘致を働きかけていくためには、魅力の提供や受け入れ体制の整備について自信を持って説明し、また、訪れた方に満足感をもって帰っていただくことが不可欠である。

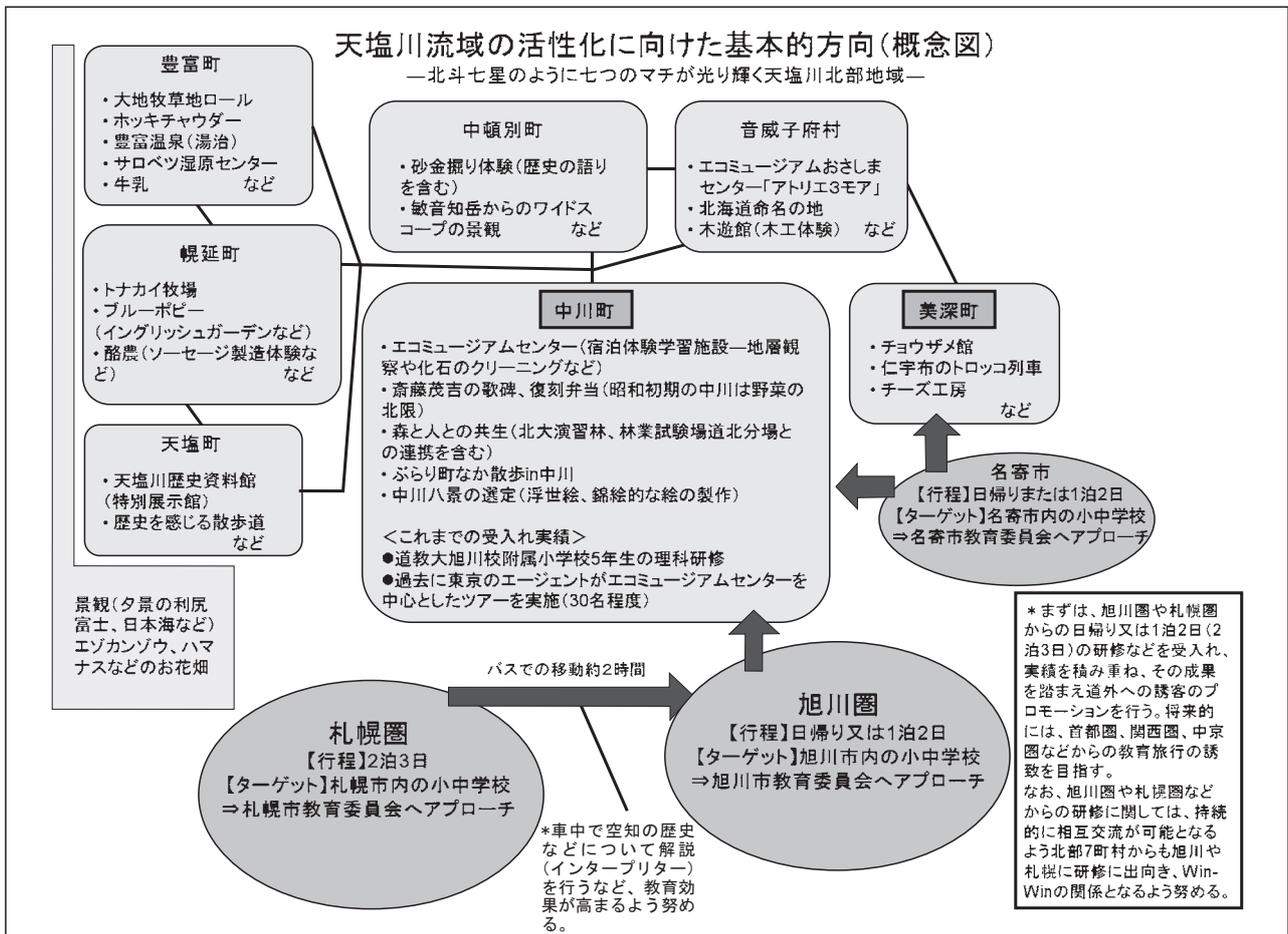
そのためには、まず、旭川圏や札幌圏などを対象としたコースを設定して、中高生をはじめ観光客を実際に受け入れ、ノウハウの蓄積や事業者間、地域間の連携、新たな魅力の創出などにつなげ、その実績をもって、企画の実現性を明らかにしながら、道外市場にプロモーションすることが効果的と考える。

#### 4 核と想定する地域を前提とした観光企画商品の概念設計

上記3に記載した美深町と中川町を核とした商品の概念設計（イメージ）を例示すると別紙2のとおりである。

商品設計上、美深町及び中川町を核とし、周辺地域及び核相互間の結びつきの中で、体験や学びなどに活用できる地域資源も組み合わせ、研修、教育旅行商品を造成し、この商品の事業化に向け、まずは身近な名寄圏、旭川圏、札幌圏をターゲットにし、実際にこの地域に来ていただくことに焦点を絞りながら事業化に向けた取り組みを行い、受入のノウハウや新たな魅力の創出に加え、関係する事業者の協力を取り付け、将来に向けた受入体制の充実や魅力の付加につなげていくことが必要と考えられる。また、こうした取り組みの積み重ねによって、多様な魅力があることや、受入の実績から、訪れる人に満足感を与えることができることを説得的に説明できるように努めながら、将来的には三大都市圏（首都圏、中京圏、関西圏）からの修学旅行の誘致につなげていくことを目指していくことが効率的な事業の展開を図る上でも効果的と考えられる。

別紙2 天塩川流域の活性化に向けた基本的方向（概念図）



かつて十勝支庁（現在の十勝総合振興局）で、池田、本別、足寄、陸別の4町を結ぶ観光商品を開発し、モニターツアーからはじめ、現在は、浦幌町も含め年間2,000人を超える修学旅行生を受け入れるまでになっているが、ここに至るまでには、モニターツアーの成果や旅行エージェントの現地視察による評価などを踏まえ、商品や魅力の付加などの工夫を行い、実際に受け入れが可能であり、満足のいく商品であることを説得的に説明したことによることが大きいと理解している。このため北部

地域でも、まずは旭川圏や札幌圏から多くの研修や教育に関する旅行でこの地域に実際に来ていただき、その評価を踏まえ不断に魅力の磨き上げを行うとともに、一定の評価を得ていることや常日頃から創意工夫を図っており、ニーズの多様化にもしなやかに対応できることを、旅行エージェントに説得的に働きかけていくことが重要と考えられる。また、同時に、一方的に受け入れるだけでなく、旭川圏や札幌圏などに小中学校の生徒を送り出すことによって、相互互恵（win-winの関係）の地域間交流が図られ、観光交流に止まることなく、児童生徒の健全育成をはじめ、地域製品の販路拡大、二地域居住や移住、定住など地域の活性化全般にも様々な効果があるものと考えられることから、こうした取り組みの積み重ねを通じ、7つの地域が北斗七星のように光輝き、住んでいる人々がその地域に愛着や誇りを感じ、また、外国人も含め訪れる人々に様々な魅力を提供することができる地域になっていくものと確信している。

特に、地方において、少子高齢化の進展や人口の減少、更には、自治体の財政事情の悪化が進む中で、地域の再生や創生が声高に叫ばれているが、地域自らが外部の意見も取り入れ、足下の地域資源を見つめ直し、再評価を行いながら、地域づくりに参画する者の輪を広げ、主体的に運動論（movement）として地域づくりに挑戦するほか、地域の再生や創生の道はない。どこにも万能な処方箋はなく、進路は自ら切り開いていくしかないことを自覚し、様々な連携、連帯のもとで、商品化の道を模索し、できるところから確実に形にしていくことを共に考えていきたいと思う。

## 5 今後に向けて

現地調査は限られた時間の中で行ったものであり、また、ワークショップも2回の開催に止まり、商品化に向けた検討は必ずしも十分掘り下げたものとはなっていない。そうした意味で、概念設計は商品化に向けた検討のたたき台であり、今後、関係する7町村で詳細に検討することが不可欠である。

その際に留意しなければならないことは、自治体職員に加え、観光協会や事業者などの参画を得ながら実現可能性のある商品の設計を行うことと同時に、観光商品の市場を見極め、こだわりのある魅力（地域ブランド化）やセールスポイントを明確にしつつ価格を設定し、競争力のある商品となるよう努めていくことが重要である。27年度はこの点に十分配慮しながら、調査、検討を深めていきたいと考えている。

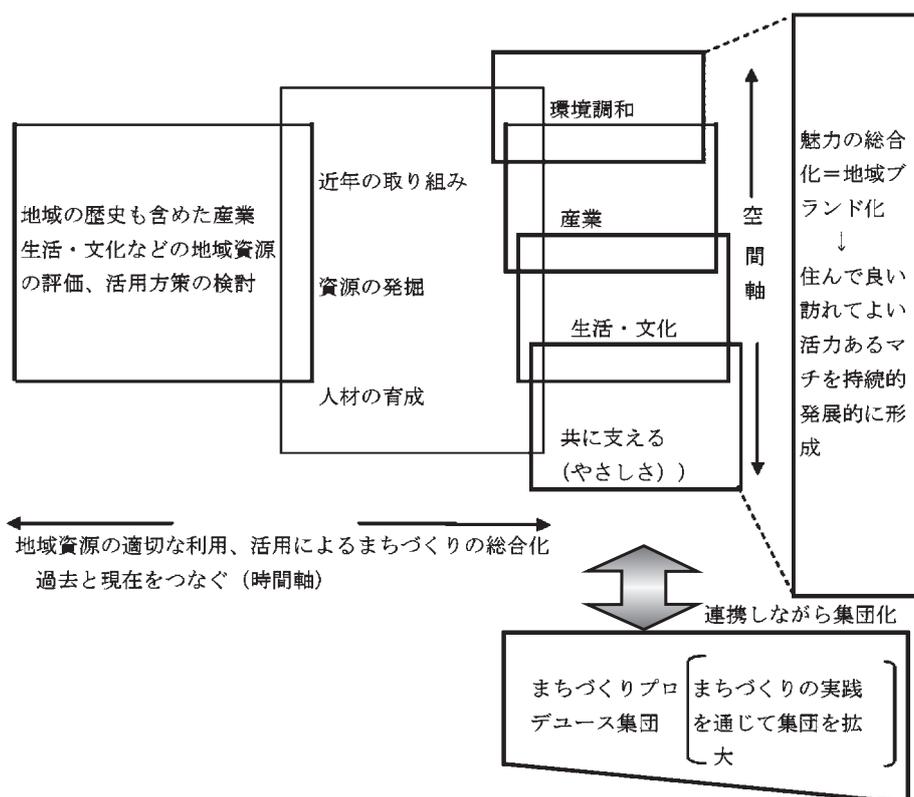
# 美唄市内の地域資源を有効に活用した着地型観光企画商品の開発に向けて

斎藤 正紀\* 井上 博登\*\*

## 1. 平成25年度に実施した調査結果の概要

少子高齢化や人口減少が進展し、全国の多くの自治体、地域でまちとしての機能の存続が危ぶまれている中で、地域の特性を生かしたまちづくりがこれまで以上に重要視されてきており、全国各地において地域の活性化に向けて創意工夫をこらした様々な取り組みが進められているが、地域の歴史や資源、特性を有効に活用し、これを発展的に次世代につなげていく考え方や方法論（道具概念）が現時点では十分に明示されているとは言い難いと考えている。

このため、平成25年度に実施した調査では、地域資源を有効活用した内発的な発展のモデルを仮説的に設定し、資源の組み合わせの中から地域の良さを発見し、「地域の住民が住んで良い、また、訪れる人にとっても新鮮な感動を与えるまちづくり」を考えていくことにしたものである。



内発的な発展モデルのイメージ（概念図）

（札幌国際大学北海道地域・観光研究センター年報 第6号、平成26年3月、P.75参照）

\* 札幌国際大学

\*\* 札幌国際大学

そのモデルの具体的なイメージは上記のとおりであり、地域には暮らしや産業の面でそれぞれ固有の歴史が存在し、その時間の経過や変遷とともに今日があることは論を待たない。例えば、世界遺産や近代化産業遺産などに象徴されるように、その時間の経過の中に、暮らしや産業を守り育ててきた名もなき市井の人々の多くの努力があり、その上に現在の地域があることについて、混沌とした時代を迎え、経済社会システムが大きく変容しようとしている今こそ、その意義を再認識し、これからの地域づくりに生かしていくことが必要であろう。

地域の特性や宝物、あるいは地域ブランド化といった場合、まず、地域の歴史を含めた産業、生活・文化などの地域資源全般を評価することが不可欠であり、その時間軸の再評価、検証を基本としながら、今日の生活や産業といった地域の姿（空間）と結びつけ、先人の卓越した見識、多くの人の手で守り育ててきた努力、まちの悲しい出来事などを紡ぎ合わせ、マチの宝物（こだわり）を見出し、これを現在に生かしながら、新たな付加価値を創造し、次の世代に発展的に継承することこそが、歴史や特性を生かした持続的なまちづくりにつながる筈であり、このことは、全国どこのマチでも方法論として応用することが十分可能であると確信している。

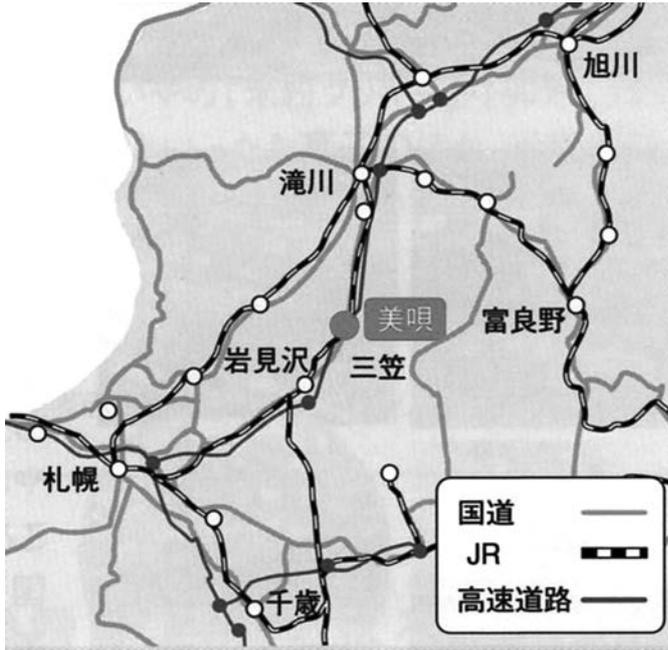
## 2. 平成26年度の調査研究の方向

炭鉱で戦前・戦後の一時期において、我が国の近代化や戦後復興を支えた美唄市の活性化に資するため、地域資源を活かした新たな観光交流の可能性について幅広く検討し、着地型観光企画商品の開発につなげていくため、地域資源の発掘、評価、ルートのあり方などについて実際に学生も含め地域を回り、調査を実施したところである。

美唄市については、札幌と旭川の間位置し、通過型の観光地としての性格が強いが、道道美唄富良野線が平成30（2018）年に開通することに伴い、美唄経由で富良野方面に出向く観光客の増加が予想され、こうした動きに対応し、地域の資源を生かした多様な魅力を用意し、美唄市内及び周辺地域での滞留性を高めていくことが地域の活性化を図る上でも喫緊の課題となっている。

そのためには、道道美唄富良野線沿線にある東明地区を休憩や滞在のための拠点として整備することも必要と考えられるが、観光客の双方向の動きも踏まえると、人口が集中する札幌圏から来る人に適切に対応するため、美唄市南部の峰延地区において、足を止め、止まってみたいと感じる魅力を兼ね備えた交流拠点としての機能を高め、札幌圏からの玄関口（ゲートウェイ）としての役割を果たしていくことが重要と考えられる。

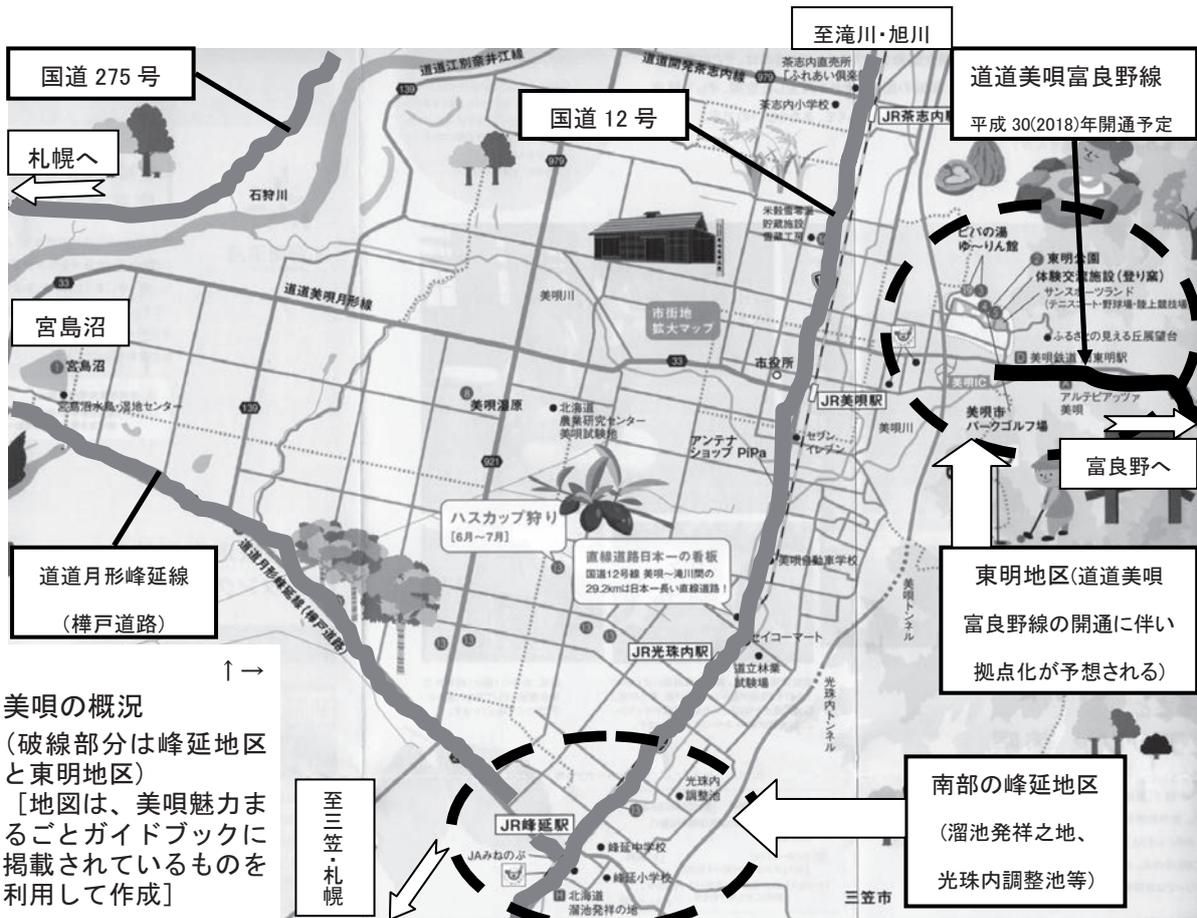
このような観点から、本年度は美唄市南部地域や周辺地域を含め資源の有効活用を図り、地域の活性化の方向を具体的に明らかにするため、現地調査の結果などをもとに活性化のあり方について具体的に検討を行ったものである。



←美唄市の位置

美唄市は札幌と旭川の間位置する。道道美唄富良野線が開通すると、富良野に行き来する観光客の増加が予想され、これに対応し魅力を高めることが必要。

↓市の中心部を、札幌圏と旭川圏を結ぶ大動脈である国道12号（上川道路）が貫く。道道月形峰延線を経由し、国道275号を利用して札幌圏にアクセスすることも可能。



美唄の概況  
 (破線部分は峰延地区と東明地区)  
 [地図は、美唄魅力まるごとガイドブックに掲載されているものを利用して作成]

### 3. 調査の結果について

美唄市南部には、百年記念碑や溜池発祥之地、北海幹線用水路、美唄湿原、宮島沼などがあり、いずれも美唄の開拓の歴史を今に伝える貴重な資源であって、これらの資源を適切に結びつけていくことにより、美唄の新しい地域物語を作ることが可能である。

現在、美唄は、全道第4位の「米どころ」になっているが、これは、先人が私財を投じて溜め池を作り、また、北海道遺産に認定されている「北海幹線用水路」による営農用水の確保、美唄湿原に象徴されるように、水はけが悪い湿地や泥炭地を繰り返し土壌改良し続けてきた農家の努力、たゆまぬ品種改良への挑戦、良食味米の研究といった取り組みの積み重ねの上に今日の農業の地位を築いてきたことを確認することができた。

観光ニーズも多様化し、目が肥えた観光客には表面的な事柄だけで満足を得ることは困難になりつつあり、地域のかげがえのない歴史も含め、その努力の上に農業が花開き、素材の良さや様々な加工品、開拓の歴史に呼応して誕生した食文化があることを正しく解説（インタープリター）することがクール・ジャパンにもつながる、地域のかげがえのない、こだわりのある魅力とすることができる。また、こうした農業の歩みに、物流としての樺戸道路（現在の道道月形峰延線）や上川道路（現在の国道12号）が果たした役割との関連、一見関係性が薄いとみられる炭鉱の開発や生産の歩みなど地域の様々な出来事と重ね合わせても、地域独自の物語（ストーリー）を形づくることは可能と考えられ、まさにこうした作業こそが、真の意味で地域の宝物や特性に光りを当て、これに新たな価値を付加することになり、観光客をはじめ多くの人を魅了してやまない地域の財産になり、未来にも継承することにつながる筈である。

美唄市の南部地域の調査によって、発展モデルに対応し、地域資源の活用の方向について一定の考え方の整理ができたことから、歴史を含め、資源の組み合わせや物語化（ストーリー性）について、南部地域を中心に、他の地域資源の連携も視野に入れ、一つの試みとして、学生をまじえて着地型観光企画商品の造成に向けて検討を行った。

#### 調査した地域資源の評価と課題及び改善策などについて（美唄市南部地域）

	名称	評価と課題	改善策
1	百年記念碑 	<ul style="list-style-type: none"> <li>美唄の米づくりを支えた歴史的価値があり、先人の不断努力を偲ぶことができ、ツアーの行程に入れることによって地域が歩んできた足跡などを物語として語ることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>溜池や用水が営農に果たしてきた役割などについてわかりやすく解説し、グリーン・ツーリズムや地域学習の素材として有効に活用していくことが必要。</li> </ul>
2	溜池発祥之地 	<ul style="list-style-type: none"> <li>そのためには、米づくりの歴史について丁寧な解説が必要。</li> <li>現状では、腐食した案内板があるのみで、周辺を散策するコースなどもなく、歩いて見て回れる工夫も必要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>案内板や説明板の設置、安全対策に配慮した散策路のほか、しっかりと解説できる人材の育成も必要。</li> </ul>

	名称	評価と課題	改善策
3	樺戸道路 (道道月形峰延線) 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・樺戸集治監（現月形町）と空知集治監（現三笠市）をつなぐ路線として、1887（明治20）年に開削された。工事には囚人が使役され劣悪な環境の中で多くの者が犠牲になった悲しい歴史があり、北海道開拓の過酷な歴史を今に伝える歴史的価値がある。</li> <li>・こうした価値のほか、この道路からは、樺戸連山や実りの秋には一面黄金色の田んぼと夕景などの優れた景観を見ることができ、歴史的な価値と同時に、産業や景観を組み合わせることで、空間的な広がりの中で様々な魅力を四季に応じ、有効に利活用していくことも重要な視点と考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この道路は移動手段としての利用に止まらず、美唄開拓の礎となった歴史やエピソードの説明を加え、車窓の景観とともに観光に有効に活用できるよう工夫することが必要（バスの車内でのガイドによる解説やバスを降りて歴史に思い巡らせた散策など）</li> <li>・景観の面では、白樺並木だけではなく、一直線に伸びる道路、田んぼに映える夕景と白樺の組合せ、写真撮影などの組合せにより、観光客の嗜好に適切に対応しながら魅力を演出することも必要。</li> </ul>
4	宮島沼 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マガンの飛来地として知名度は高く集客力があるが、飛来しない時期の魅力の創出が必要。周辺の田んぼも含め、環境保全に果たしている役割について年代別に学習、体験できるメニューの整備が必要。また、環境保全に配慮し、沼の周辺（一部）を見て回れる工夫も必要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宮島沼の歴史や環境が保全されている仕組みの学習、周辺の農業とのつながり、農業体験（田植え、草刈り、収穫、わらじ作りなど）をはじめ、宮島沼を起点に周辺の産業などの資源との結びつきの中で、生活空間全体の魅力を高め、観光客の求めに応じ、選択的に資源を利活用できるようメニューを用意することが必要。</li> </ul>
5	美唄湿原 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開発される前の石狩湿原の面影を今に残し、植物や景観の面で貴重であるが、植生などが専門的で一般受けしにくい。</li> <li>・また、湿原を利用するには、木道などの整備が必要であり、施設管理者と協議が必要なほか、一般の者が足を止めて、見てみたいと思わせる利用の方法を別途検討することが不可欠。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光に活用していくためには慎重な検討が必要。活用するのであれば施設管理者と協議して、観光客が安全に回遊して戻ってこられる木道の整備が不可欠であり、また、植生の荒廃や盗掘などへの対策も併せて検討することが必要。</li> <li>・例えば、現在の水田もかつては、湿原のように水はけが悪かったことを説明する上で利用するなど、活用方法については多面的な検討が不可欠。</li> </ul>

\* 美唄市南部地域における調査（平成26年6月28日実施）に基づき、札幌国際大学観光学部観光ビジネス学科3年の阿部聖也と山崎雄也が原案を作成し、井上、斎藤が指導の上、整理

#### 4. 現地調査の結果などに基づく観光企画商品の提案

観光商品の設計に当たっては、対象とする市場、旅行形態（宿泊、日帰り）など様々な要素を踏まえることが必要であるが、現地調査の結果をもとに、観光企画商品を検討するに当たって、今回は基本的条件（与件）を次のとおり設定した。

##### 基本的条件（与件）

- 札幌発着の日帰りバスツアーとし、美唄市の南部地域からのコースとする
- アプローチルート（経路）を工夫する

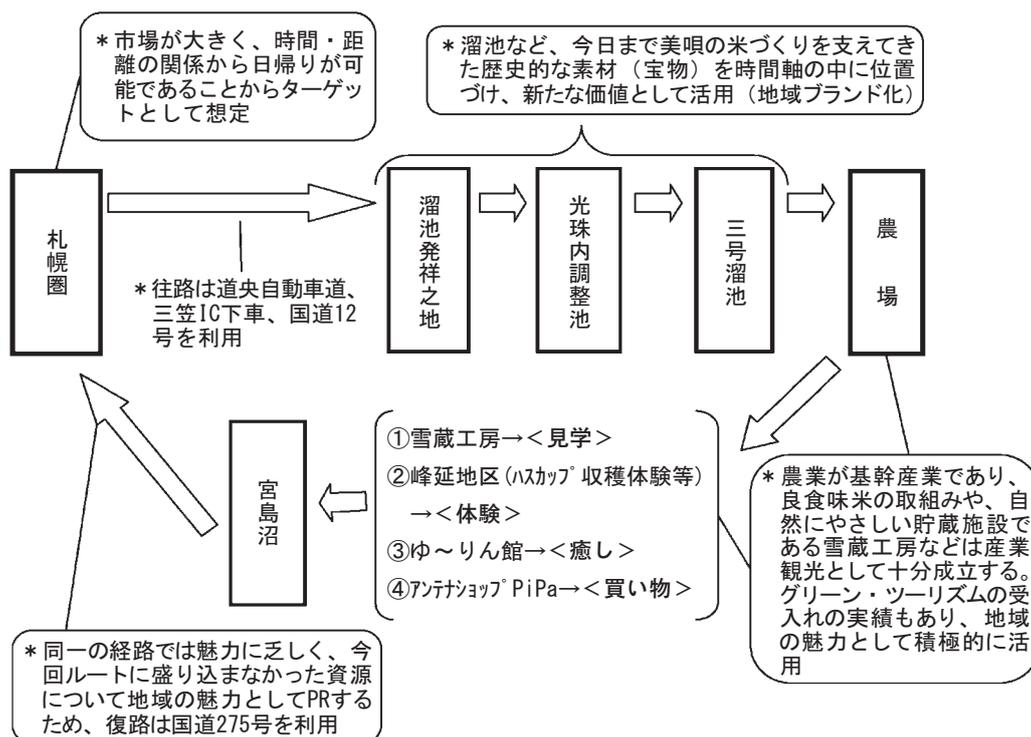
例）往路は高速三笠ICで降り、国道12号を北上。車中で美唄開拓の足跡をたどる解説を行い、その解説を「地域への入り口」として溜池発祥の地へ。

復路は、国道275号経由で札幌に帰る。時間的な余裕があれば、月形温泉ゆりかごで汗を流してもよい。

また、タイミングが合えば、夕景を楽しむことを念頭に景観のスポットを検討する。

- 溜池建設の歴史をたどりながら美唄の農業（とくに稲作）の歴史に触れ、その後、農家で農業体験、料理体験、散策などのメニューを選択できるように用意。体験などと併せ、昼食（美唄の特産品を活かしたもの）
- 昼食後、①雪蔵工房、②峰延地区（ハスカップの収穫、賞味体験）、③ゆ〜りん館（ピパマートを含む）、④アンテナショップPiPa（買い物）などに立ち寄り、見学や交流
- このあと、宮島沼に向かう。宮島沼では、マガンとふゆみずたんぼの関係、沼と農家との関係や沼が残されてきた歴史などについて学芸員から解説を聞いた後に、サイクリング、散策、マガンウォッチング、室内見学など年齢や旅行形態などに応じ自由に選択できるメニューを用意（なお、サイクリングは、田んぼや防風林などがあり、休憩できるスペースがある場所を選定）
- 宮島沼での体験終了後、月形大橋を渡り国道275号を經由して札幌に帰る。時間的な余裕があれば、月形温泉「ゆりかご」に入浴。また帰路、夕景がきれいな場所があれば、適宜立ち寄ることとする

基本的条件（与件）に込められた企画商品の設計上のポイントは次のとおりである。



●観光企画商品の例

・農業の歴史や食の楽しみをテーマとしたもの

(ツアー名称) 美唄の 食と歴史 に密着!!

～美唄の米づくりを支えた歴史にふれ、溜池などの関連施設を見て学び、

新米のおいしさを堪能します!!～

時間	場 所	内 容
9 : 30	札幌駅北口 集合 出発	札幌市内一道央自動車道一三笠IC下車—国道12号を利用。なお途中高速SAでのトイレ休憩 車中で旅のプロローグ的な語り (テーマの農業の歴史と今日の美味しいお米が時間軸と空間軸で繋がっていることを説明)
11 : 00	溜池発祥之地	溜池発祥之地での解説、語り (開拓の歴史、溜池の機能と米づくりとの関係などについて)
	光珠内 調整池	解説 (社会資本としての調整池の役割・機能、整備年代、溜池から調整地への変遷など) 途中の経路にある北海幹線用水路についても解説 (北海道遺産であることも含む)
12 : 00 ～ 13 : 30	農家 (農場) (昼食)	とれたての新米で昼食 (おにぎりを参加者自ら握るなど)。また、米粉に因んだお菓子なども試食。食事は農家とのふれあい、交流を基本に、農業の作業や土への愛着、有機農法などについて農家から説明し、農業への理解を深める
14 : 00	樺戸道路 (白樺並木)	開拓の礎となった歴史などについて語り、車窓の景観も楽しむ。適宜途中下車し、歴史に思い巡らせた散策や、樺戸連山、黄金色に輝く田んぼなど景観を楽しむ
14 : 30 ～ 16 : 00	ピパの湯 ゆ〜りん館	疲れた身体を癒し、元気を取り戻すとともに、参加者同士が交流も (ツアーで印象的だったことなど語り合う)。青の洞窟や露天風呂を堪能。ピパマートでの地場産の野菜などの買い物を楽しむ。
16 : 15 ～ 16 : 45	アンテナショッ プ PiPa	美唄ならではの土産を購入。車中では美唄の魅力 (地域資源) のPR (DVDの映像など)。経路に変化をもたせるため国道275号を利用 (途中トイレ休憩を含む)
18 : 30	札幌駅北口 到着	解散

<ツアーの特徴>

(料金) 5,000～6,000円程度 (大人1名あたり)

(時期) 9～10月 (新米を堪能するため)

- ・溜池や調整池など、開拓時代から今日まで美唄の米づくりを支えてきた歴史的な素材 (宝物) を時間軸の中に位置づけ、農業や農業関連社会資本などを総合的に学ぶ  
⇒ (歴史を探訪し、産業の歩みや社会資本の役割を学ぶ)
- ・歴史だけでなく、とれたての新米おにぎりを自分で握って食べたり、米粉のお菓子を試食し、美唄の食を実際に味わう。⇒ (食のおいしさを楽しむ)
- ・ピパの湯ゆ〜りん館で一日の疲れを癒したり、ピパマートやアンテナショップPiPaでの買い物なども満喫できる。⇒ (健康増進、安全・安心な食材をお持ち帰り)

・様々な体験メニューを中心に楽しむもの

(ツアー名称) 米づくりの魅力をまるごと体験 in 美唄～雪蔵工房の見学から農業体験まで!!～

～自然にやさしいエネルギーを知り、農業体験で感動無限大～

時間	場 所	内 容
9 : 00	札幌駅北口 集合、出発	札幌市内一道央自動車道—三笠IC下車—国道12号を利用。なお途中高速SAでのトイレ休憩。 車中で雪蔵工房を見学する前の予備知識についてレクチャー（映像など）
10 : 30 ～ 11 : 00	雪蔵工房	環境に優しい雪氷エネルギーを活用した玄米貯蔵施設 雪蔵工房の見学と解説。 おいしいお米は、田植え、草取り、稲刈り、貯蔵を上手に行うことで生まれる。特に、貯蔵は品質を維持し、味を良くする上で大事。美唄のお米は、雪氷冷熱を活かして、おいしさがアップしていることを学ぶ。
11 : 00 ～ 12 : 00	茶志内	田んぼでの体験 *季節に合わせたメニューを用意。春は田植え、夏は草取り、秋は稲刈り・収穫、冬は稲藁を使った体験など。田植えから収穫～貯蔵というお米の生産の仕組みを理解した上で農作業を体験。
12 : 30 ～ 14 : 00	農場 (昼食)	おにぎりは雪蔵工房で貯蔵された米を活用。米粉ザンギや農場で採れた新鮮野菜など地場の食材にこだわった昼食。参加者と農家が交流し、食材の良さを発見、地域農業を応援。
14 : 15 ～ 14 : 45	アンテナショッ プ PiPa	昼に味わった地場産の食材やお土産などの買い物（美唄の良食味米も購入可能）。一度食べたものだから安心して買えます。新たな商品や食材の発見も楽しみ。
15 : 00 ～ 15 : 30	溜池発祥之地	米づくりとの関係をわかりやすく解説。溜池から調整池や用水路までの農業用水の利用の変遷など、時間軸の中で理解。碑の前で記念撮影
	樺戸道路 (白樺並木)	開削の歴史などについて解説し、車窓の景観とともに楽しむ。適宜途中下車し、歴史に思い巡らせた散策や、樺戸連山、黄金色に輝く田んぼなど景観を楽しむ
16 : 00 ～ 17 : 00	宮島沼水鳥・ 湿地センター	宮島沼周辺の散策やマガンの観察、ふゆみずたんぼの学習や農業体験など季節に合わせて様々なメニューを体験。宮島沼の歴史や環境保全の仕組みの学習、周辺の農業とのつながりなど、学芸員から解説を聞く。車中では美唄の魅力（地域資源）のPR(DVDの映像など)。経路に変化をもたせるため帰路は国道275号を利用（途中トイレ休憩を含む）
18 : 30	札幌駅北口到着	解散

<ツアーの特徴>

(料金) 5,000～6,000円 (大人1名あたり)

(時期) 通年 (低温貯蔵米は通年で新米の風味を保つ。

農業体験も季節に合わせたメニューを用意)

- ・環境に優しい最先端の玄米貯蔵施設 雪蔵工房の見学⇒(産業観光の魅力も満喫)
- ・米づくりの過程を理解した農業体験⇒(季節に合わせ選択可能な様々な体験メニュー)
- ・昼は地場食材を堪能し参加者や農家とのふれあいや交流を楽しめる⇒(おいしさに感謝)
- ・宮島沼で環境学習や農業体験、学芸員からの解説⇒(環境の大切さを知り、体験で感動)

## 5. 結び

平成26年度は、現地調査をもとに、一定の条件（与件）を設定し、企画商品の開発に向けた検討を行ったが、時間や行程などを明確にした魅力あるコース自体の設計という面で概括的な整理に止まったほか、バスの借り上げ料、農業体験や立ち寄り先での料金などを積算し、最小催行人員を設定した上での損益分岐点を踏まえた料金の設定などができず、商品の詳細設計としては必ずしも十分なものではなかったと考えている。

こうした問題点はあるものの、今回の提案は、グリーン・ツーリズムをはじめ、ゆーりん館、ピパマート、宮島沼などの既存の観光資源をもとに、農業の歩みや溜め池、道路などの社会資本が整備されてきた経過やそれぞれの施設の意義などについて、時間軸（歴史）と空間軸（面的な広がり）を適切に組み合わせることにより、これまでとは異なる新たな魅力を物語（ストーリー）として提供するものであり、観光に関連する事業者に加え、農業者や郷土史家、市役所などの関係者が保有するノウハウや資料を有効に活用することによって、大きな投資をすることなく、既存の事業や取り組みの延長線上で比較的容易に商品化を図っていくことが可能と考えられる。

また、こうした事業者の連携した取り組みが農商工連携といった6次産業化を促進することになり、観光の魅力の創出に加え、業態の結びつきを強め、市内の企業間の取引を拡大し、経済の域内循環を高めるなど、地域経済の活性化にも大きく貢献するものと期待される。

今後の課題としては、まず、コースの設定に当たって、地域のこだわりや物語化（地域ブランド化）を十分意識し、美唄の基幹産業である農業に加え、環境・エネルギー、食育などのテーマを設定し、これに対応した資源の組み合わせ（その歴史を含む）によって商品の設計を幅広い視点から行うことにより、美唄市の南部地域に止まらず、全市的なレベルで地域資源の有効活用につなげ、道道美唄富良野線の開通に伴い、通過型から、滞留型の観光交流拠点に転換していくといった目標をもって一つずつ着実に取り組むことが必要である。

### ●テーマによる資源組み合わせの例

テーマ例	コースのイメージ
（食育）	新米一米粉パン—雪蔵工房—ハスカップ—スイーツ—中村のとりめし
（農業）	溜池—調整池、北海幹線用水路—土壌改良—良食味米のおぼろづきの田んぼ—雪蔵工房
（環境・エネルギー）	炭鉱の開発、生産（昭和19年は出炭量全国一）—雪氷冷熱エネルギー（雪蔵工房）—農業地域（ダム機能を果たしている）

また、料金の設定は、商品化や事業化を図る上で最も基本的な要件であり、札幌圏から同様な時間、距離の関係にある他の地域の観光商品と比較するなど、魅力の面も含め価格競争力のあるものにしていくことが欠かせない。

いずれにしても、商品化は地元が主体的に取り組むべきものであり、特に、札幌圏からの日帰りツアーにおいては、モニターツアーなどの社会実験などの手順を踏むことなく、最初から商品化を目指すことが不可欠であり、今回の調査結果や提案などを参考にいただき、事業者や経済団体などの関係者が連携し、市役所がこれを側面から支援するといった適切な役割分担を図りながら、事業者の資本と責任のもとで、商品化に向けて鋭意努力されることを期待して止まない。

<研究センター員>

センター長	井上 久志	観光学部
副センター長	佐久間 章	スポーツ人間学部
	斎藤 正紀	観光学研究科 観光学部
センター員	丹治 和典	観光学研究科 観光学部
	宮武 清志	観光学研究科 観光学部
	井上 博登	観光学研究科 観光学部
	千葉 里美	観光学部
	横川 大輔	観光学部
	小林 純	短期大学部

<執筆者>

越塚 宗孝	札幌国際大学
丹治 和典	札幌国際大学
斎藤 正紀	札幌国際大学
井上 博登	札幌国際大学
千葉 里美	札幌国際大学
森 雅人	札幌大谷大学
橋口 友和	北海道斜里高等学校

---

## 札幌国際大学北海道地域・観光研究センター年報 第7号

---

2015（平成27）年3月 発行

編集 札幌国際大学北海道地域・観光研究センター  
発行 札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4番1号  
電話011-881-8844 FAX011-885-3370

---